青森市埋蔵文化財発掘調査報告書　第37集

新町野遺跡

発掘調査報告書

平成9年度

青　森　市　教　育　委　員　会

序

本書は、平成9年度、市道新町野野木線道路改良事業の実施に先立ち、当該路線内に所在する新町野遺跡の発掘調査を実施し、その成果をまとめたものです。

今回の調査によって、新町野遺跡は縄文時代前期および平安時代の集落跡の一部であることが確認され、当時の生活を知る上で貴重な資料を数多く得ることができました。

これらの調査成果が、今後、埋蔵文化財の保護・活用、さらには本市の歴史解明の一助となれば幸いと存じます。

最後となりましたが、ここに本書を刊行できましたことは、ひとえに関係各機関・諸氏のご指導、地元町会並びに地権者の皆様のご協力の賜ものによるものと、深く感謝の意を表する次第であります。

平成10年3月

青森市教育委員会

教　育　長池　田　　敬

例　　言

1. 本書は、平成９年度に実施した市道新町野野木線道路改良事業に係る新町野遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した新町野遺跡は、青森県遺跡台帳に遺跡番号 01161 として登録されている周知の遺跡である。
3. 本書の執筆・編集は青森市教育委員会が行い、執筆者名は、依頼原稿では文頭に記し、その他は文末に記している。
4. 図版番号及び表番号は、原則的に「第〇図」「第〇表」としたが、依頼原稿については「図〇」とした。
5. 本報告書の土層の注記については、『新版標準土色帖』（小川正忠・竹原秀雄 1993）に準拠した。
6. 挿図の縮尺は各図ごとに示し、各種遺構平面図の方位は磁北を示した。なお、写真図版の縮尺については、統一を図っていない。
7. 竪穴式住居跡の主軸方向は、原則としてカマドの主軸方向によった。カマドの主軸方向は煙道の中心と焚口の中央を結んだ線を磁北により計測した。なお、カマドが住居跡の辺に平行していない場合には、その辺を住居跡の主軸方向とした。
8. 土器の縄文原体に関する用語については、『日本先史土器の縄文』（山内清男 1969）に準拠した。なお、L｛$^{r}_{r}$ は LR、R｛$^{l}_{l}$ は RL と略した。
9. 石器の石質鑑定は、青森県教育センター指導主事　工藤一彌氏に依頼した。
10. 出土遺物及び記録図面・写真関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
11. 発掘調査の実施にあたっては、調査地区地権者および地元町会の多くの方々にご協力をいただき、また、発掘調査並びに本報告書作成にあたっては、次の機関・諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。ここに深く感謝の意を表する次第である。（順不同・敬称略）
青森県教育庁文化課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県立郷土館・安中市教育委員会・大成建設・成俊工業・葛西勵・工藤清泰・櫻田隆・千田茂雄・大工原豊・高橋潤・中嶋友文・奈良岡淳

凡　　例

本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーントーン等は以下のとおりである。

1.　図中で使用したアルファベット

　　P…土器、S…石器、LB…ロームブロック、Pit…ピット

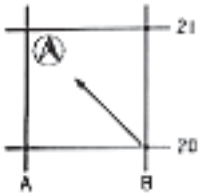
2.　図中で使用したスクリーントーン（LETRASET　JAPAN）

3.　図中・表中で使用した略称

　　第○号竪穴式住居跡…○H、第○号土坑…○土

　　第○号溝状遺構…○溝

4.　グリッドの呼称（例）　B－20



5.　土器実測図の表現法法

6.　縄文時代に属する土器の分類

　　第Ⅰ群　縄文時代前期末葉～中期初頭に位置付けられるもの

　　第Ⅱ群　縄文時代後期初頭～前葉に位置付けられるもの

　　第Ⅲ群　縄文時代晩期に位置付けられるもの

目　　次

序
例言
凡例
目次
図版目次
写真目次
第Ⅰ章　調査の概要
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
　第３節　調査方法 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　歴史的環境 …… 6
　第２節　周辺の遺跡 …… 6
　第３節　遺跡付近の地形・地質 …… 8
　第４節　遺跡の層序 …… 11
第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物
　第１節　縄文時代の遺構と遺物
　　1. 検出遺構
　　(1) 竪穴式住居跡 …… 13
　　(2) 土坑 …… 17
　　2. 出土遺物
　　(1)土器 …… 43
　　(2) 石器 …… 54
　　(3) 土製品 …… 55
　第２節　平安時代の遺構と遺物
　　1. 検出遺構
　　(1)竪穴式住居跡 …… 58
　　(2) 溝状遺構 …… 61
　　2. 出土遺物
　　(1) 土師器 …… 61
　　(2) 須恵器 …… 63
　　(3) 土製品 …… 63
第Ⅳ章　分析と考察 …… 64
まとめ …… 70
引用・参考文献
出土遺物観察表
写真図版

図版目次

第 1 図　新町野遺跡及び周辺の遺跡位置図……4
第 2 図　地形図及びグリッド配置図……5
第 3 図　基本層序……11
第 4 図　遺構配置図……12
第 5 図　第1号竪穴式住居跡……14
第 6 図　第1号竪穴式住居跡出土遺物（土器）……15
第 7 図　第1号竪穴式住居跡出土遺物（石器）……16
第 8 図　第1～3・5号土坑……26
第 9 図　第4・8号土坑……27
第10図　第6・7・10・12号土坑……28
第11図　第13～15号土坑……29
第12図　第16～19号土坑……30
第13図　第20・22～26号土坑……31
第14図　土坑出土遺物（土器1）……32
第15図　土坑出土遺物（土器2）……33
第16図　土坑出土遺物（土器3）……34
第17図　土坑出土遺物（土器4）……35
第18図　土坑出土遺物（土器5）……36
第19図　土坑出土遺物（土器6）……37
第20図　土坑出土遺物（土器7）……38
第21図　土坑出土遺物（土器8）……39
第22図　土坑出土遺物（石器1）……40
第23図　土坑出土遺物（石器2）……41
第24図　土坑出土遺物（石器3・土製品）……42
第25図　遺構外出土遺物（土器1）……48
第26図　遺構外出土遺物（土器2）……49
第27図　遺構外出土遺物（土器3）……50
第28図　遺構外出土遺物（土器4）……51
第29図　遺構外出土遺物（土器5）……52
第30図　遺構外出土遺物（土器6）……53
第31図　遺構外出土遺物（石器1）……56
第32図　遺構外出土遺物（石器2）……57
第33図　第2号竪穴式住居跡……59
第34図　第2号竪穴式住居跡出土遺物……60
第35図　第1～3号溝状遺構及び第2号溝状遺構出土遺物……62
第36図　遺構外出土遺物……63
第37図　第Ⅰ群土器期と第Ⅱ群土器期の遺構配置……66
第38図　第1号竪穴式住居跡の変遷……66

写真目次

写真1　調査状況・セクションほか……79
写真2　縄文時代の竪穴式住居跡・土坑……80
写真3　縄文時代の土坑……81
写真4　縄文時代の土坑……82
写真5　縄文時代の土坑……83
写真6　縄文時代の土坑……84
写真7　縄文時代の土坑……85
写真8　縄文時代の土坑・平安時代の竪穴式住居跡……86
写真9　平安時代の竪穴式住居跡・溝状遺構・縄文時代の遺物出土状況……87
写真10　第1号竪穴式住居跡出土遺物（土器・石器）…88
写真11　土坑出土遺物（土器1）……89
写真12　土坑出土遺物（土器2）……90
写真13　土坑出土遺物（土器3）……91
写真14　土坑出土遺物（土器4）……92
写真15　土坑出土遺物（土器5）……93
写真16　土坑出土遺物（石器1・土製品）……94
写真17　遺構外出土遺物（土器1）……95
写真18　遺構外出土遺物（土器2）……96
写真19　遺構外出土遺物（土器3）……97
写真20　遺構外出土遺物（土器4）……98
写真21　遺構外出土遺物（土器5・石器）……99
写真22　第2号竪穴式住居跡・第2号溝状遺構・遺構外出土遺物……100

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経過

青森市建設部（以下、建設部）は、市道新町野野木線道路改良事業を計画し、青森市教育委員会（以下、当委員会）に対し、道路建設予定地内について、埋蔵文化財包蔵地の所在有無の確認がなされた。これを受けて当委員会で確認をしたところ、当該予定地内に、周知の埋蔵文化財包蔵地である新町野遺跡が所在していることが判明した。当委員会では、埋蔵文化財保護の立場から、埋蔵文化財包蔵地の現状保存のため、事業計画予定地の変更並びに見直しの要望と、もしそれが困難な場合は、記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答をした。

その後、建設部と当委員会で、その取り扱いについて協議を行ったが、事業計画の変更は困難であるとの結論に至り、事前の発掘調査による記録保存が図られることとなった。

建設部より、平成8年4月11日付青市道第54号で、当委員会に発掘調査の依頼があり、これを受けて当委員会で協議を重ねた結果、文化財保護と開発事業の円滑な調整を図るため、受諾することに至り、平成8年4月15日付青市教委社第140号において、建設部に受諾の旨の回答を行った。

建設部と協議の結果、現地での発掘調査期間を平成8年度に実施しようとしたが、その後、建設部から当該事業予定地の買収が進んでいない旨の連絡があり、再度協議を重ねた結果、調査期間を平成9年6月2日から同年9月4日までとし、調査を実施するに至った。予算措置は、建設部において計上することとした。

第2節　調査要項

1．調査目的

市道路課が計画している新町野野木線道路改良事業に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存をおこない、地域社会の文化財の活用に資する。

2．遺跡名及び所在地

新町野遺跡（しんまちのいせき）

青森市大字合子沢字松森298－2ほか

3．発掘調査期間

平成9年6月2日～同年9月4日

4．調査対象面積

3,500㎡

5．調査委託者

青森市建設部

6．調査受託者

青森市教育委員会

7．調査担当機関

青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

8．調査指導機関

青森県教育庁文化課

9．調査協力機関

青森県埋蔵文化財調査センター

10．調査体制

調査指導員	村越　　潔	青森大学考古学研究所所長兼教授	（考　古　学）
調　査　員	三辻　利一	奈良教育大学教授	（分析化学）
〃	小山　陽造	八戸工業高等専門学校名誉教授	（分析化学）
〃	市川　金丸	青森県考古学会会長	（考　古　学）
〃	工藤　一彌	青森県教育センター指導主事	（地　質　学）
〃	徳差　義男	青森市立浪打小学校教諭	（考　古　学）

調査協力員　山上　義昭　地主代表

調査事務局　青森市教育委員会

教育長	池田　敬
生涯学習部長	永井　勇司
社会教育課長	山田　章
埋蔵文化財対策室長	遠藤　正夫
室長補佐	福士　敦
埋蔵文化財係長	石岡　義文
主事	田澤　淳逸（調査担当）
〃	小野　貴之
〃	木村　淳一
〃	児玉　大成（調査担当）
〃	沼宮内　陽一郎
〃	設楽　政健

第３節　調査方法

調査区の設定にあたっては、工事用杭No.26の幅杭を結ぶ東西方向の直線を、調査区短軸方向の基準線（25ライン）とし、これに直行する南北方向の線を、長軸方向の基準線として調査区全体に4m×4mのグリッドを設定した。グリッド杭の表示は、工事用杭No.26を基準として、北へ26、27、28、南へ24、23、22、の順に算用数字を付し、東にA、B、C、の順にアルファベットを付した。各グリッドの呼称はアルファベットと算用数字を組み合わせて示した（凡例）。具体的にはそのグリッド南東隅のグリッド杭の表示によるものとした。なお南北方向の基準線は、磁北から東に7°偏っている。

測量原点（B. M.）は、工事用に設置したKBM. 3（27.252m）を基準とし、ここから原点移動を行い、標高29.000mの原点を設置した。これをもとに、高低差およそ8m、延長150mの調査区に対処するため、さらに2カ所設置した。

発掘調査は、工事路線内を調査対象範囲とし、全面調査を原則として実施した。調査では、試掘的に先行して部分的に粗掘りを進めた。その結果、遺物の分布が認められる範囲内では、土層の堆積状況を観察するため、適宜セクションベルトを設けてグリッド単位で粗掘りを実施し、遺物の出土がみられない場所では一部重機も併用した。

遺物の取り上げは、原則として遺構内、遺構外出土遺物ともに各層ごとに一括し、必要に応じて番号を付して実施した。

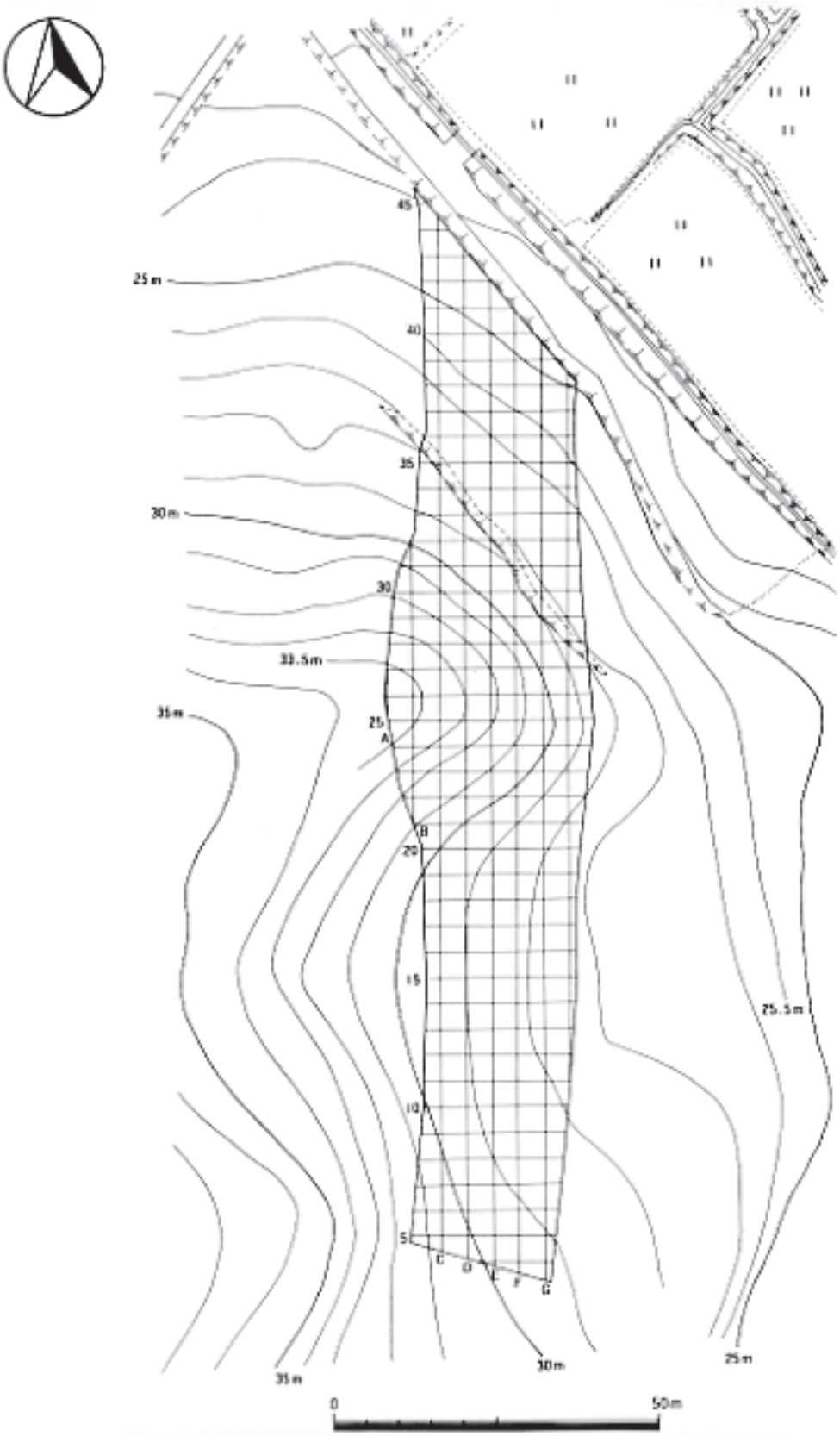
遺構の精査は、原則として竪穴式住居跡は四分法、土坑は二分法によって土層観察用のベルトを設定し、実施した。

遺構の実測図は、20分の1を原則とし、簡易遣方測量と平板測量を併用して行い、平面図及び断面図等を作成した。

写真撮影にあたっては、遺構の確認状況・土層断面・遺物出土状態・完掘状況や、調査状況等を中心に撮影し、フィルムは35mmのモノクローム、カラーリバーサルを併用した。

（田澤　淳逸）

第１図　新町野遺跡及び周辺の遺跡位置図 (S=1／50,000)



第 2 図　地形図及びグリッド配置図

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　歴史的環境

大字名であり遺跡名でもある「新町野」は、江戸期～明治22年までは村名、同年から横内村の大字名、昭和30年からは青森市の大字名となる（『角川日本地名大辞典』）。

この新町野は、青森平野中央部の南寄りに位置し、南側には八甲田山から延びる火山性の台地に囲まれ、新町野遺跡は、その一つの台地上、市街地から南に約7㎞、標高20～35ｍの台地上に立地している（第1図）。

本遺跡は、市内では161番として登録されており、昭和54年度に作成された青森県埋蔵文化財包蔵地調査カードによると、縄文時代中期と奈良・平安時代の複合遺跡であることが報告されている。その後、平成５年度に青森県教育委員会によって実施された分布調査により、縄文時代前期と後期の遺物を採集するとともに本遺跡の範囲が拡張された（青森県教育委員会1994b）。

平成７年度には、今年度の調査区域の南西にあたる部分を青森県埋蔵文化財調査センターが、青森中核工業団地整備事業に先立つ試掘調査を実施しており、遺構の確認と遺跡範囲の把握がされた。平成８、９年度には、同センターにより発掘調査が実施され、縄文時代および平安時代の集落の一部が確認された。

また、当委員会では平成８年度に、今年度の調査区域の北西にあたる部分を、牛館川防災調整池に係る掘削工事に先立ち試掘調査を実施している。調査の結果、対象面積25,000㎡のうち1,500㎡の実施面積に対し、縄文時代の竪穴式住居跡６軒、平安時代の竪穴式住居跡８軒、土坑32基、埋設土器遺構４基、竪穴状遺構１基、溝状遺構２条、ピット32基を確認した。出土遺物は、縄文時代の円筒下層ｄ式土器、十腰内Ⅰ式土器、平安時代の土師器、須恵器などが出土し、段ボール箱１箱分に相当する。調査対象区の北端部では平安時代の集落跡の様相を呈し、丘陵頂部にかけては縄文時代前期末葉の集落跡が展開する複合遺跡であると推定した（青森市教育委員会　1997c）。

今年度、当委員会は前記の経緯から市道新町野野木線道路改良事業に係る掘削工事に先立ち、約3,500㎡の調査区の発掘調査を実施した。

第２節　周辺の遺跡

青森市内には平成８年度末現在で287カ所の遺跡が登録されており（青森市教育委員会　1997e）、本遺跡を中心とする半径2㎞以内の周辺の遺跡は、本遺跡を含め17カ所確認されている。

本遺跡と同じ合子沢川と牛館川の間にある台地上の南側に野木遺跡、山口遺跡、西側に野木沢田遺跡が東側には合子沢松森（1）遺跡、合子沢（2）遺跡が、牛館川をはさむ西側の台地上には葛野（1）遺跡、葛野（2）遺跡が、合子沢川をはさむ東側の台地上から低丘陵部には、雲谷山吹（3）遺跡、桜峯（1）遺跡、横内猿沢（1）遺跡、桜峯（2）遺跡、構内（2）遺跡、横内遺跡、構内城跡、野尻館遺跡が、さらに東側の横内川と駒込川の間の台地上には、四ツ石（3）遺跡が所在する。各遺跡の概要は次表のとおりである。

本遺跡と周辺遺跡の概要

番号	遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	種　別	主　な　時　代	文　　献
1	161	新町野	新町野字菅谷	集落跡	縄文(前)、平安	青森市教育委員会　1997c
2	261	合子沢松森(1)	合子沢字松森	散布地	縄文	
3	262	合子沢松森(2)	合子沢字松森	散布地	平安	
4	210	野木	野木字山口 野木字野尻 合子沢字松森	散布地 集落跡	縄文 平安	
5	271	山口	合子沢字松森 野木字山口 小畑沢字小杉	散布地	縄文	
6	216	野木沢田	野木字沢田	散布地	平安	
7	217	葛野(1)	大別内字葛野	散布地	縄文	
8	218	葛野(2)	大別内字葛野	集落跡	縄文(前)、平安	青森市教育委員会　1997d
9	285	雲谷山吹(3)	雲谷字山吹	散布地	縄文	
10	207	桜峯(1)	横内字桜峯	集落跡	縄文(前・中・後）、平安	青森市教育委員会　1996 〃　1997a
11	208	桜峯(2)	横内字桜峯 横内字亀井	集落跡	縄文(前・中・後)	青森市教育委員会　1995b
12	284	横内猿沢(1)	横内字猿沢	散布地	平安	
13	215	四ツ石(3)	四ツ石字里見	散布地	縄文	
14	173	野尻館	野尻字野田	館跡	中世	
15	174	横内城跡	横内字亀井	館跡	中世	
16	164	横内	合子沢字山崎	散布地	縄文(前)	三宅・石岡　1969
17	206	横内(2)	合子沢字山崎	集落跡	縄文(前・中）、平安	青森市教育委員会　1995a

第３節　遺跡付近の地形・地質

青森県教育センター指導主事　　工藤　一彌

青森平野は新生代第四紀（約170万年前～現在）に形成された海岸平野であり、東西約10㎞、南北約5㎞のほぼ直角三角形を呈している。北は陸奥湾に面し、南～東は八甲田山につらなる火山性の台地、西は標高50～150ｍの比較的緩傾斜の開析が進んだ丘陵に囲まれている。火山性の台地は北～北西に流れる入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川などの河川によって区分される。平野部と西部の丘陵地との境界には「入内断層」と呼ばれる南北方向の大きな断層が存在している。この断層は第四紀洪積世初頭（約170万年前）から活動を始め、断層の東側が最大で800ｍ以上も北に落ち込み、南東の後背地から運ばれた大量の砕屑物により非常に厚い地層が形成され、海岸平野が形成されていった。

南東側の火山性台地は、八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」から構成されており、八甲田火山地の北方につづき標高は40～500ｍである。八甲田牧場（標高500ｍ）、雲谷平（200ｍ）、梨の木平（200ｍ）、青森ゴルフ場（150ｍ）、月見野霊園（100ｍ）など緩傾斜の平坦面を広く残しており、傾斜は荒川左岸の小牧野遺跡南方で約３度、遺跡南方の青森カントリークラブゴルフ場付近で約２．５度、平均で約３度である。この台地は入内川、荒川、合子沢川、横内川、駒込川など北西～北に流れる河川によって開析されている。溶結凝灰岩が侵食に弱いためいずれの河川の谷壁も25～40度と他の開析谷に比べて著しく急傾斜となっている。八甲田火砕流堆積物は「入内断層」によってできた低地を埋め、緩やかな勾配で北西側に傾斜し、横内～駒込付近から平野に没し、平野部の試錐データによると断層の東側で1000ｍ、市の中心部では500ｍ、市東部の矢田前付近では300ｍの深さまで達している。

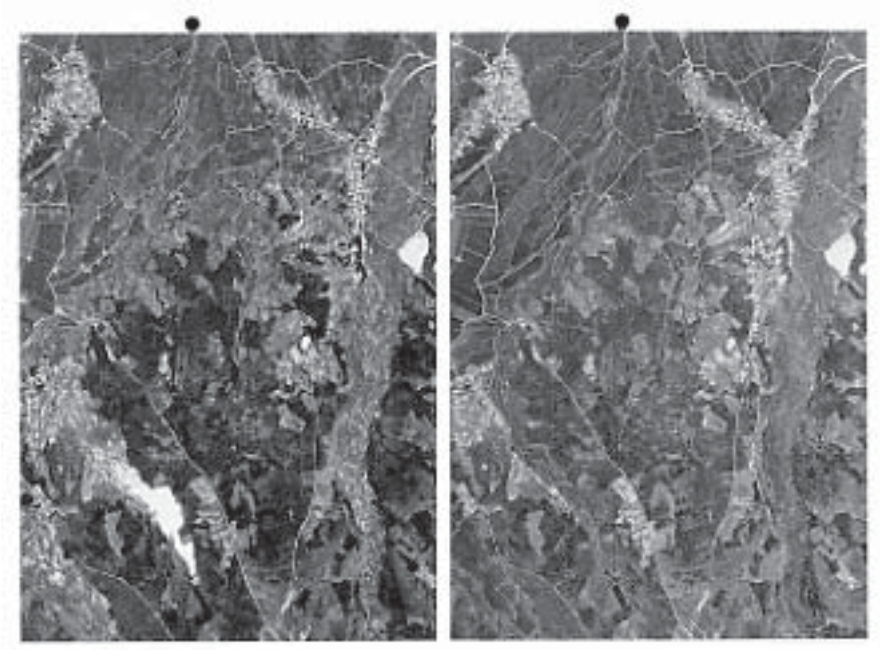
西部の丘陵地は開析がすすみ、稜線の標高は50～150ｍで緩やかに北に傾斜している。砂・砂質シルト層からなる洪積世の岡町層を基盤に砂・砂礫や八甲田火砕流堆積物などが重なり、最上位に火山灰層が堆積している。八甲田火砕流堆積物は村岡・長谷（1990）によると、大きく２つに区分され、そのうち１期のものには水底火砕流堆積物として産する場合があり、従来の鶴ヶ坂層がこれに相当するという。2期のものは従来の田代平溶結凝灰岩に相当し、陸上火砕流堆積物が主体である。村岡・長谷（1990）はＫ－Ar法により八甲田第1期火砕流堆積物を約65万年前、八甲田第2期火砕流堆積物を40万年前の活動としている。

本地域の火山灰層は沢田（1976）により３層に区分され、下位から三内火山灰・大谷火山灰・月見野火山灰と呼ばれている。下位の三内火山灰は中部と最下部に浮石帯をもつ赤褐色粘土質降下火山灰で、中位の大谷火山灰は赤褐色粘土質降下火山灰と茶褐色浮石質降下火山灰よりなり、分布範囲は狭い。上位の月見野火山灰は最も広範囲に分布しており、黄褐色浮石質火山灰からなり、浮石流～火山灰流の部分も多い。

本遺跡は標高20～35ｍであり、西が荒川、東は合子沢川の二つの河川に挟まれている火山性台地の北端にあり、平野部との境界部に位置し、北側に緩く傾斜した台地が平野の下に埋没していく尾根の部分に相当する。遺跡の基盤の地層は遺跡内には露出してないが、遺跡に隣接する地域では最下位に八甲田火砕流堆積物が存在しており、本遺跡の直下にも分布しているものと考えられる。八甲田火砕流堆積物は、塊状無層理で灰色を特徴とし、赤紫色を帯びる所も多い。径が1㎜前後の石英や斜長石を多量に含み、軽石や本質レンズは比較的少ないため、風化面では石英などの鉱物粒の多いことが特徴である。遺

跡に隣接する北方の平野部では、八甲田火砕流堆積物の上にクルミ、トチ等の炭化物を含む沖積世の泥炭層が存在し、南方の工業団地造成地では、八甲田火砕流堆積物の上位に再堆積による縞状の白色粘土層等が分布している。八甲田火砕流堆積物の上位にはローム質の火山灰層が重なり、最上位には黒色土が分布している。遺跡付近の火山灰層は二層に区分され、上位の黄褐色火山灰層は月見野火山灰と考えられ、下位に存在する赤褐色の粘土質火山灰は大谷火山灰と考えられる。基盤の八甲田火砕流堆積物の層厚は50～100mに見積もられており、荒川や駒込川の中流部などのように下位の第三系は比較的浅いところにあるものと推定されるが、遺跡周辺では下湯ダム付近で確認できる。青森平野周辺では野内川上流一帯、駒込川中流、雲谷峠付近、荒川中上流には新第三紀中新世中期の地層が分布するので、本遺跡の第四系の下位にも同様の地層が分布しているものと推定できる。上位の火山灰層は、地形の起伏によって厚さが異なり、凸部で薄く、凹部で厚くなっており、最上位の黒色土でも同様の傾向が認められる。

なお、地形区分では1948年・1969年・撮影の航空写真を使用した。



国土地理院撮影　1969年　　空中写真（実体視）

引用・参考文献

北村信他　1972　青森県の地質　（青森県）

沢田庄一郎　1976　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）（青森県教育委員会）

沢田庄一郎　1976　三内丸山（Ⅱ）遺跡発掘調査報告書　（青森県教育委員会）

沢田庄一郎　1978　近野遺跡発掘調査報告書（Ⅳ）（青森県教育委員会）

池田敬　1979　青森市の自然　（青森市教育委員会）

青森県　1982　土地分類基本調査「青森西部」

青森県　1983　土地分類基本調査「青森東部」

村岡洋文・高倉伸一　1988　10万分の１八甲田地熱地域地質図・説明書　（地質調査所）

村岡洋文・長谷紘和　1990　5万分の１地質図幅　黒石地域の地質　（地質調査所）

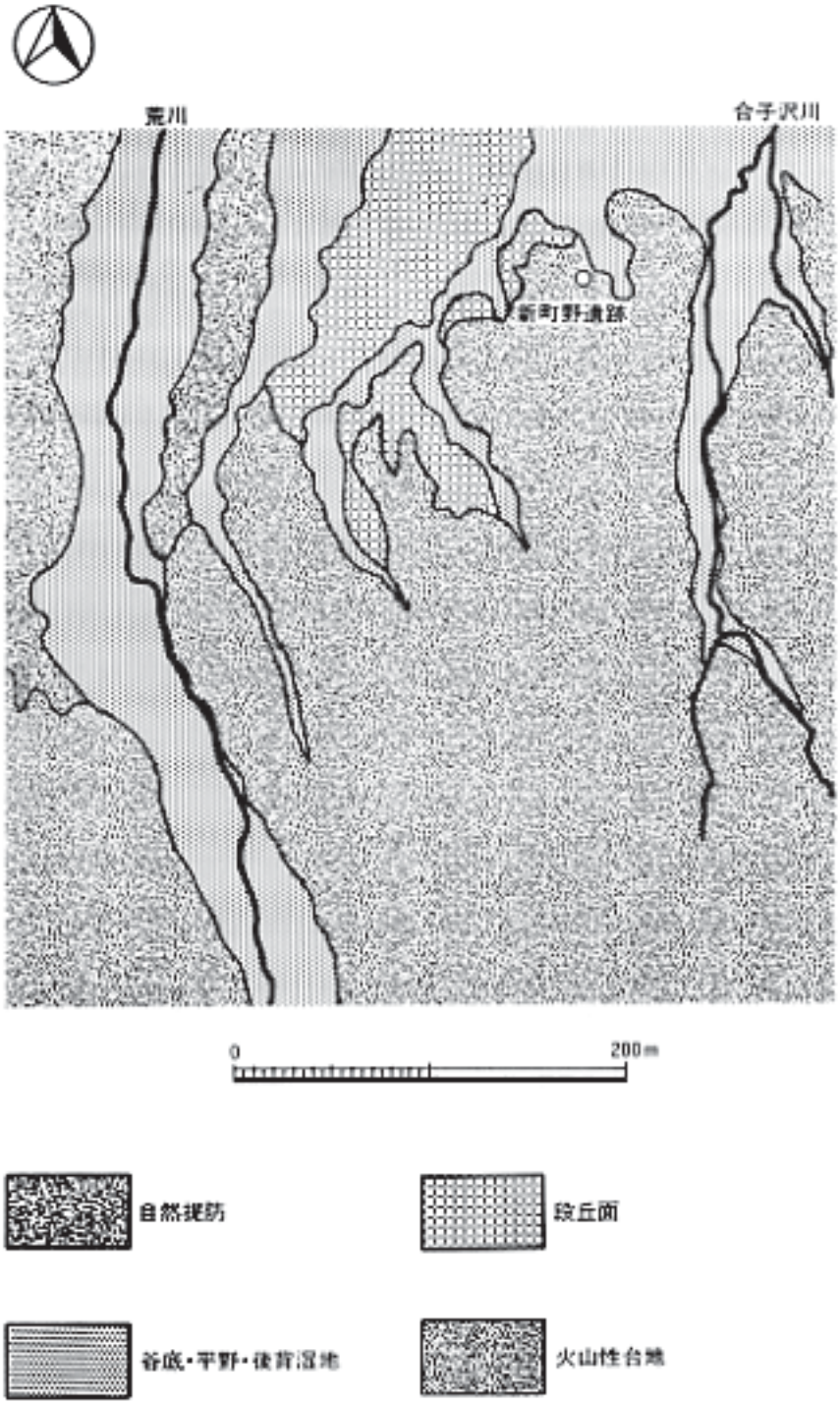


図１　地形分類図

第４節　遺跡の層序

今年度調査した新町野遺跡における基本的な層序は、下図のとおりである。また、堆積物と土壌の概要は以下に記した。

第Ⅰ層：主に黒褐色を呈している。耕作土や盛土を一括した。

第Ⅱ層：主に黒褐色を呈している。平安時代に相当する遺物を中心に出土している。

第Ⅲ層：主に暗褐色を呈している。第Ⅱ層と第Ⅲ層の間には局部的に降下火山灰が堆積しており、粒子の粗い灰褐色のものが確認され、視覚的並びに触覚的に十和田ａ火山灰（To－a）と思われる。

第Ⅳ層：主に黒色を呈している。縄文時代に相当する遺物を中心に出土している。遺物は主に、標高30m以上区域で、約20cmの厚さの土層から出土している。それ以下の標高の区域では、60～80cmの厚さの土層が堆積し遺物は出土しなかった。

第Ⅴ層：主に暗褐色を呈している。ところどころにロームが含まれており、漸移層として捉えられる。無遺物層。

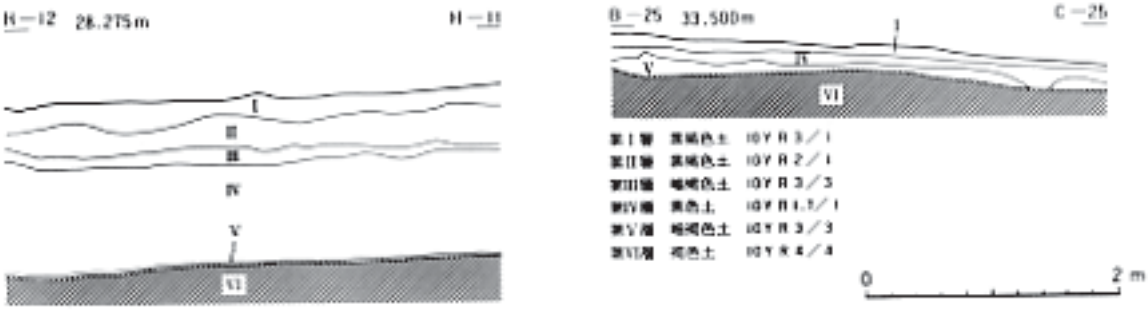
第Ⅵ層：主に褐色を呈している。地山ローム層。

なお、本遺跡において、本調査区の北西の地点を平成8年度に調査している（青森市教育委員会　1997c）が、本調査区との層序の対応は次のとおりである。

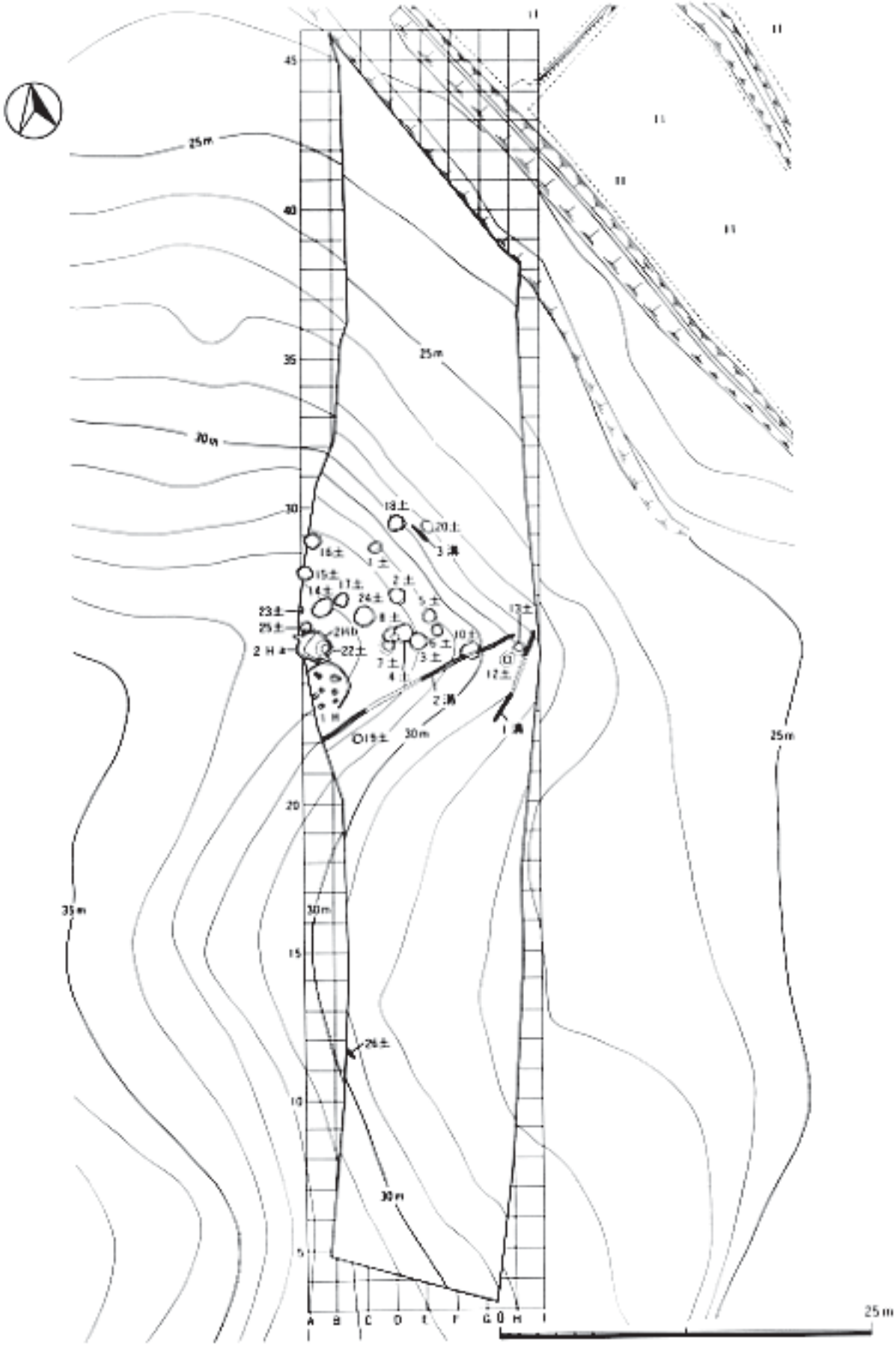
本　調　査　区　　平成８年度調査区

第Ⅰ層――――――第Ⅰ層
第Ⅱ層――――――第Ⅱ層
第Ⅲ層――――――第Ⅳ層
第Ⅳ層――――――第Ⅴ層
第Ⅴ層――――――第Ⅵ層
第Ⅵ層――――――第Ⅶ層

（児玉　大成）



第３図　基本層序


25m
30m
35m
45
40
35
30
20
15
10
5
A B C D E F G H I
18土
20土
3溝
16土
1土
15土
14土
11土
2土
24土
5土
23土
25土
21土
8土
17土
2H土
22土
6土
10土
7土
3土
4土
12土
2溝
1溝
19土
26土
25m

第４図　遺構配置図

第III章　検出遺構と出土遺物

本調査では、約3,500㎡の調査区から縄文時代の竪穴式住居跡1軒、土坑24基、平安時代の竪穴式住居跡2軒、溝状遺構3条を検出した。各検出遺構の所属時期については、「第IV章　分析と考察」でも記述してある。なお、遺物の詳細については、観察表として巻末に収めた。

第1節　縄文時代の遺構と遺物

1．検出遺構

(1) 竪穴式住居跡

第1号竪穴式住居跡（第5～7図）

［位　　置］A・B－23・24グリッドで検出した。基本層序第VI層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］調査区域外に続いているが、楕円形を呈する。短軸で6.20mを計る。

［　壁　］南向きの斜面に構築しており、壁高が最大で北側55cmを計り、南側では床面に接している。

［　床　］床面はほぼ平坦で、堅緻である。

［壁　　溝］なし。

［柱　　穴］9基検出した。主柱穴は、ピットの形状と規模から配置が考えられ、Pit1・4・6・9とPit2・5・7・8の2組が想定される。

［　炉　］2基検出した。炉aは地床炉、炉bは掘り込みをもつ炉である。

［堆　積　土］8層に分層でき、土壌がレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

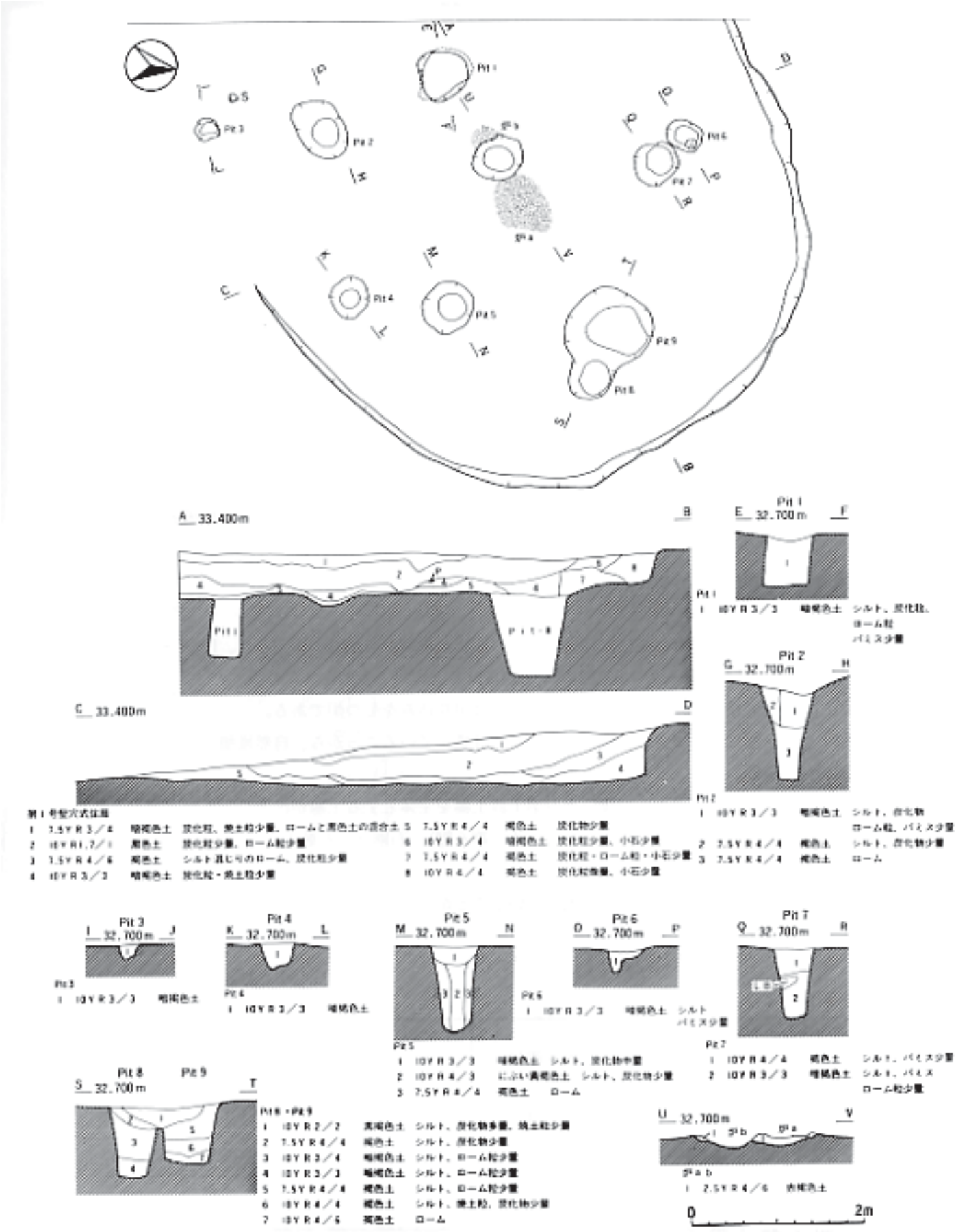
［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］土器は、床面および覆土から第Ⅰ群土器を主体とする土器が出土し、また、覆土上面から第Ⅱ群土器が1点出土している（第6図）。石器は、石鏃1点・石皿1点・敲磨器類5点が出土した（第7図）。

［時　　期］第Ⅰ群土器が床面から出土していることから、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

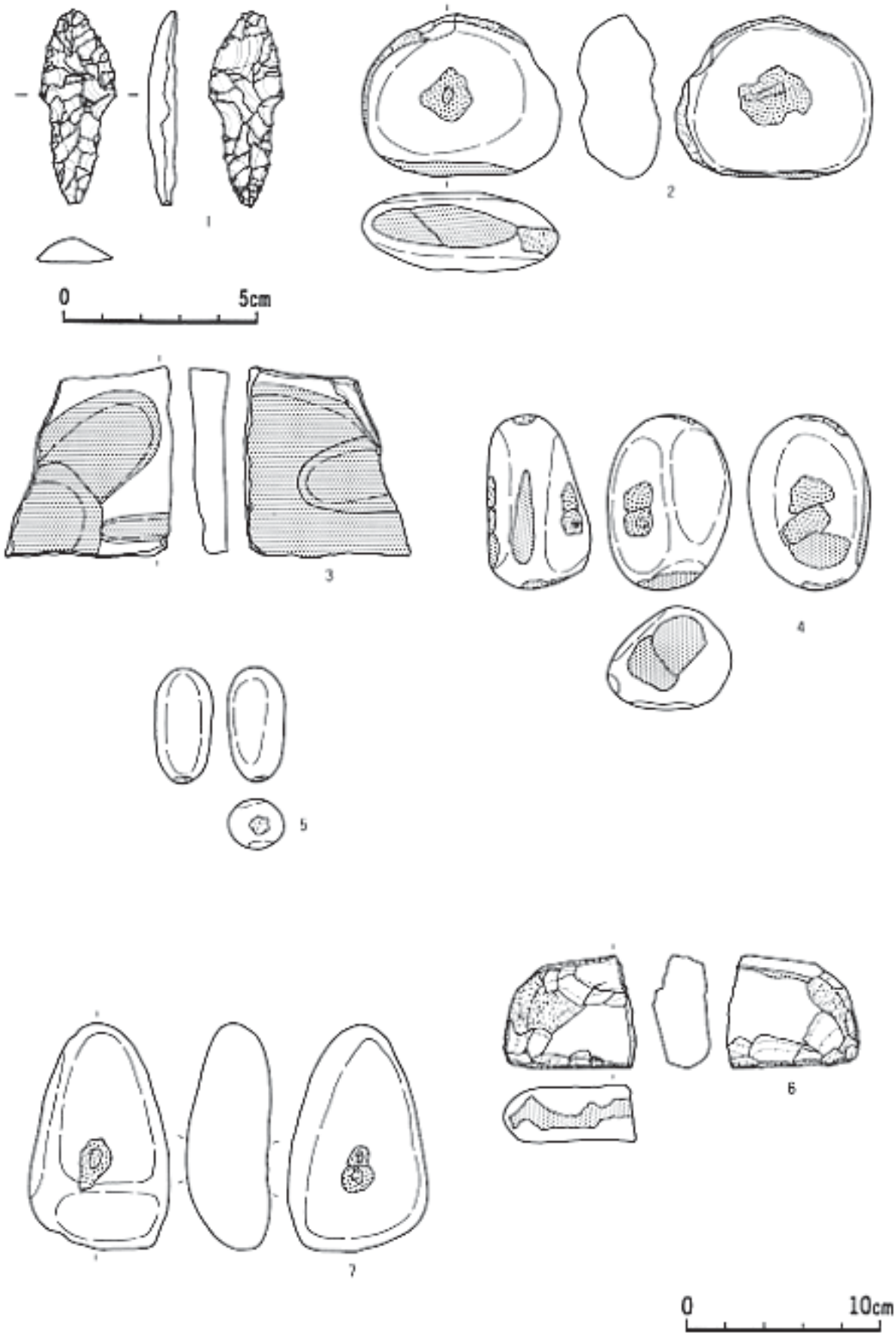
第1号住居跡内ピット一覧表

Pit番号	計測値　(cm)			堆積土	出土遺物	Pit番号	計測値　(cm)			堆積土	出土遺物
	長軸	短軸	深さ				長軸	短軸	深さ		
1	60	53	60	1層	土器・石器	6	44	33	25	1層	なし
2	70	53	112	3層	なし	7	54	50	81	2層	なし
3	30	25	16	不明	なし	8	55	53	84	7層	なし
4	50	45	30	不明	なし	9	105	95	70	7層	なし
5	63	55	100	3層	なし						



第5図　第1号竪穴式住居跡

第６図　第１号竪穴式住居跡出土遺物（土器）



第７図　第１号竪穴式住居跡出土遺物（石器）

(2) 土坑

第1号土坑（第8図）

［位　　置］D－28グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、暗褐色土のレンズ状の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は卵形を呈し、規模は東西179㎝、短軸153㎝、深さ約40㎝を計る。

［　壁　］底面から続き、わずかに立ち上がる。

［　底　］丸底形を呈する。

［堆　積　土］2層に分層でき、上層はローム質の土壌で人為的に埋め戻されている。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器の破片が2点出土した（第14図3・4）

［時　　期］出土遺物から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第2号土坑（第8図）

［位　　置］D・E－26・27グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は開口部で不整円形を呈し、底面は円形を呈する。規模は最大径で開口部220㎝、底面222㎝、深さ130㎝を計る。

［　壁　］断面形は基本的にフラスコ状を呈するが、急に立ち上がる部分もみられる。

［　底　］底面はほぼ平坦で堅緻である。

［堆　積　土］10層に分層でき、ほぼ全体的にシルト質の土壌がみられることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］床面には浅い皿状のくぼみから3条の溝が延びており、くぼみは溝よりも低位にある。

［出土遺物］第Ⅱ群土器を主体とする土器が出土した（第14図5～10）。

［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第3号土坑（第8図）

［位　　置］E・F－25グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］第4号土坑と重複しており、第4号土坑を切っている。

［平面形・規模］平面形は開口部で不整円形を呈し、底面は円形を呈する。規模は最大径で開口部248㎝、底面246㎝、深さ150㎝を計る。

［　壁　］断面形はフラスコ状を呈する。

［　底　］底面ははぼ平坦で堅緻である。

［堆　積　土］17層に分層でき、ほぼ全体的にシルト質の土壌と壁寄りにロームを主体とする土壌が堆積していることから自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］床面から、径 40 ～ 65㎝、深さ 7 ～ 10㎝の皿状のくぼみを 2 基確認した。
［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器および第Ⅱ群土器が出土した（第 14 図 2・11 ～ 17）
［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第 4 号土坑（第 9 図）
［位　　置］E － 25 グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重　　複］第 8 号土坑と第 3 号土坑と重複している。本土坑は第 8 号土坑を切っており、第 3 号土坑に切られている。
［平面形・規模］平面形は開口部で不整円形を呈し、底面は円形を呈する。規模は最大径で開口部 256㎝、底面 250㎝、深さ 155㎝を計る。さらに、その大部分には小型の土坑を有している。本土坑の付属施設として考えられる。
［　壁　］断面形は基本的にフラスコ状を呈するが、直立して立ち上がる部分もみられる。
［　底　］底面はほぼ平坦であり、堅緻である。
［堆　積　土］19 層に分層でき、上部の壁寄りから下部全体にロームを主体とする土壌が、その上層にシルト質の土壌が堆積し、さらにその上面に土器のブロックを検出していることから、自然堆積がかなり進んだ時点で、遺物が廃棄されたものとして考えられる。
［その他の付属施設］上部の土坑を掘り込む小型の土坑である。平面形は開口部で楕円形を呈し、底面は円形を呈する。規模は最大径で開口部 120㎝、底面 125㎝、深さ 83㎝を計る。壁は段を有するフラスコ状を呈し、底面は若干の起伏がみられ堅緻である。この底面に径 25㎝、深さ約 15㎝の Pit が 2 基検出された。
［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器を主体とする土器が出土した（第 14 図 1、15 図）石器は、敲磨器類が 1 点出土した（第 24 図 12）土製品は、焼成粘土塊が覆土から 5 点出土し、うち 2 点を掲載した（第 24 図 14・15）
［時　　期］出土遺物から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第 5 号土坑（第 8 図）
［位　　置］F － 26 グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。
［重　　複］なし。
［平面形・規模］平面形は開口部で不整円形を呈し、底面は円形を呈する。規模は最大径で開口部 172㎝、底面 205㎝、深さ 155㎝を計る。
［　壁　］断面形はフラスコ状を呈する。
［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。
［堆　積　土］12 層に分層され、壁寄りから底面にかけてロームを主体とする土壌が、その上層にシルト質の土壌が堆積し、さらにその上面には土器のブロックを検出していることから、自然堆積あるいは人為的に埋め戻された両面が考えられる。
［その他の付属施設］底面のほぼ中央に径 23 ～ 28㎝、深さ 14 ～ 16㎝のピットを有する。
［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器を主体とする土器が出土した（第 16 図 33・34、17 図、18 図）石器は、石鏃が 1 点（第 22 図 1）・不定形石器が 2 点（第 22 図 3・4）・敲磨器類が 2 点（第 23 図 8・9）

出土した。

［時　　期］出土遺物から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第6号土坑（第10図）

［位　　置］F－25・26グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部117㎝、底面136㎝、深さ85㎝を計る。

［　壁　］断面形はフラスコ状を呈する。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］8層に分層でき、壁寄りに崩落土と思われるローム土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器の破片が数点出土した（第19図56～59）。

［時　　期］出土遺物から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第7号土坑（第10図）

［位　　置］D・E－25グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］第8号土坑と重複している。第8号土坑に切られている。

［平面形・規模］平面形は開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部145㎝、底面197㎝、深さ124㎝を計る。

［　壁　］断面形はフラスコ状を呈する。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］13層に分層でき、壁寄りに崩落土と思われるロームを主体とする土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器の破片が数点出土した（第19図60）。石器は、石箆が1点出土した（第22図6）。

［時　　期］出土遺物および重複関係から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第8号土坑（第9図）

［位　　置］D・E－25グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］第4号土坑と第7号土坑と重複している。本土坑は第4号土坑に切られており、第7号土坑を切っている。

［平面形・規模］平面形は、開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部188㎝、底面220㎝、深さ115㎝を計る。

［　壁　］断面形は基本的にフラスコ状を呈するが、急に立ちあがる部分もみられる。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］7 層に分層でき、ほぼ全体的にシルト質の土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。
［その他の付属施設］なし。
［出　土 遺 物］第Ⅰ群土器の破片が数点出土した（第 19 図 61 ～ 64）。石器は敲磨器類が 1 点出土した（第 23 図 7）。
［時　　期］出土遺物および重複関係から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第 10 号土坑（第 10 図）
［位　　置］G － 24・25 グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。
［重　　複］平安時代に属する第 2 号溝状遺構に切られている。
［平面形・規模］平面形は開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部 238㎝、底面 233㎝、深さ 122㎝を計る。
［　　壁　　］断面形は基本的にはフラスコ状を呈するが、急に立ちあがる部分もみられる。
［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。
［堆　積　土］17 層に分層でき、壁寄りに崩落土と思われるロームを主体とする土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。
［その他の付属施設］なし。
［出　土 遺　物］なし。
［時　　期］不明。

第 12 号土坑（第 10 図）
［位　　置］H・I － 24・25 グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重　　複］なし。
［平面形・規模］平面形は開口部で不整円形を呈し、底面は円形を呈する。規模は最大径で開口部 105㎝、底面 195㎝、深さ 115㎝を計る。
［　　壁　　］断面形はフラスコ状を呈する。
［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。
［堆　積　土］8 層に分層でき、ほぼ全体的にシルト質の土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。
［その他の付属施設］底面から、中央に径 50㎝、深さ 10㎝を計る皿状のくぼみを 1 基確認した。
［出　土 遺　物］なし。
［時　　期］不明。

第 13 号土坑（第 11 図）
［位　　置］I － 25 グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。
［重　　複］なし。
［平面形・規模］平面形は開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部 123㎝、底面 178

cm、深さ82cmを計る。

［　　壁　　］断面形はフラスコ状を呈する。

［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］7層に分層でき、ローム混じりの土壌が主体を占めていることから人為的に埋め戻されているものと思われるが斜面の下位に位置していることも考慮に入れると、自然堆積の可能性もある。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器の破片が数点出土した（第19図65・66）

［時　　期］出土遺物から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第14号土坑a（第11図）

［位　　置］C・B－26・27グリッドで検出した。基本層序第　Ⅵ層上面で、暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］精査時に2基の土坑の重複であることが判明し、便宜上古い方をa、新しい方をbと呼称することにした。

［平面形・規模］平面形は、開口部・底面ともに円形を呈するものと思われ、規模は最大径で開口部175cm、底面225cm、深さ175cmを計る。

［　　壁　　］フラスコ状を呈する。

［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］7層（28～34）に分層でき、壁寄りにロームを主体とする土壌が堆積し崩落土による自然堆積として考えられるが他の土坑の崩落土と思われる堆積の状況と比べ、ロームの土量があまりにも多く、人為的に埋め戻された可能性も想定される。

［その他の付属施設］底面から径50cm、深さ10cmの皿状のくぼみを1基確認した。

［出　土 遺 物］a、b2基で、第Ⅰ群および第Ⅱ群土器が出土した（第19図67、第20図68～72）。石器は、石棒が1点出土した（第23図10）

［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第14号土坑b（第11図）

［平面形・規模］平面形は、開口部・底面ともに円形を呈し、規模は最大径で開口部245cm、底面245cm、深さ180cmを計る。

［　　壁　　］フラスコ状を呈する。

［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］27層（1～27）に分層でき、壁寄りに崩落土と思われるロームを主体とする土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］aに同じ。

［時　　期］aと同時期または近似する時期に構築されたものと思われる。

第15号土坑（第11図）

［位　　置］B－27・28グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は、開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部200㎝、底面205㎝、深さ93㎝を計る。

［　壁　］断面形はフラスコ状を呈する。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］11層に分層でき、底面から壁寄りに崩落土と思われるロームを主体とする土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅱ群土器を主体とする土器が出土した（第20図73～76）

［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第16号土坑（第12図）

［位　　置］B－28・29グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部200㎝、底面187㎝、深さ85㎝を計る。

［　壁　］断面形は箱形を呈する。

［　底　］底面は若干の起伏がみられ堅緻である。

［堆　積　土］9層に分層でき、ほぼ全体的にシルト質の土壌が堆積し、また、壁寄りに崩落土と思われる。ロームを主体とする土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅱ群土器を主体とする土器が出土した（第27図77～83）

［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第17号土坑（第12図）

［位　　置］C－26・27グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は開口部で不整円形を呈し、底面は円形を呈する。直径は開口部で178㎝、底面で192㎝、深さは88㎝を計る。

［　壁　］基本的に断面形はフラスコ状を呈するが、ほぼ直立に立ちあがる部分もみられる。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］14層に分層でき、ほぼ全体的にシルト質の土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅱ群土器を主体とする土器が出土した（第20図84・85）石器は、石皿が1点出土した（第24図13）。

［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第18号土坑（第12図）

［位　　置］D・E－29グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は開口部・底面ともに不整円形を呈する。規模は最大径で開口部215㎝、底面207㎝、深さ110㎝を計る。

［　壁　］断面形は基本的にフラスコ状を呈するが、ほぼ直立～急に立ちあがる部分もみられる。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］7層に分層でき、壁寄りに崩落土と思われるロームを主体とする土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］第Ⅰ群土器の破片が2点出土した。

［時　　期］出土遺物から、前期末葉～中期初頭に構築されたものと考えられる。

第19号土坑（第12図）

［位　　置］C－22グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］平面形は開口部で不整円形を呈し、底面は円形を呈する。規模は最大径で開口部117㎝、底面147㎝、深さ67㎝を計る。

［　壁　］断面形はフラスコ状を呈する。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］4層に分層でき、全体的にシルト質の土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］底面中央に、長さ145㎝、幅36㎝、深さ10㎝の溝状の施設を有する。

［出　土　遺　物］第Ⅱ群土器を主体とする土器が出土した（第19図52～54、第22図88～91）。石器は、石鏃が1点出土した（第22図2）。

［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第20号土坑（第13図）

［位　　置］F・E－29グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］斜面に対して西高東低の西側が残存し、平面形は円形を呈するものと思われる。規模は最大径で開口部173㎝、底面173㎝、深さ47㎝を計る。

［　壁　］斜面高位に壁をもち、ほかの土坑と比べて浅く、底面から内側に向けて急に立ち上がる。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］3層に分層でき、全体的にシルト質の土壌が堆積していることから、自然堆積と考えら

れる。

［その他の付属施設］底面の西寄りにPitを1基確認した。規模は、開口部約40㎝、底面で約18㎝、深さ約60㎝を計る。

［出　土　遺　物］第Ⅲ群土器の完形品が横転した状況で1点出土した（第19図55）

［時　　期］出土遺物から、晩期後半のものと考えられる。

第22号土坑（第13図）

［位　　置］B－25グリッドで検出した。第2号竪穴住居跡を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］平安時代に属する第2号竪穴住居跡に切られている。

［平面形・規模］平面形は開口部で楕円形を呈し、底面は不整円形を呈する。規模は最大径で開口部115㎝、底面230㎝、深さ124㎝を計る。

［　壁　］断面形はフラスコ状を呈する。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］10層に分層でき、下位から中央にロームを主体とする土壌が、上位にはシルト質の土壌が堆積しており、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土 遺　物］なし。

［時　　期］不明。

第23号土坑（第13図）

［位　　置］B・A－26グリッドで確認した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］調査区外に続くため全体形は不明である。規模は最大径で開口部105㎝、底面47㎝、深さ72㎝である。

［　壁　］断面形は、開口部が広い円筒形を呈する。

［　底　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。

［堆　積　土］5層に分層でき、下位から中央にロームを主体とする土壌が、上位にはシルト質の土壌が堆積しており、自然堆積と考えられる。

［その他の付属施設］なし。

［出　土 遺　物］なし。

［時　　期］不明。

第24号土坑（第13図）

［位　　置］D・C－26グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

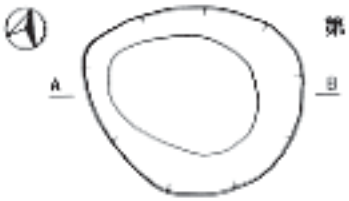
［平面形・規模］平面形は開口部・底面ともに不整楕円形を呈する。規模は最大径で開口部232㎝、底面243㎝、深さ148㎝を計る。

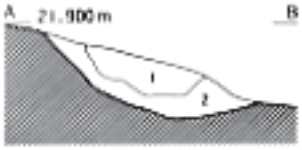
［　　壁　　］断面形は基本的にフラスコ状を呈するが、急に立ちあがる部分もみられる。
［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。
［堆　積　土］16 層に分層でき、ほぼ全体的にシルト質の土壌と壁寄りにロームを主体とする土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。
［その他の付属施設］なし。
［出　土　遺　物］第Ⅱ群土器を主体とする土器が出土した（第 21 図 92 ～ 100）石器は、不定形石器が 1 点（第 22 図 5）・敲磨器類が 1 点（第 24 図 11）出土した。
［時　　期］出土遺物から、後期初頭に構築されたものと考えられる。

第 25 号土坑（第 13 図）
［位　　置］B － 25・26 グリッドで検出した。第 2 号竪穴住居跡を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。
［重　　複］平安時代に属する第 2 号竪穴住居跡に切られている。
［平面形・規模］平面形は開口部で楕円形を呈し、底面は不整円形を呈する。規模は最大径で開口部 115 ㎝、底面 230㎝、深さ 124㎝を計る。
［　　壁　　］断面形はフラスコ状を呈する。
［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。
［堆　積　土］上位にシルト質の土壌が堆積していた。
［その他の付属施設］なし。
［出　土 遺　物］なし。
［時　　期］不明。

第 26 号土坑（第 13 図）
［位　　置］C － 11 グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。
［重　　複］なし。
［平面形・規模］溝状を呈するものである。規模は開口部で深さ 50㎝、幅 50㎝、底面幅 20㎝を計る。
［　　壁　　］短軸断面は底面から急に立ちあがり、長軸断面は底面から内傾して立ちあがる。
［　　底　　］底面はほぼ平坦で、堅緻である。
［堆　積　土］2 層に分層でき、全体的にシルト質の土壌が堆積していることから、自然堆積と考えられる。
［その他の付属施設］なし。
［出　土　遺　物］なし。
［時　　期］不明。

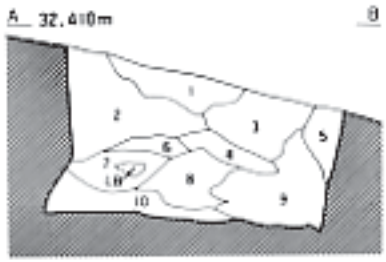
（田澤　淳逸・児玉　大成）





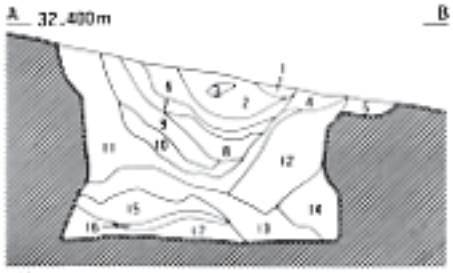
第1号土坑

1	7.5YR4/4	褐色土	ローム
2	10YR3/3	暗褐色土	シルト、ローム粒少量



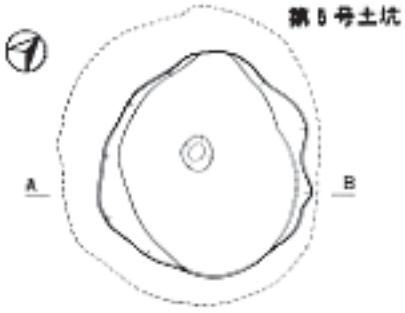
第2号土坑

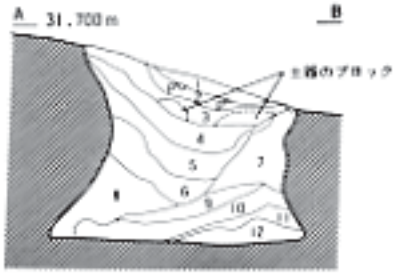
1	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒少量
2	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒少量
3	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量
4	10YR2/3	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・焼土粒少量
5	10YR4/6	褐色土	ローム
6	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム塊・ローム粒多量
7	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、抽痕多量
8	10YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
9	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、抽痕多量
10	10YR2/3	黒褐色土	シルト、ローム粒、抽痕多量、炭化粒少量



第3号土坑

1	10YR2/3	黒褐色土	シルト、炭化粒少量
2	10YR1.7/1	黒色土	シルト、炭化粒多量
3	10YR2/3	黒褐色土	シルト
4	10YR2/3	黒褐色土	シルト、炭化粒少量
5	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量
6	10YR2/1	黒色土	シルト、炭化粒多量、焼土粒少量
7	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒少量
8	10YR2/3	黒褐色土	シルト、炭化粒・パミス・ローム粒少量
9	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
10	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒、焼土粒少量
11	7.5YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
12	7.5YR4/4	褐色土	シルト、炭化粒少量
13	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒多量
14	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量
15	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
16	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒多量
17	10YR4/6	褐色土	シルト、炭化粒少量



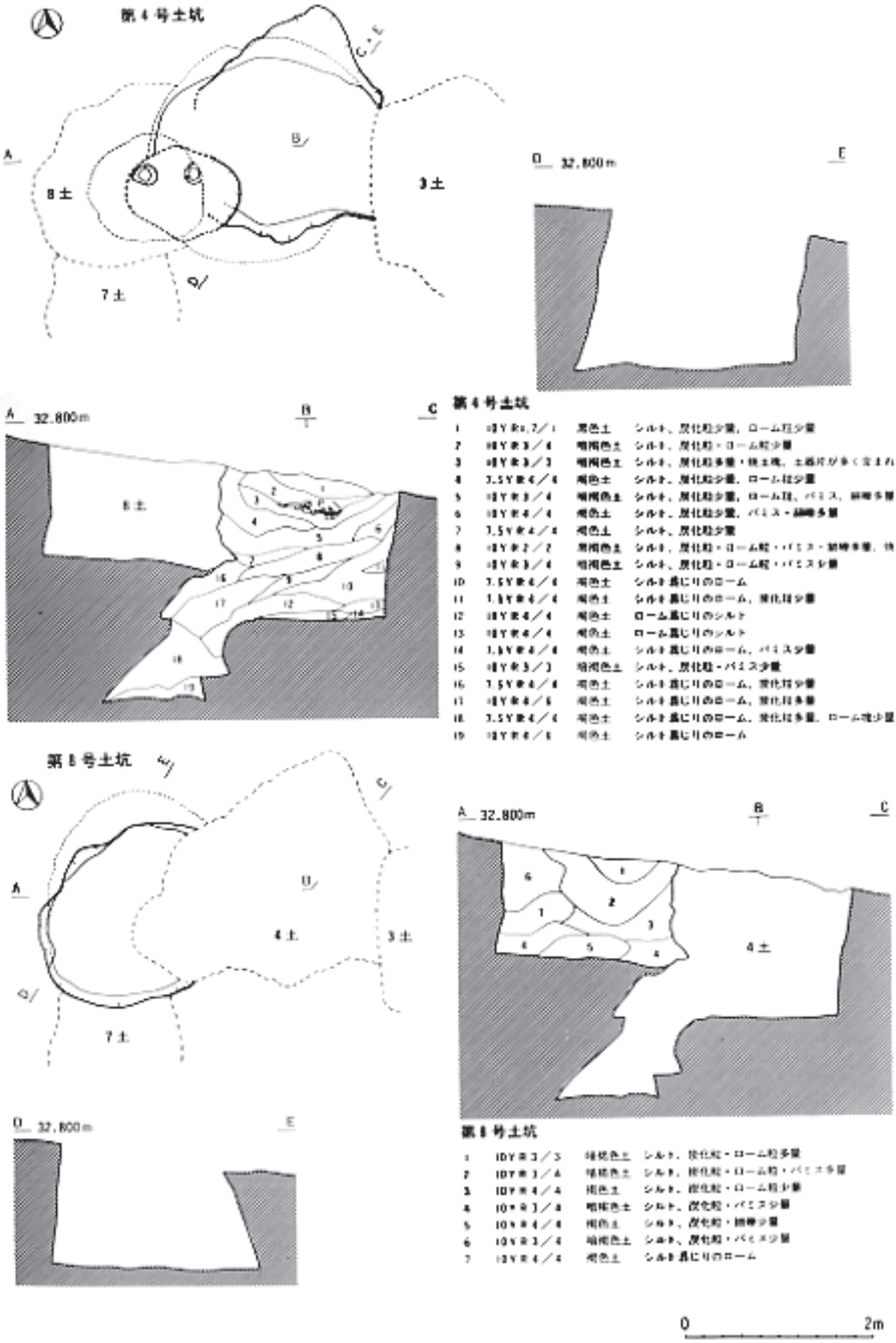


第5号土坑

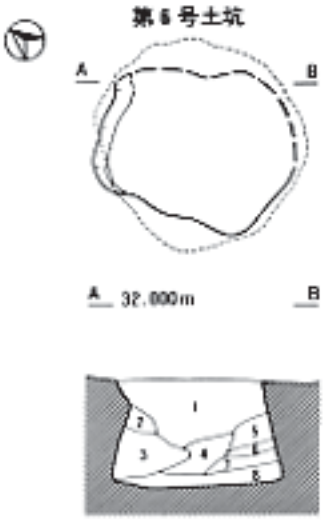
1	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・焼土塊多量
2	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒多量
3	10YR2/3	黒褐色土	シルト、炭化粒・焼土粒多量、土器片が多く含まれる
4	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒・焼土粒・ローム粒少量
5	10YR2/1	黒色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
6	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
7	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量
8	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
9	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒・焼土塊・ローム粒少量
10	10YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
11	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
12	10YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒微量

0　　2m

第8図　第1～3・5号土坑

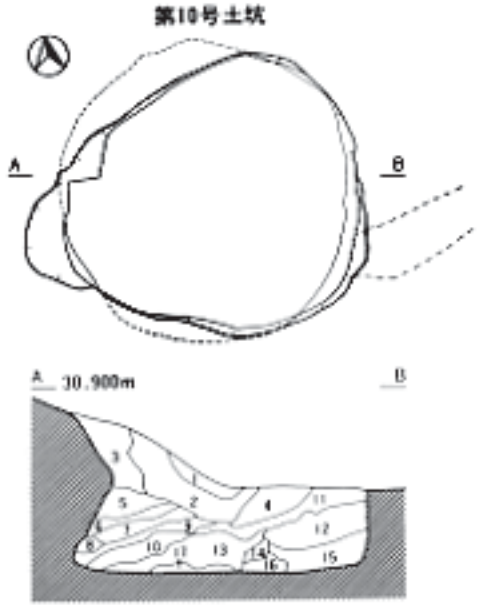


第9図　第4・8号土坑



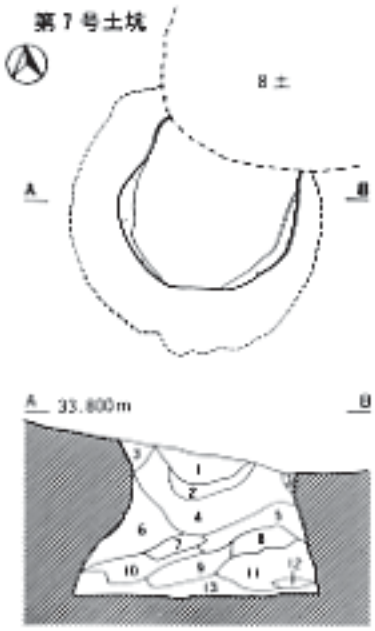
第6号土坑

1	10YR3／3	暗褐色土	シルト、炭化粒・パミス・鉄礫・ローム粒多量
2	10YR3／4	暗褐色土	シルト、炭化粒・パミス・ローム粒少量
3	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム、鉄礫・パミス少量
4	10YR3／3	暗褐色土	ローム混じりのシルト、炭化粒・鉄礫・パミス多量
5	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒・パミス・焼土粒少量
6	10YR3／3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・パミス多量
7	10YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量
8	10YR3／4	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム多量、鉄礫少量



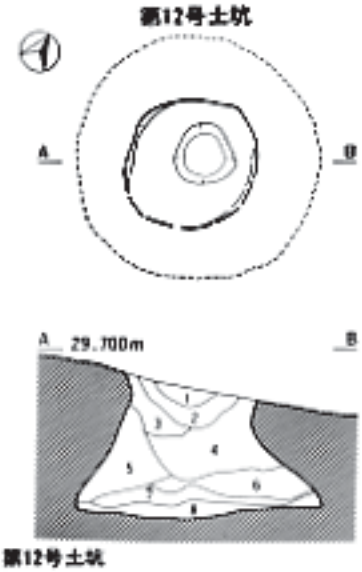
第10号土坑

1	10YR1.7／1	黒色土	シルト、ローム粒少量
2	10YR2／2	黒褐色土	シルト、ローム粒・炭化粒少量
3	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム
4	10YR4／4	褐色土	シルト、炭化粒少量
5	10YR4／6	褐色土	シルト混じりのローム
6	10YR3／4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量
7	10YR4／6	褐色土	シルト混じりのローム
8	7.5YR4／4	褐色土	シルト、パミス少量
9	10YR3／4	暗褐色土	シルト、パミス少量
10	7.5YR4／4	褐色土	シルト、炭化粒物多量
11	10YR3／4	暗褐色土	シルト、炭化粒・パミス少量
12	10YR4／6	褐色土	シルト、炭化粒少量
13	10YR3／4	暗褐色土	シルト、焼土粒・炭化物・ローム粒少量
14	10YR4／4	褐色土	シルト、ローム粒多量
15	10YR2／3	黒褐色土	シルト、炭化粒多量
16	10YR4／6	褐色土	シルト混じりのローム
17	10YR4／6	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量



第7号土坑

1	10YR1.7／1	黒色土	シルト、炭化粒、ローム粒少量
2	10YR2／2	黒褐色土	シルト、炭化粒、ローム粒多量
3	10YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム
4	10YR2／3	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・鉄礫多量
5	10YR3／4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量
6	10YR3／4	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・鉄礫多量、ローム塊少量
7	10YR4／3	にぶい黄褐色土	シルト混じりのローム
8	10YR4／4	褐色土	シルト、パミス少量
9	10YR3／3	暗褐色土	シルト、炭化粒・パミス・ローム粒・鉄礫多量
10	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量
11	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム
12	10YR2／2	黒褐色土	シルト、ローム粒・炭化粒少量
13	10YR3／3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・鉄礫多量



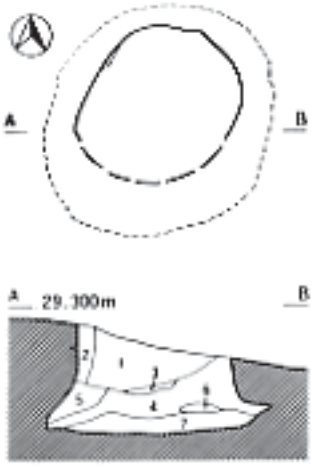
第12号土坑

1	10YR3／4	暗褐色土	ローム混じりのシルト、パミス少量
2	10YR1.7／1	黒色土	シルト、ローム粒少量
3	10YR2／3	黒褐色土	シルト、ローム粒・パミス多量、炭化粒少量
4	10YR2／2	黒褐色土	シルト、ローム粒・パミス多量、炭化粒少量
5	10YR4／4	褐色土	シルト、炭化粒少量
6	10YR3／4	暗褐色土	シルト、ローム粒少量、炭化粒少量
7	10YR2／3	黒褐色土	シルト、ローム粒・パミス多量、炭化粒少量
8	10YR4／4	褐色土	シルト、炭化粒少量

0　　2m

第10図　第6・7・10・12号土坑

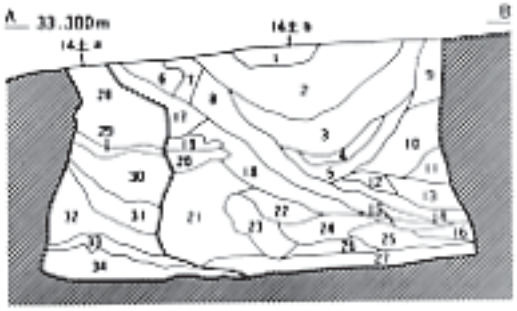
第13号土坑



第13号土坑

1	10YR2/1	黒色土	ローム混じりのシルト、パミス・焼化粒・焼土粒少量
2	10YR3/4	暗褐色土	シルト混じりのローム
3	10YR3/4	暗褐色土	シルト混じりのローム
4	10YR2/3	黒褐色土	ローム混じりのシルト、炭化粒少量
5	10YR3/4	暗褐色土	シルト、鉄砲少量
6	10YR3/4	暗褐色土	シルト混じりのローム
7	10YR2/3	黒褐色土	シルト、焼土粒・炭化粒・パミス少量

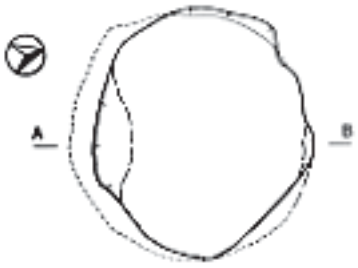
第14号土坑

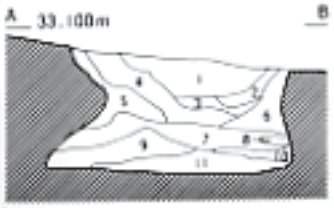


第14号土坑

1	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量
2	10YR4.7/1	黒色土	シルト、ローム粒少量
3	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量
4	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒多量
5	10YR2/3	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒多量
6	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
7	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量
8	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒多量
9	10YR3/4	暗褐色土	シルト、ローム粒多量
10	7.5YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム
10	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
12	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒多量、ローム粒少量
13	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
14	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
15	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
16	10YR2/2	黒褐色土	シルト、ローム粒・パミス少量
17	10YR4/4	褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒多量
18	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒多量
19	10YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム
20	10YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量
21	10YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒微量
22	10YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量
23	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
24	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒・ローム塊多量
25	10YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒少量
26	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
27	10YR5/6	黄褐色土	シルト
28	10YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒微量
29	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒微量
30	10YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム
31	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
32	10YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム
33	10YR7.1/1	黒色土	シルト混じりのローム、炭化粒多量
34	7.4YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム

第15号土坑





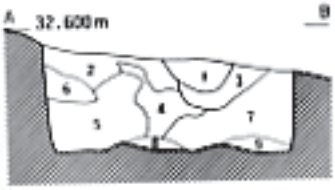
第15号土坑

1	10YR2/3	黒褐色土	シルト、焼化粒・ローム粒・パミス少量
2	10YR4/4	褐色土	シルト、パミス・ローム多量
3	10YR3/3	暗褐色土	シルト、パミス、炭化粒少量
4	10YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム、パミス少量
5	7.5YR5/6	明褐色土	シルト混じりのローム
6	7.5YR4/3	褐色土	シルト混じりのローム
7	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒微量、ローム粒・パミス少量
8	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
9	7.5YR5/6	明褐色土	シルト混じりのローム
10	7.5YR5/4	にぶい褐色土	シルト混じりのローム
11	7.5YR3/3	暗褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒・パミス・ローム粒少量

0 2m

第11図　第13～15号土坑

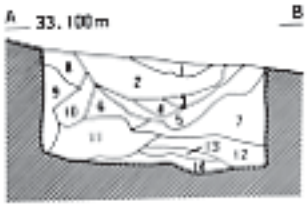
第16号土坑



第16号土坑

1	10YR3／4	暗褐色土	シルト、パミス少量
2	10YR3／3	暗褐色土	シルト、ローム粒少量
3	10YR2／2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
4	10YR3／3	暗褐色土	シルト、ローム粒、ローム塊多量
5	10YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム
6	10YR3／3	暗褐色土	シルト、ローム粒多量
7	10YR3／3	暗褐色土	シルト、ローム粒・パミス少量
8	10YR2／3	黒褐色	シルト、ローム粒・パミス多量
9	10YR2／3	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・パミス少量

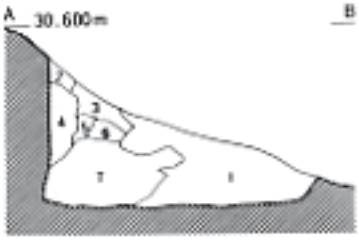
第17号土坑



第17号土坑

1	10YR2／1	黒色土	シルト、ローム粒少量
2	10YR2／2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
3	10YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム、パミス少量
4	10YR3／3	暗褐色土	シルト、ローム塊
5	10YR2／2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
6	10YR3／4	暗褐色土	シルト、パミス・抽欠
7	10YR2／2	黒褐色土	シルト、ローム粒少量
8	10YR5／6	黄褐色土	シルト混じりのローム
9	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム
10	10YR3／4	暗褐色土	シルト、ローム粒・パミス多量
11	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム・パミス少量
12	10YR2／3	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・パミス少量
13	10YR3／3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒少量
14	10YR2／2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム塊・パミス少量

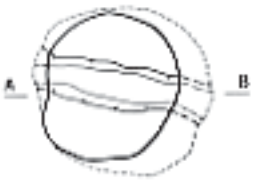
第18号土坑

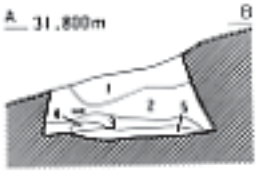


第18号土坑

1	10YR1.7／1	黒色土	シルト、炭化粒・ローム粒・パミス少量
2	10YR2／1	黒色土	シルト、ローム塊少量
3	10YR3／3	暗褐色土	シルト、ローム粒少量
4	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム
5	10YR4／4	褐色土	シルト、抽欠少量
6	10YR5／6	黄褐色土	シルト混じりのローム
7	7.5YR4／4	褐色土	シルト混じりのローム、パミス少量

第19号土坑



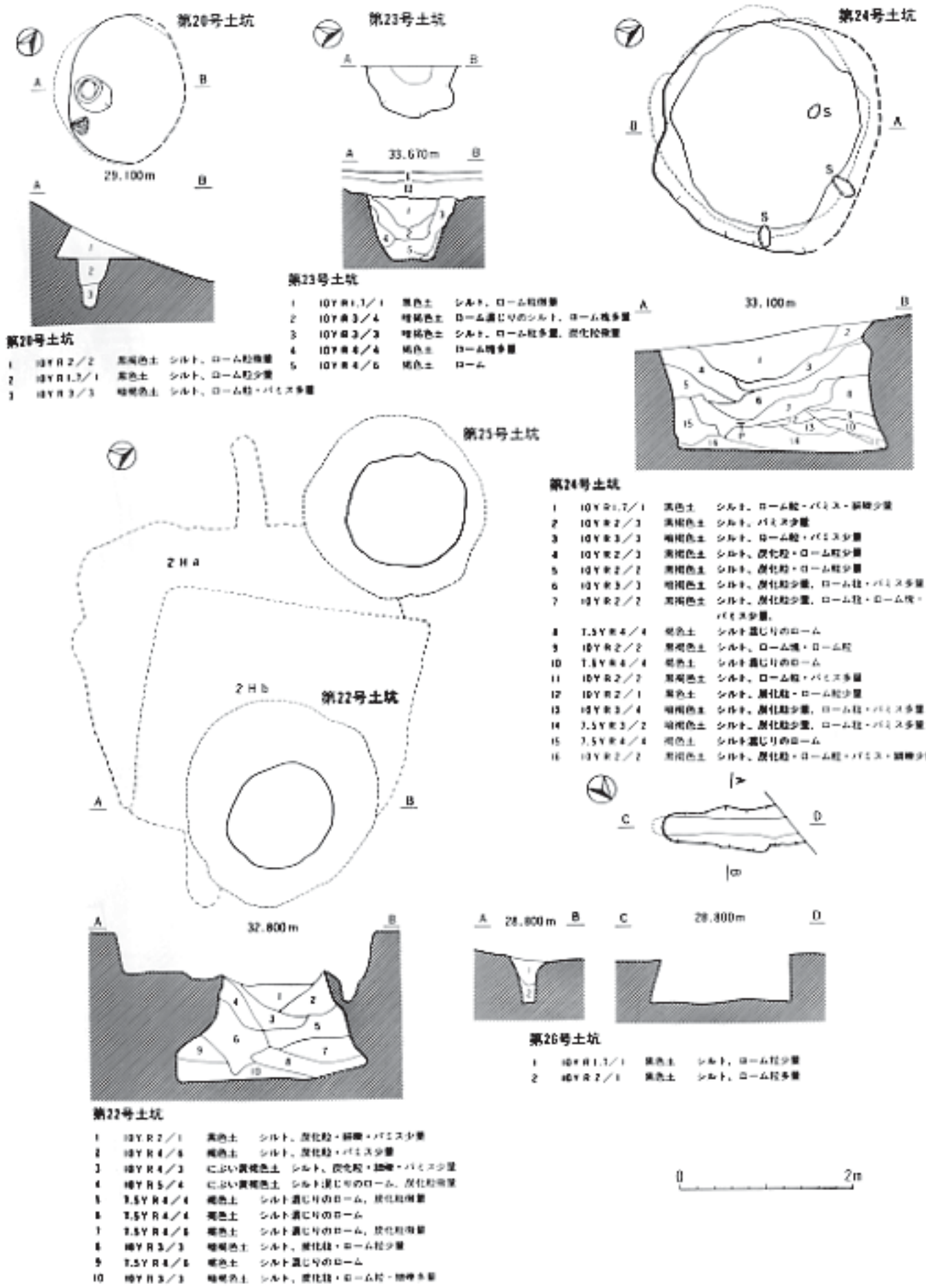


第19号土坑

1	10YR3／3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・パミス・抽欠多量
2	10YR3／4	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・パミス・抽欠少量
3	10YR3／2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
4	10YR4／4	褐色土	シルト、炭化粒少量
5	10YR3／2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量

0　　2m

第12図　第16～19号土坑



第20号土坑

1	10YR2/2	黒褐色土	シルト、ローム粒微量
2	10YR1.7/1	黒色土	シルト、ローム粒少量
3	10YR3/3	暗褐色土	シルト、ローム粒・パミス多量

第23号土坑

1	10YR1.7/1	黒色土	シルト、ローム粒微量
2	10YR3/4	暗褐色土	ローム混じりのシルト、ローム塊多量
3	10YR3/3	暗褐色土	シルト、ローム粒多量、炭化粒微量
4	10YR4/4	褐色土	ローム塊多量
5	10YR4/6	褐色土	ローム

第24号土坑

1	10YR1.7/1	黒色土	シルト、ローム粒・パミス・鉄粒少量
2	10YR2/3	黒褐色土	シルト、パミス少量
3	10YR3/3	暗褐色土	シルト、ローム粒・パミス少量
4	10YR2/3	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
5	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
6	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒・パミス多量
7	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒・ローム塊・パミス少量。
8	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
9	10YR2/2	黒褐色土	シルト、ローム塊・ローム粒
10	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
11	10YR2/2	黒褐色土	シルト、ローム粒・パミス多量
12	10YR2/1	黒色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
13	10YR3/4	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒・パミス多量
14	7.5YR3/2	暗褐色土	シルト、炭化粒少量、ローム粒・パミス多量
15	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
16	10YR2/2	黒褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・パミス・鉄粒少量

第26号土坑

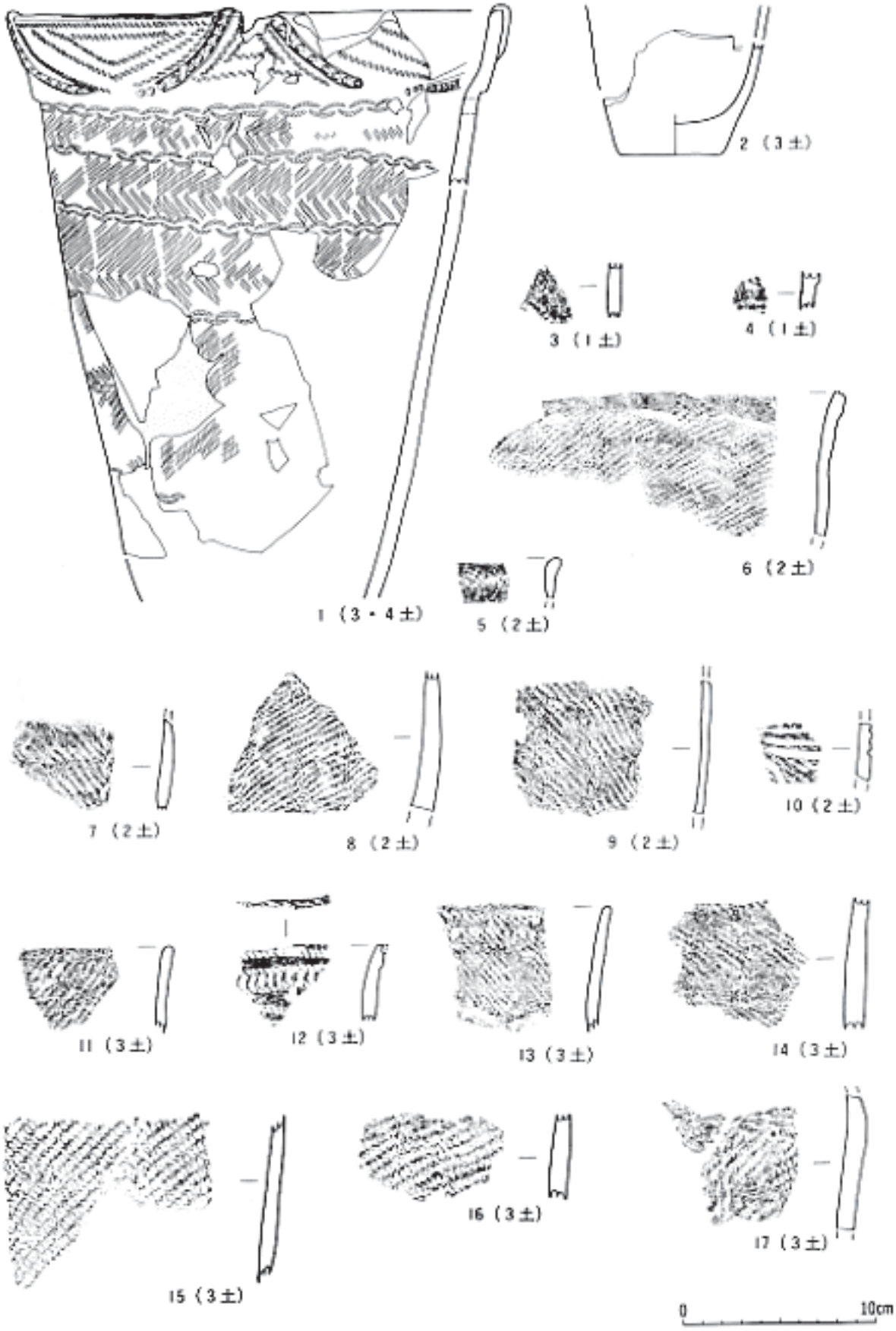
1	10YR1.7/1	黒色土	シルト、ローム粒少量
2	10YR2/1	黒色土	シルト、ローム粒多量

第22号土坑

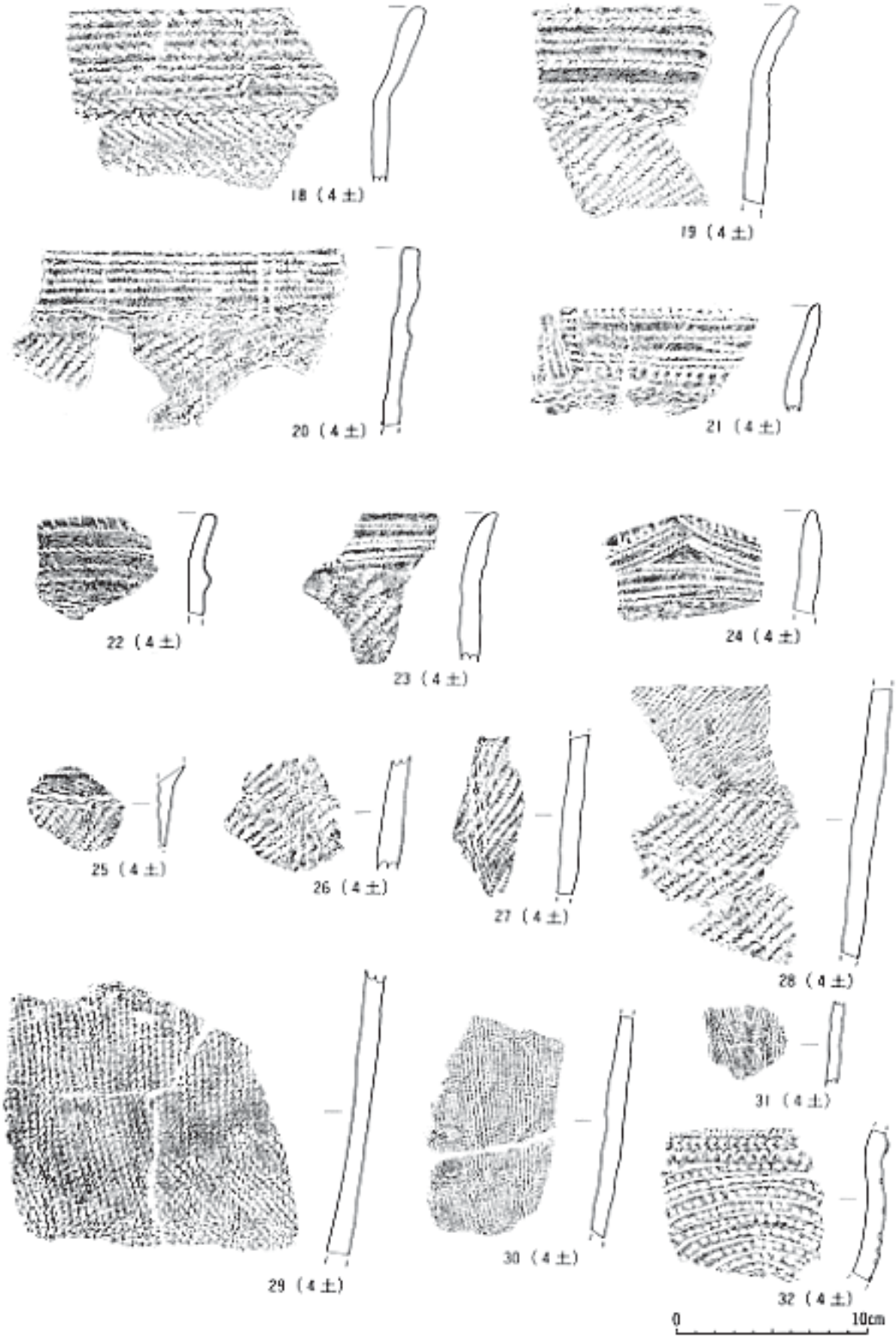
1	10YR2/1	黒色土	シルト、炭化粒・鉄粒・パミス少量
2	10YR4/6	褐色土	シルト、炭化粒・パミス少量
3	10YR4/3	にぶい黄褐色土	シルト、炭化粒・鉄粒・パミス少量
4	10YR5/4	にぶい黄褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒微量
5	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒微量
6	7.5YR4/4	褐色土	シルト混じりのローム
7	7.5YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム、炭化粒微量
8	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒少量
9	7.5YR4/6	褐色土	シルト混じりのローム
10	10YR3/3	暗褐色土	シルト、炭化粒・ローム粒・鉄粒多量

0　　2m

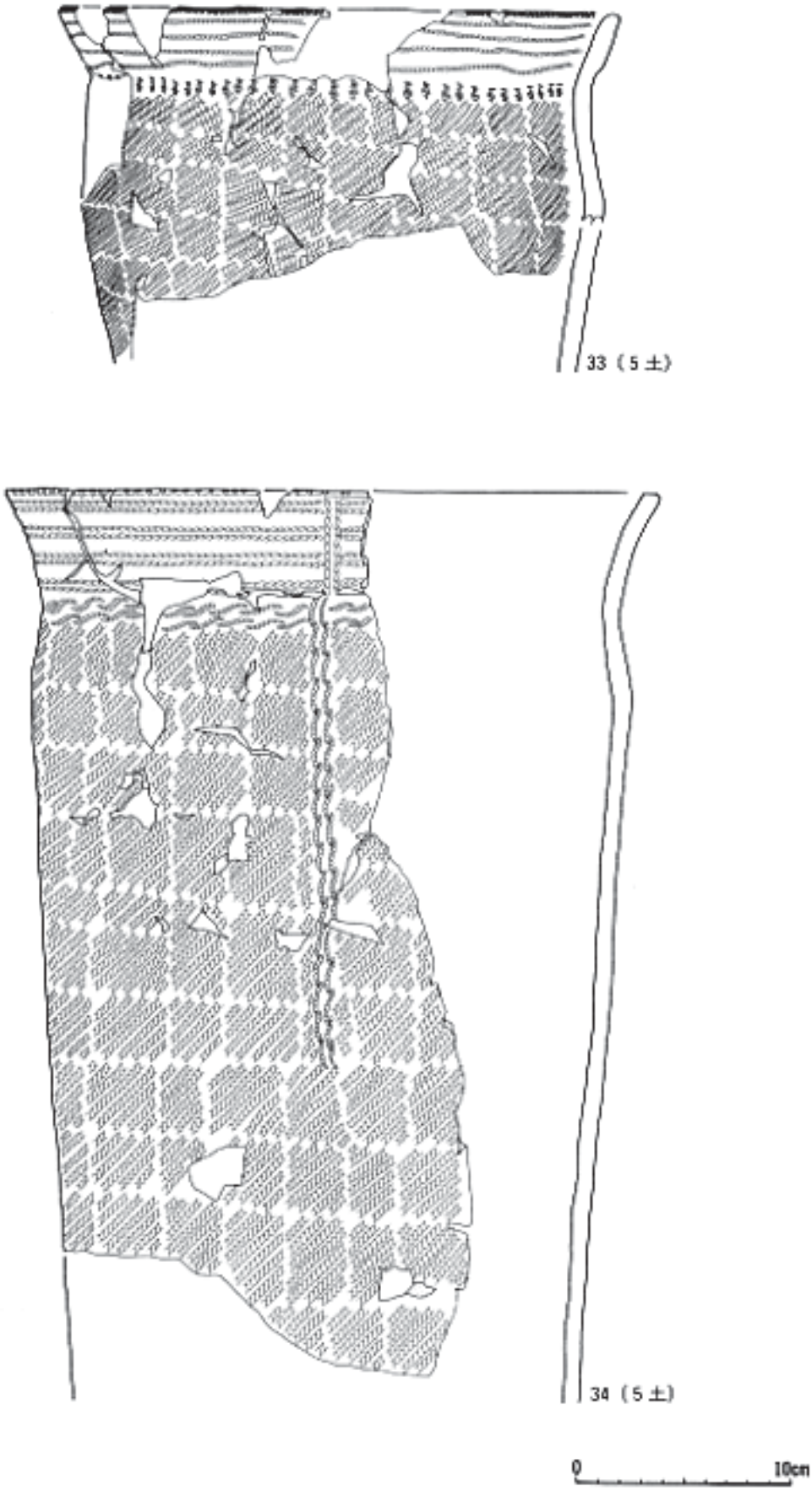
第13図　第20・22～26号土坑



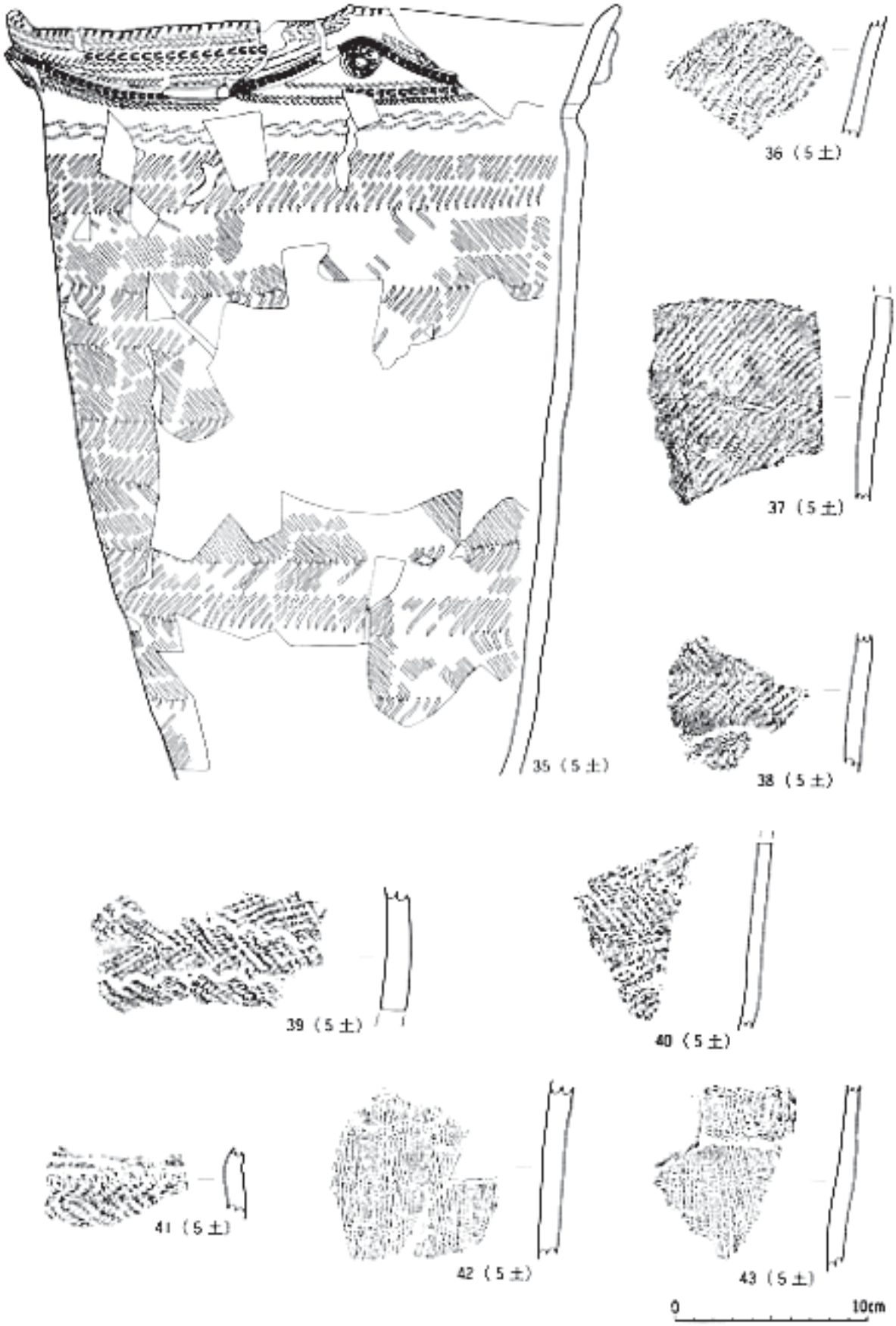
第14図　土坑出土遺物（土器1）



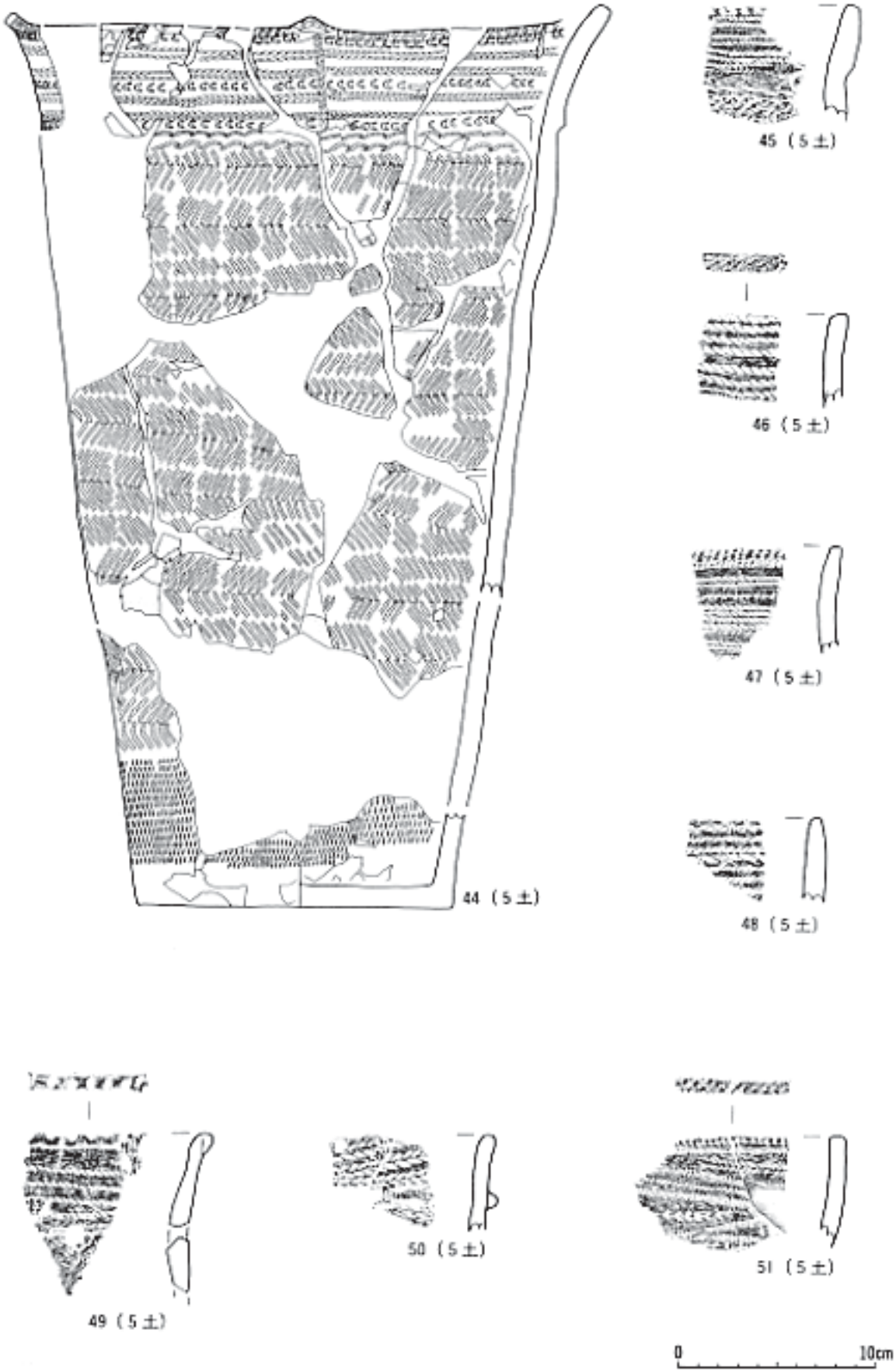
第 15 図　土坑出土遺物（土器 2）



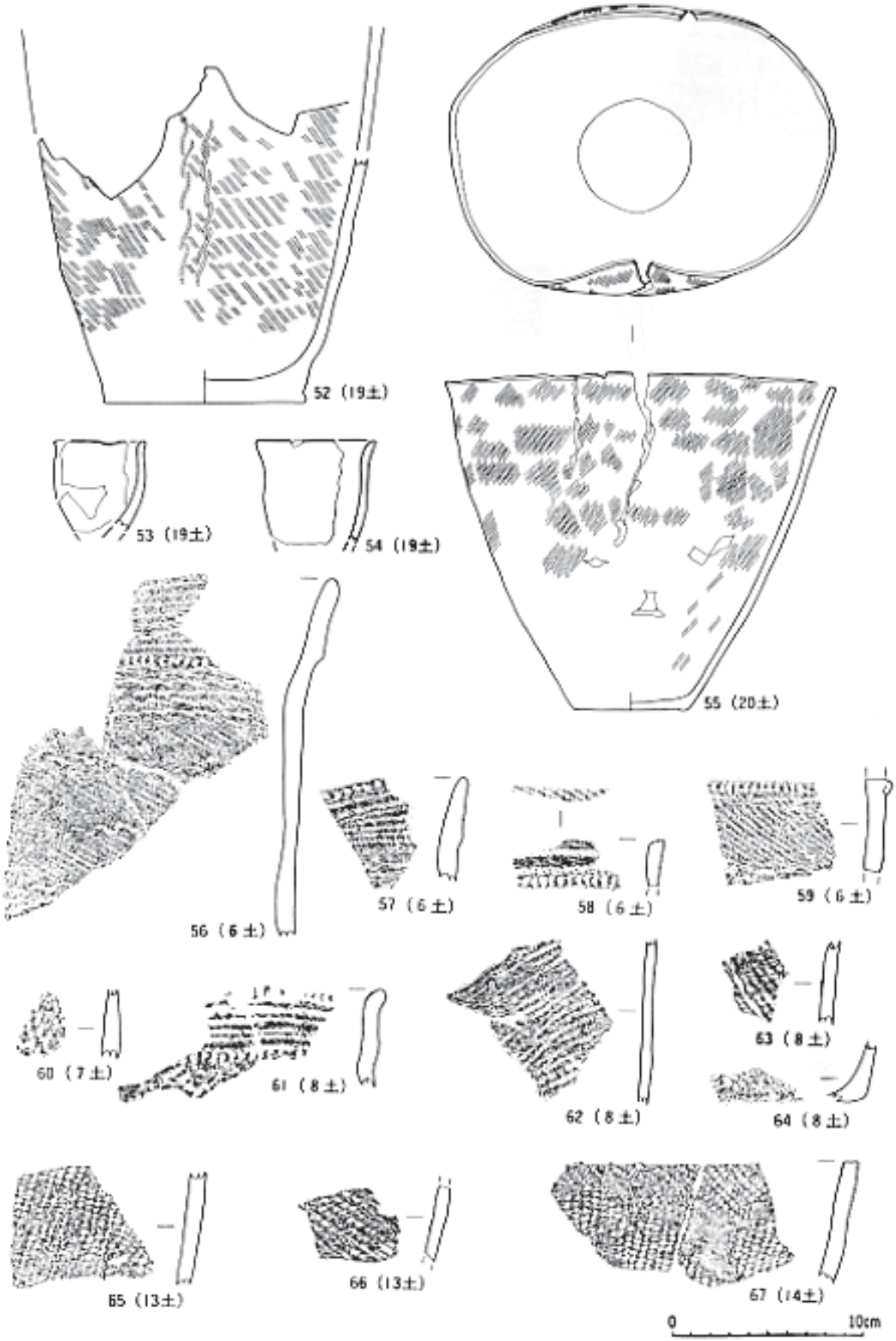
第16図　土坑出土遺物（土器3）



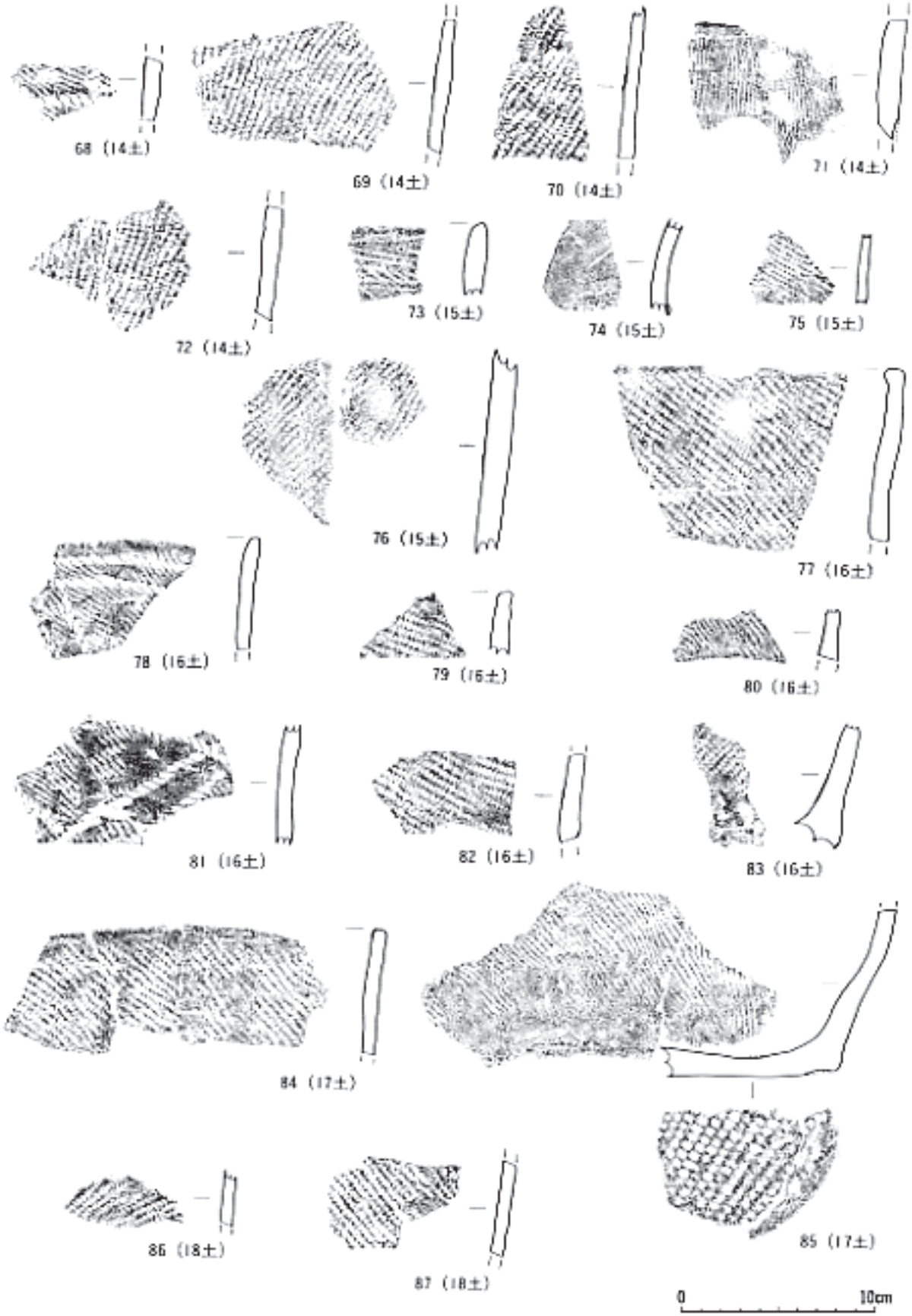
第17図　土坑出土遺物（土器4）



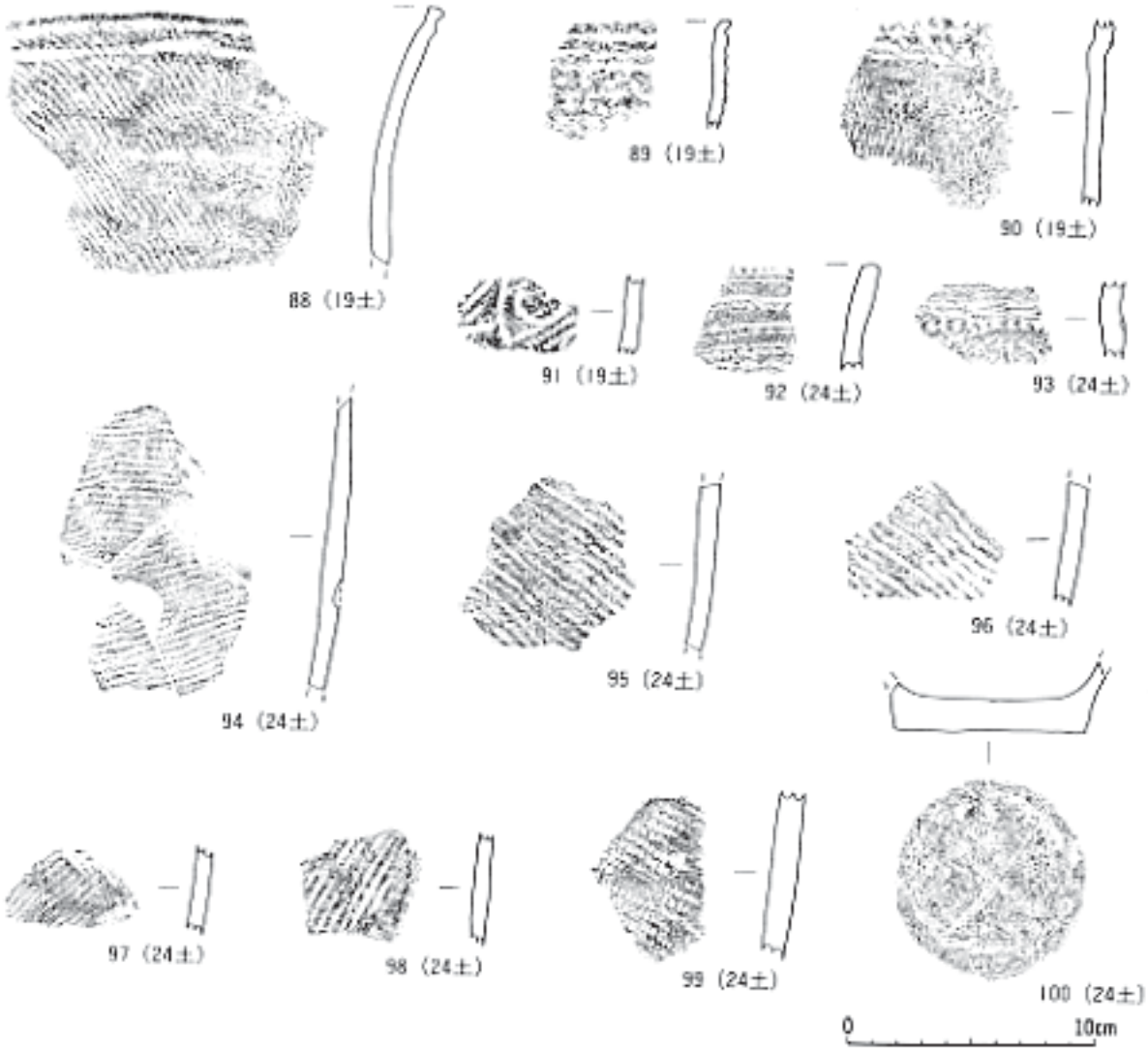
第18図　土坑出土遺物（土器5）



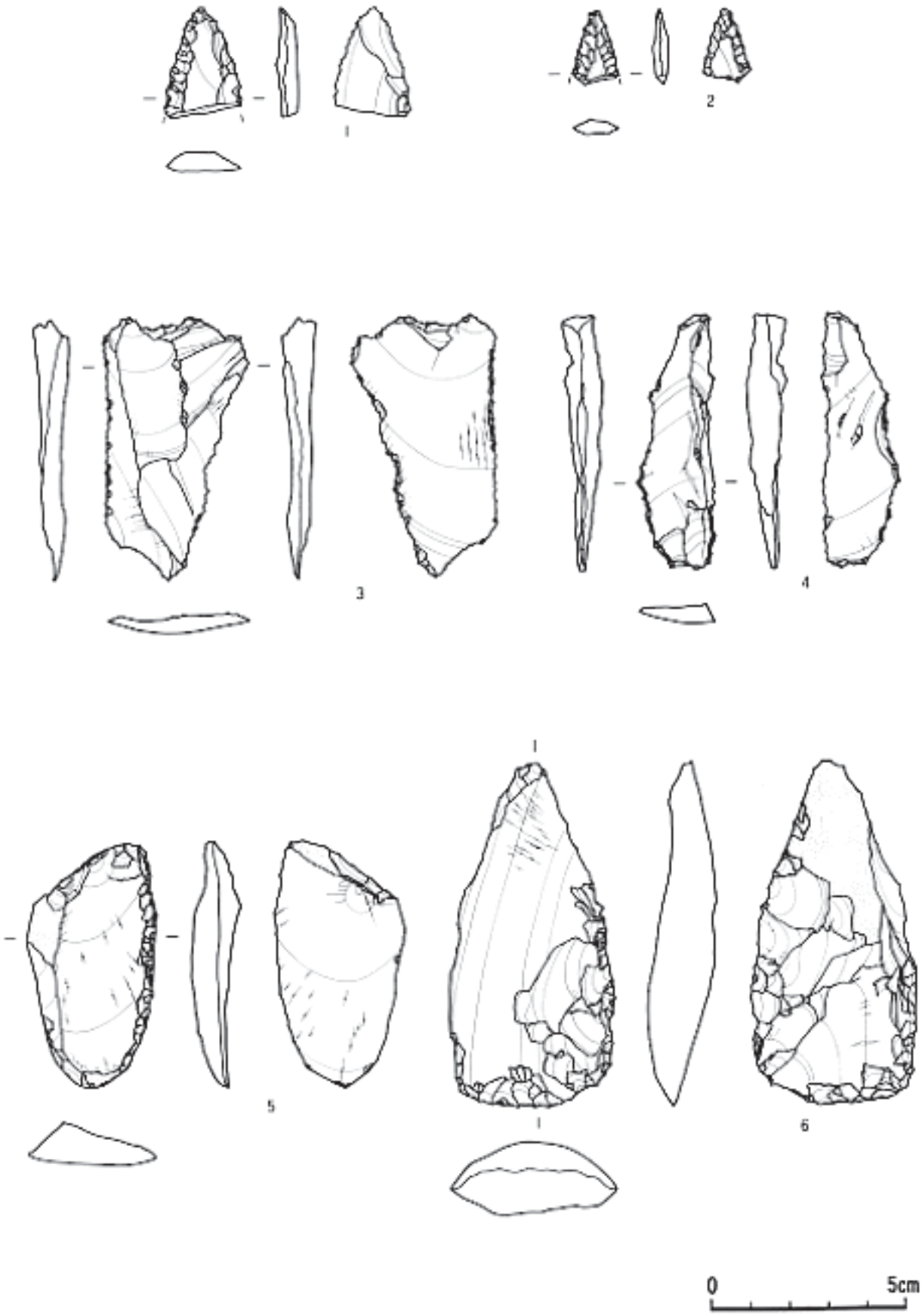
第19図　土坑出土遺物（土器6）



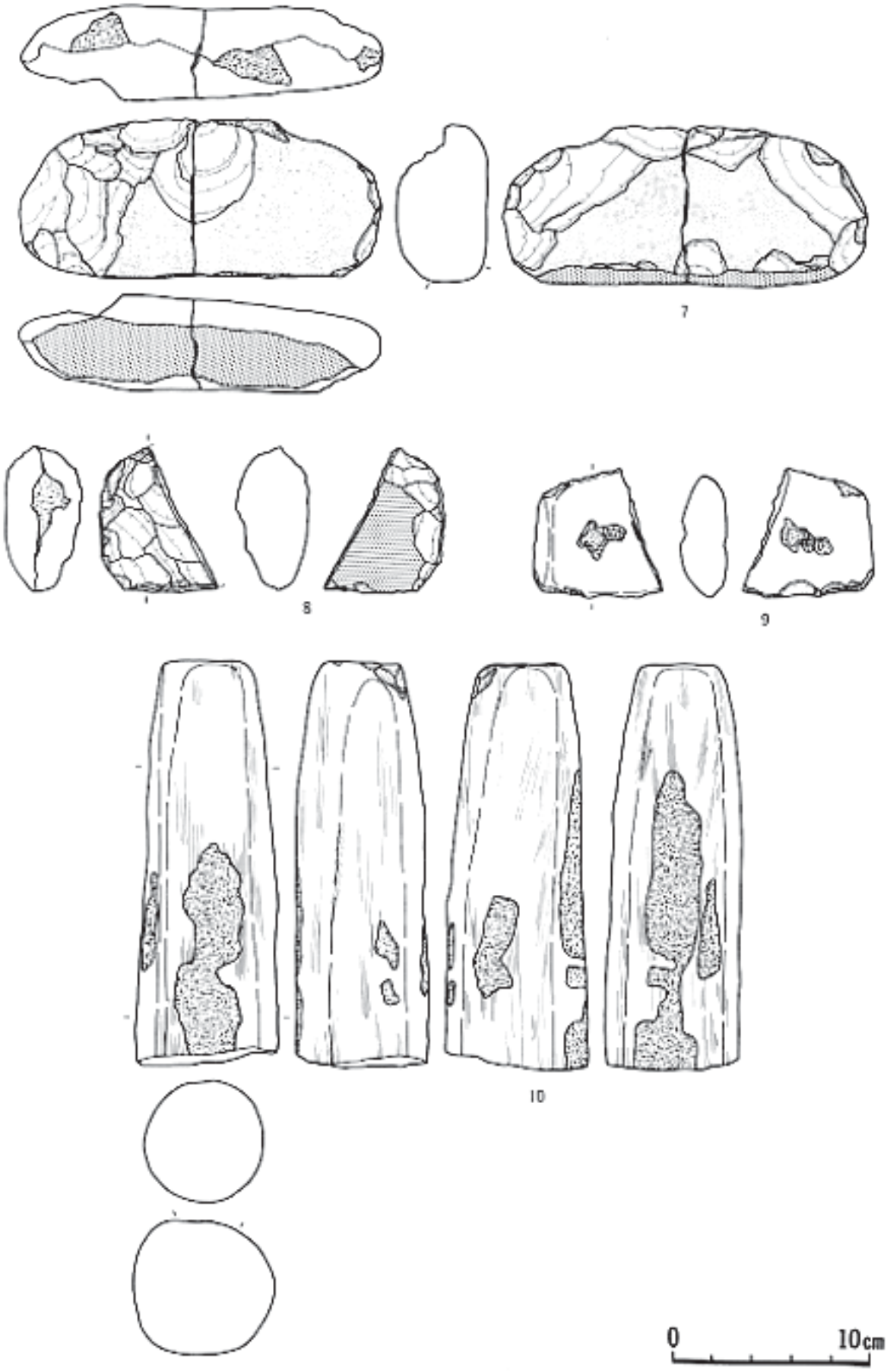
第20図　土坑出土遺物（土器7）



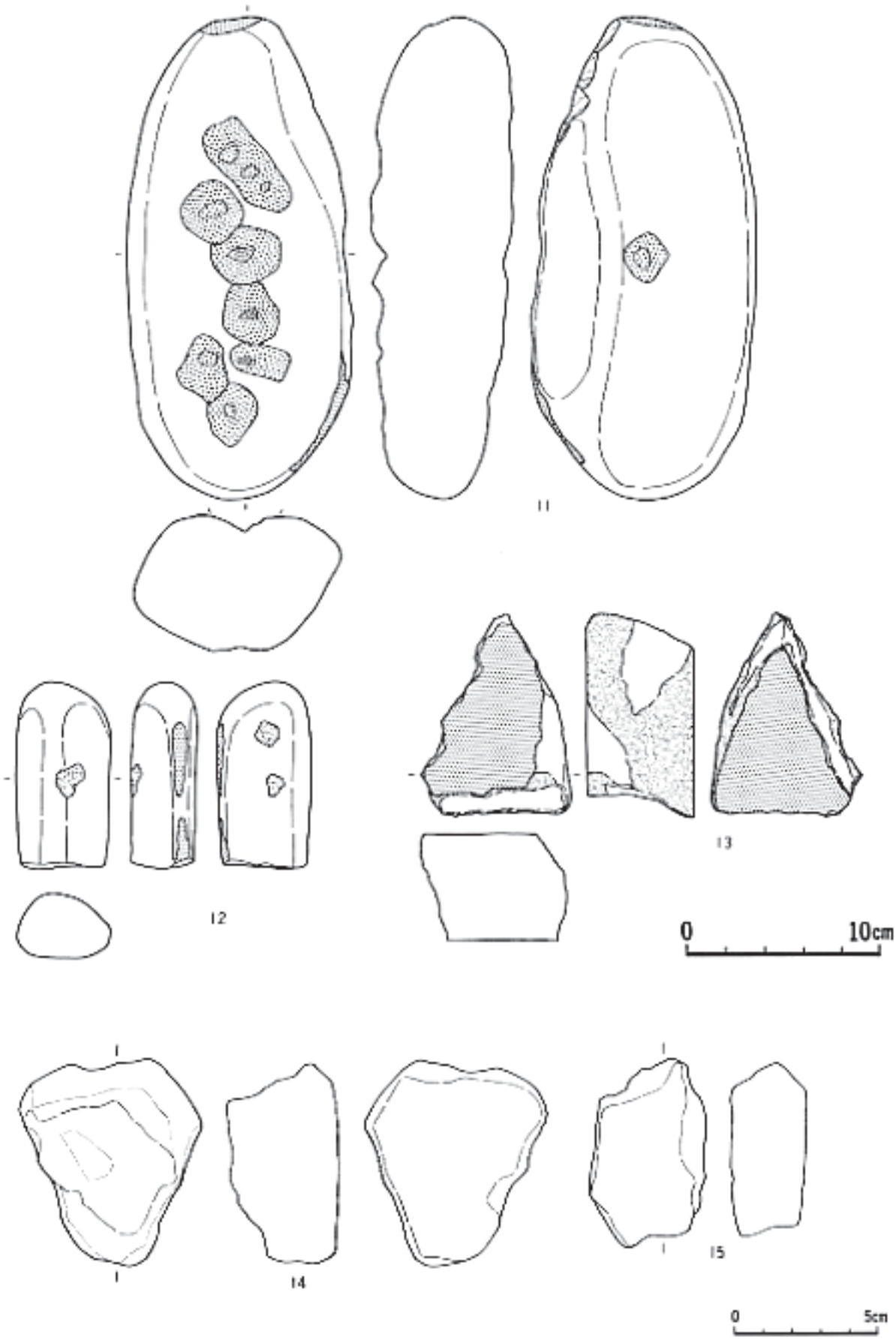
第21図　土坑出土遺物（土器8）



第 22 図　土坑出土遺物（石器 1）



第 23 図　土坑出土遺物（石器 2）



第 24 図　土坑出土遺物（石器 3・土製品）

2．出土遺物

(1) 土器

本調査で出土した縄文土器は、段ボール箱11箱分出土した。出土状況をみると、遺構内では、第1号竪穴式住居跡、第1～8、13～20、23号土坑から出土し、遺構外では、A～F－20～30グリッドに分布しており、地形的には西側から伸びる台地の先端にあたる部分から主に出土している。

時期的には、前期～晩期に属するものが出土しており、前期末葉～中期初頭に相当するものが主体を占めていた。これらの土器は、前期末葉～中期初頭に属するものを第Ⅰ群とし、以下、後期をⅡ群、晩期をⅢ群とした。

ここでは、遺構内及び遺構外から出土した土器について併せて記述した。

第Ⅰ群土器

縄文時代前期末葉～中期初頭に属し、そのほとんどが円筒下層d_2式土器～円筒上層a式土器（村越1974）に相当するものである。

器種は、深鉢形を呈するものがほとんどで、その他は鉢形を呈するものが1点（第6図2）出土している。

器形は、口縁部に平縁と波状のものとがみられ、胴部には底部から直線的に外傾するもの（第14図1、第16図34、第18図44ほか）と、わずかな膨らみをもつもの（第26図3ほか）、胴上半部に膨らみをもつもの（第16図33、第25図2、第27図16ほか）がみられる。

文様は、口縁部（口頸部）文様帯に押圧縄文や隆帯が施され、刺突や縄端の圧痕が加えられるものもみられる。胴部には単節LRの斜縄文が施されるものが多くみられ、羽状縄文（LR・RL結束第1種及び2種）、綾絡文（結節回転文）、撚糸文（単軸絡条体第1類）、木目状撚糸文（単軸絡条体第1A類）と称されるものもみられる。口縁部（口頸部）文様帯に施される文様の種類により次の15類に分類した。

1類　LまたはRの平行圧痕が施されるものである。（第15図20・21・25、第16図33、第18図49、第19図58・61、第26図6・7）

口縁部文様帯の平行圧痕に、縦位の平行圧痕（L）が加えられるもの（第15図20）や、隆帯が加えられるもの（第15図21、第26図6・7）、中には、刺突が施されているもの（第15図21、第26図6・7）もある。また、胴部上半にLR（第15図20、第16図33ほか）、横位の結節回転文（第15図25）が施されているものがみられる。

2類　LとRの2本一組の平行圧痕が施されるものである。（第6図2・8、第15図19・23、第16図34、第18図44・45、第19図56、第26図8～12・14、第27図16）

口縁部文様帯が、2本一組の平行圧痕（L・R）のみのもの（第6図2）や、縦位の平行圧痕（L・R）が加えられるもの（第16図34、第18図45）、中には、刺突が施されているもの（第18図44、第19図56、第26図14）もある。また、胴部上半にLR（第26図8～11ほか）、LR0段多条（第15図23）、横位の結節回転文（第6図8、第18図45、第26図12）、LR結束第2種（第6図2）、横位の結節回転文とLR結束第2種（第19図56）、L・R単軸絡条体第1A類（第27図16）、胴部下半に縦位の結節回転文（第16図34）、LR・RL結束第1種と多軸絡条体（第18図44）が施されているものもみられる。

3類　LまたはRの鋸歯形圧痕が施されるものである。（第6図10、第20図73、第25図1）

口縁部文様帯が鋸歯形圧痕（L）のみのもの（第25図1）、また、胴部上半にLR（第6図10、第20図73）、LR・RL結束第1種（第25図1）が施されているものもみられる。

4類　LとRの2本一組の鋸歯形圧痕が施されるものである。（第6図5・12、第15図24、第19図57、第25図2、第26図13、第27図15）

口縁部文様帯が、2本一組の鋸歯形圧痕（L・R）のみのもの（第15図24、第27図15）や、隆帯が加えられるもの（第6図5、第25図2、第26図13）、中には、刺突が施されているもの（第6図5、第15図24、第19図57、第25図2、第27図15）もある。また、胴部上半にLR（第25図2）、LR0段多条（第6図5）、横位の結節回転文（第19図57）が施されているものもみられる。

5類　LRまたはRLの平行圧痕が施されるものである。（第6図6・7・9、第15図22、第18図46・47、第21図89・92、第27図17・18～30、第28図31、第29図67）

口縁部文様帯の平行圧痕に隆帯が加えられるもの（第27図24・27～29）や、刺突が施されているもの（第6図7、第18図47、第21図89、第27図18・24～26、29・30）がある。また、胴部上半に、LR（第6図7・9、第27図17ほか）、RL（第21図89ほか）、横位の結節回転文（第21図92、第27図22・24・25・30、第28図31）、LR・RL結束第2種（第29図67）、L・R単軸絡条体第1A類（第27図20）、多軸絡条体（第27図23）が施されているものもみられる。

6類　LRとRLの2本一組の平行圧痕が施されるものである。（第18図50）

1点のみの出土で、胴部上半に、LRが施されている。

7類　LRまたはRLの鋸歯形圧痕が施されるものである。（第6図4・15、第14図1、第28図32～45）

口縁部文様帯の鋸歯形圧痕に、縦位の平行圧痕（LR）が加えられるもの（第6図4）、隆帯が加えられるもの、（第6図15、第14図1、第17図35、第28図34～45）胴部上半に、LR（第6図4、第28図41）、LR・RL結束第2種（第14図1、第28図34）、横位の結節回転文とLR・RL結束第1種（第17図35）、L・R単軸絡条体第1A類（第28図38）が施されているものもみられる。中には、刺突が施されているもの（第14図1、第17図35、第28図36～38・41・43・44）もある。

8類　LRとRLの2本一組の鋸歯形圧痕が施されるものである。（第17図35、第28図46）

口縁部文様帯の鋸歯形圧痕に、隆帯が加えられ刺突及び結節回転文が施されている。胴部にLR・RL結束第1種（第17図35）が施されているものもみられる。

9類　LまたはRとLRもしくはRLの2本一組の平行圧痕が施されるものである。（第15図18、第18図48）

口縁部文様帯の平行圧痕に、縦位の平行圧痕（LR）が加えられ、胴部上半にLR・RL結束第1種（第15図18）が施されるものもみられる。

10類　LまたはRと絡条体圧痕文が施されるものである。（第18図51、第28図47）
刺突が施されているもの（第28図47）もみられる。

11類　LRとRLの2本一組の圧痕と絡条体圧痕文が施されるものである。（第28図48）
1点のみの出土で、刺突も施されている。

12類　平行する結節回転文が施されるものである。（第21図93）
1点のみの出土で、刺突及びLRが施されている。

13類　平行する刺突文（列点文）のみが施されるものである。（第6図1）
1点のみの出土で、胴部にLRが施されている。

14類　隆帯のみが施されるものである。（第6図13）
1点のみの出土で、隆帯にR圧痕が施されている。

上記の分類に所属しなかったもののほとんどは、口縁部を欠く資料である。

胴部上半では、LRが施されるもの（第6図11、第19図55、第20図84）や、RLでは0段多条のもの（第19図59）がみられる。また、横位の結節回転文が施されるもの（第29図63）や、その上に縦位の結節回転文が施されるものもみられ（第29図64）、その他、LR・RL結束第1種（第17図41）、R単軸絡条体第1類（第20図71）、多軸絡条体（第21図90）、まれに沈線手法により鋸歯状、重弧状を呈する文様を描き、刺突が施されるもの（第15図32）や、平行、渦巻または楕円、三角形等の文様が施されるもの（第28図49～51）もある。

胴部下半では、L（第19図63・66、第21図95・96）が施されるものはみられたが、Rが施されたものはみられなかった。単節では、LR（第6図14、第14図16、第17図36、第20図69・70・80・82・83・87、第21図98・99、第26図5）、RL（第14図8・9、第15図29、第19図60・62・65、第20図72・75・76・85・86、第21図94・97、第26図4、第29図59）の両方がみられ、中にはLR0段多条（第14図15）のものもあった。また、横位の結節回転文（第15図28、第17図37）や、縦位の結節回転文（第6図3、第15図26・27、第29図70、第14図3・17）、その両方が施されるもの（第20図69）もみられる。羽状縄文と呼ばれているもののうち、LR・RL結束第1種（第29図60～62、第17図38・40）とLR・RL結束第2種（第29図65・66・68、第17図39）とが認められ、縦位の結節回転文とLR結束第1種（第6図17）とが施されるものもみられた。その他、L単軸絡条体第1類（第15図30、第17図42・43）やL・R単軸絡条体第1A類（第6図16、第15図31、第29図54～57）L・R単軸絡条体第1A類と縦位の結節回転文とが施されるもの（第29図52・53）、また多軸絡条体（第6図18、第29図72）が施されるものや無文のもの（第21図100）もみられた。

第II群土器

縄文時代後期初頭から前葉に所属するものである。以下のとおり次の3類に分類できる。

1類　牛ヶ沢（3）式（成田1989）に相当する資料である。（第20図68・78・81、第19図52～54、第26図

3、第30図76～82）

器種は、深鉢形および小型の鉢形土器が出土している。

深鉢形土器の場合、器形が、口縁が平縁のものと波状のものとがみられる。平縁のものは、口縁が若干くびれるものと外反するもの、波状のものは、外反するものが多い。

文様は、平縁直下に鋸歯状の撚糸圧痕文（L）が施され胴部にL（第26図3、第30図76）やLR（第20図68・78・81）を地文とするものや、波状口縁でその頂部に隆帯による渦巻文（第30図77）や、ボタン状の貼り付けが施されているもの（第30図78）がみられる。また、口頸部に隆帯を巡らしその上または下にボタン状の貼り付けが加えられるもの（第30図79・80）や、U字状の隆帯が口縁まで伸びるもの（第30図81・82）がある。

胴部では、LRの縄文地に縦位結節回転文が2段施されるものもある（第19図52）。さらに、第14図6・11・13、第20図77・84・85、第21図88などの平縁の深鉢も本類に属するものと考えられ、口唇部は、平坦なものが多い。LR、RL、0段多条などを地文としている。

小型の鉢形土器の場合、平縁で若干口縁が外反し、胴部から口縁部まで無文である（第19図53・54）。いずれもミニチュア土器として区分することもできる土器である。

2類　弥栄平（2）式（成田1989）に相当する資料である。（第6図19、第14図10、第30図83～95）

第1号竪穴式住居跡から1点（第6図19）、第2号土坑から1点（第14図10）、その他は遺構外から出土した。器種は、はとんどが深鉢形である。器形は、口縁が若干くびれるもの（第30図85）や、やや内湾気味のもの（第30図92・93）がみられる。文様は、基本的に三角形を基調とした沈線文により構成され、渦巻き文が充填されているものが目立つ（第14図10、第30図83・90・92・94）。施文は、縄文地のもの（第30図83～89）が多い。なお、第30図92～95は同一個体である。

3類　十腰内IA式（成田1989）に相当する資料である。（第30図96～99）

器種は、深鉢もしくは鉢形土器が出土している。器形は、胴部から直線的に開くもの（第30図96）と、外反するもの（第30図97）、胴部に膨らみをもつもの（第30図98）などがみられる。文様は、基本的に沈線の両端が連結する単文様で構成されるもので、弧状（第30図97・98）や、長楕円形（第30図99）を呈するものがみられる。また、平縁直下に平行沈線が施されるものもある（第30図96）。

第III群土器

縄文時代晩期に属し、晩期後半のものと考えられる（第19図55、第30図73、100～102）。第20号土坑から1点（第19図55）、その他は遺構外から出土した。以下、個体別に記述する。

第19図55は、鉢形を呈し、平縁である。地文にLRが施されている。この資料は、焼き歪みが生じたもので、上面からみると楕円形に変形、その両短軸に亀裂が生じている。

第30図73は、壺形を呈し、平縁で同部は無文である。

第30図100は、壺形を呈し、平縁で口縁がくびれるものである。胴部にRが施されている。

第30図101は、鉢形を呈し、頸部に段を有するもので、その直下に2条の平行沈線を巡らし、胴部にLRが施されるものである。大洞A式土器にみられる特徴でもある。

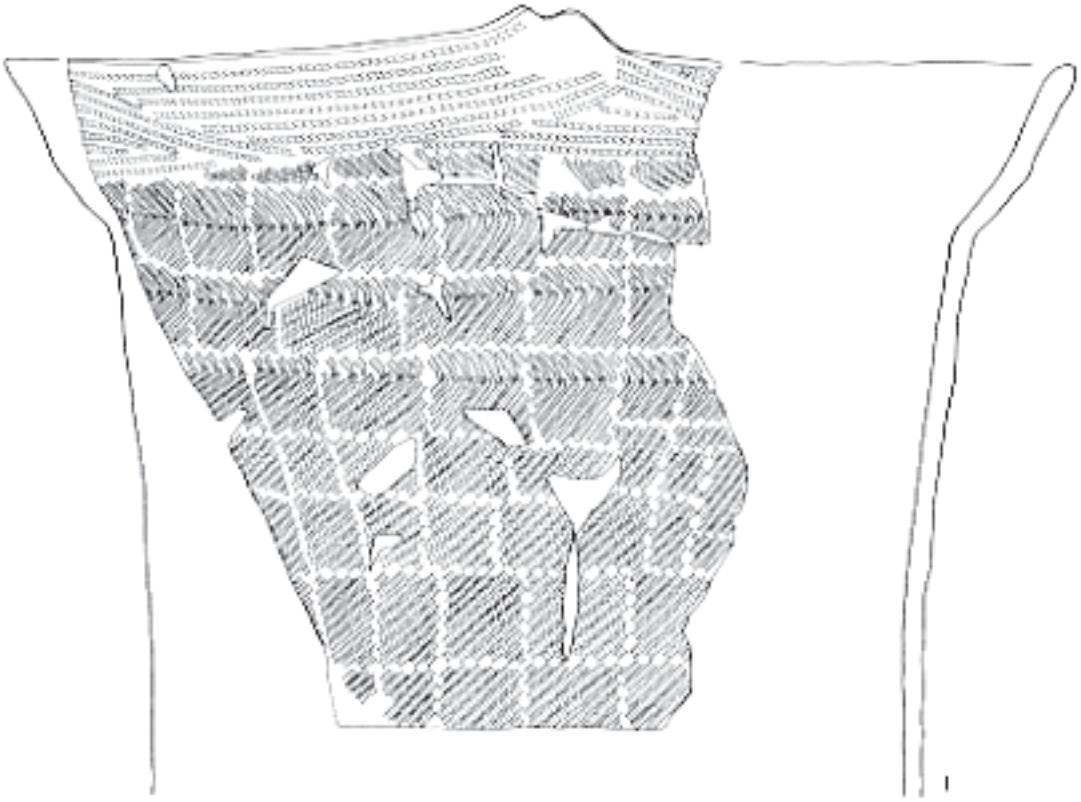
第30図102は、鉢形を呈し、地文にLRが、その上に数条の平行沈線が施されるものである。

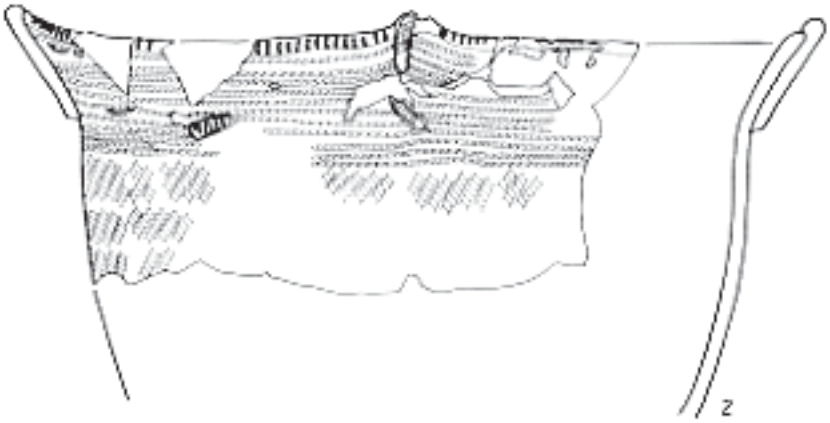
時期不明の土器（第30図74、75、103）

第Ⅰ～Ⅲ群土器に所属するものと思われるが、時期を特定できなかったものである。以下、個体別に記述する。

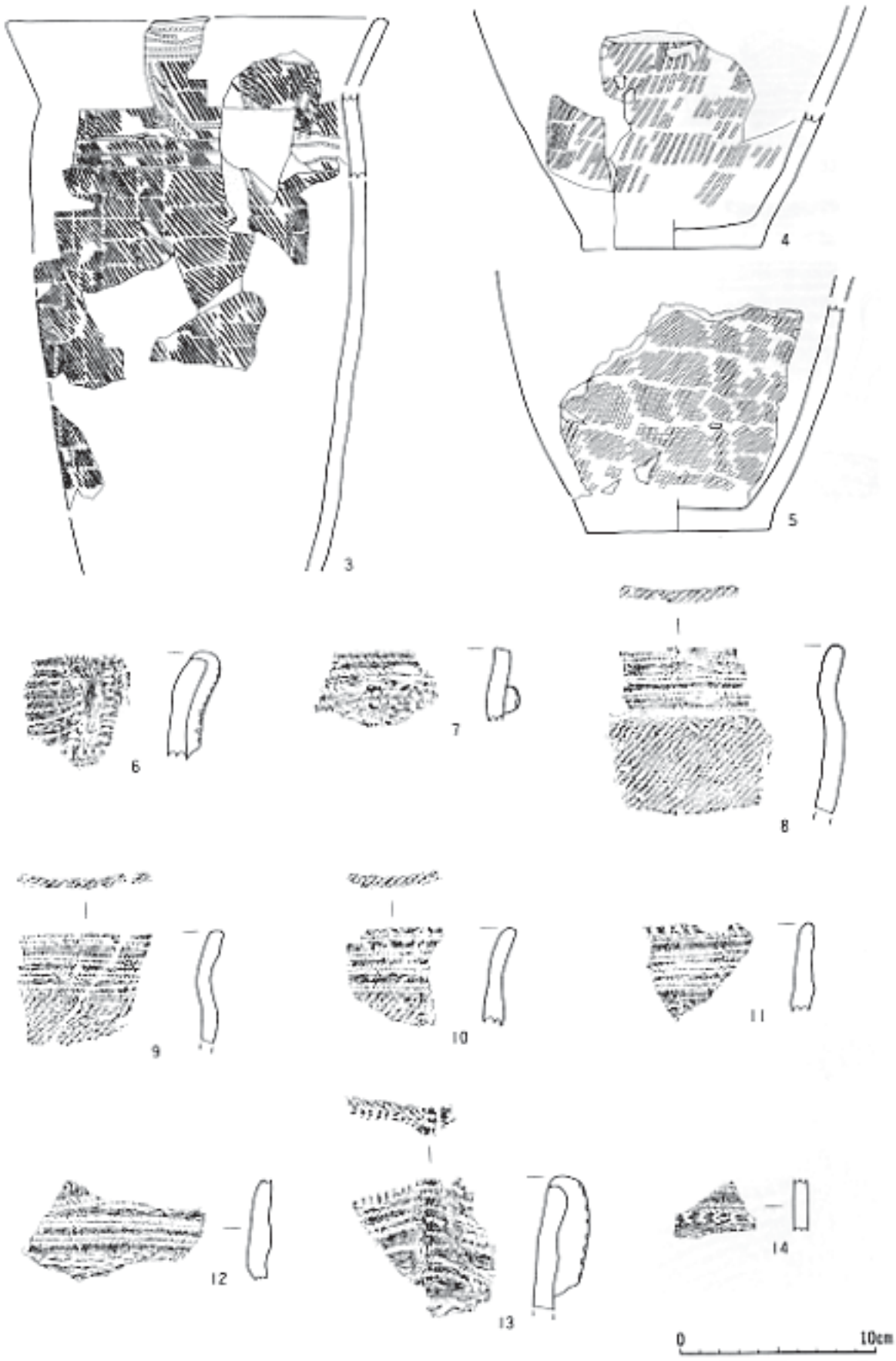
第30図74は、全体的に丸みを帯びた鉢形を呈し無文のものである。第30図75は、底部が張り出す鉢形を呈し無文のものである。第30図103は、底部で内面の中央が突出するものである。

（児玉　大成）



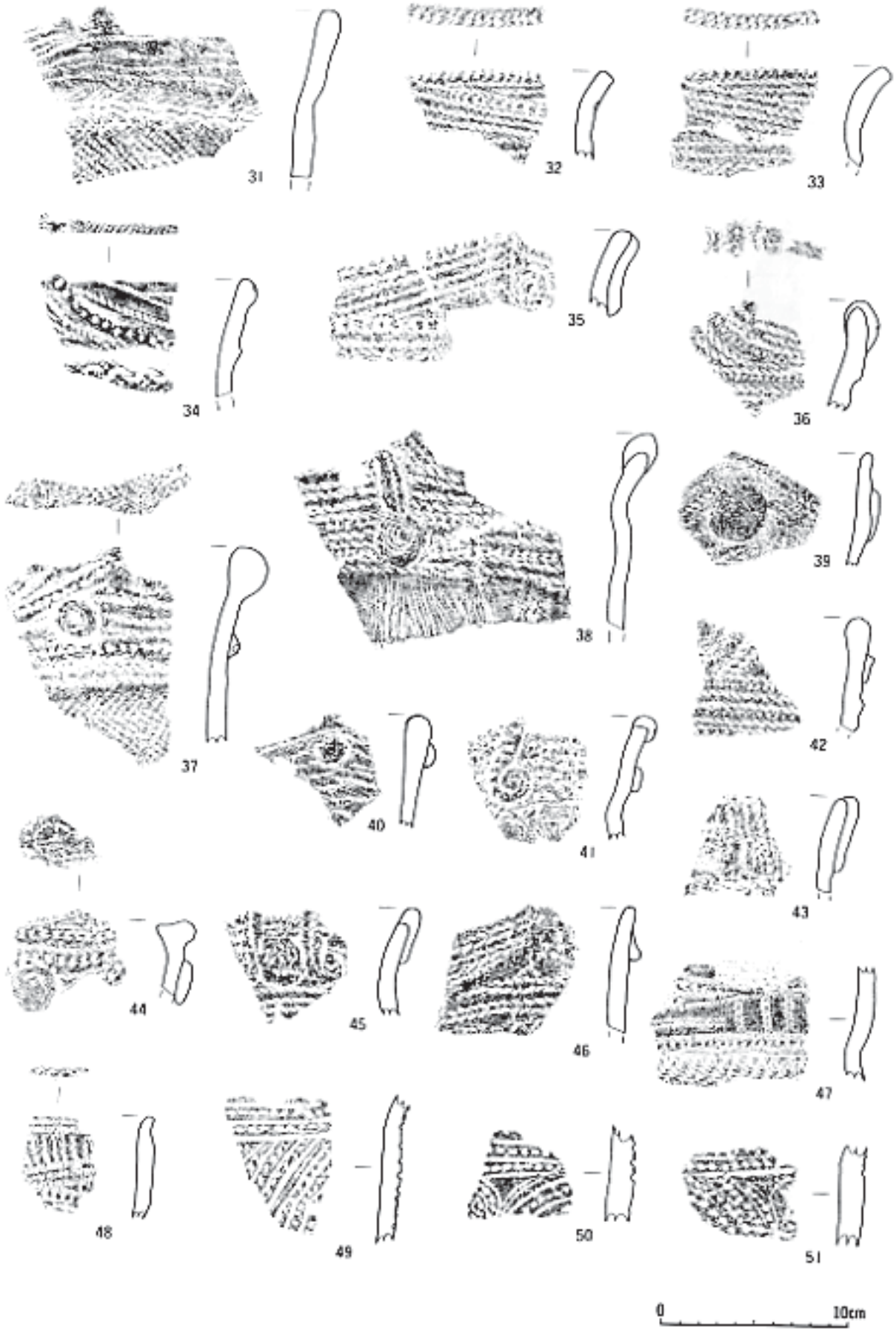


第 25 図　遺構外出土遺物（土器 1）

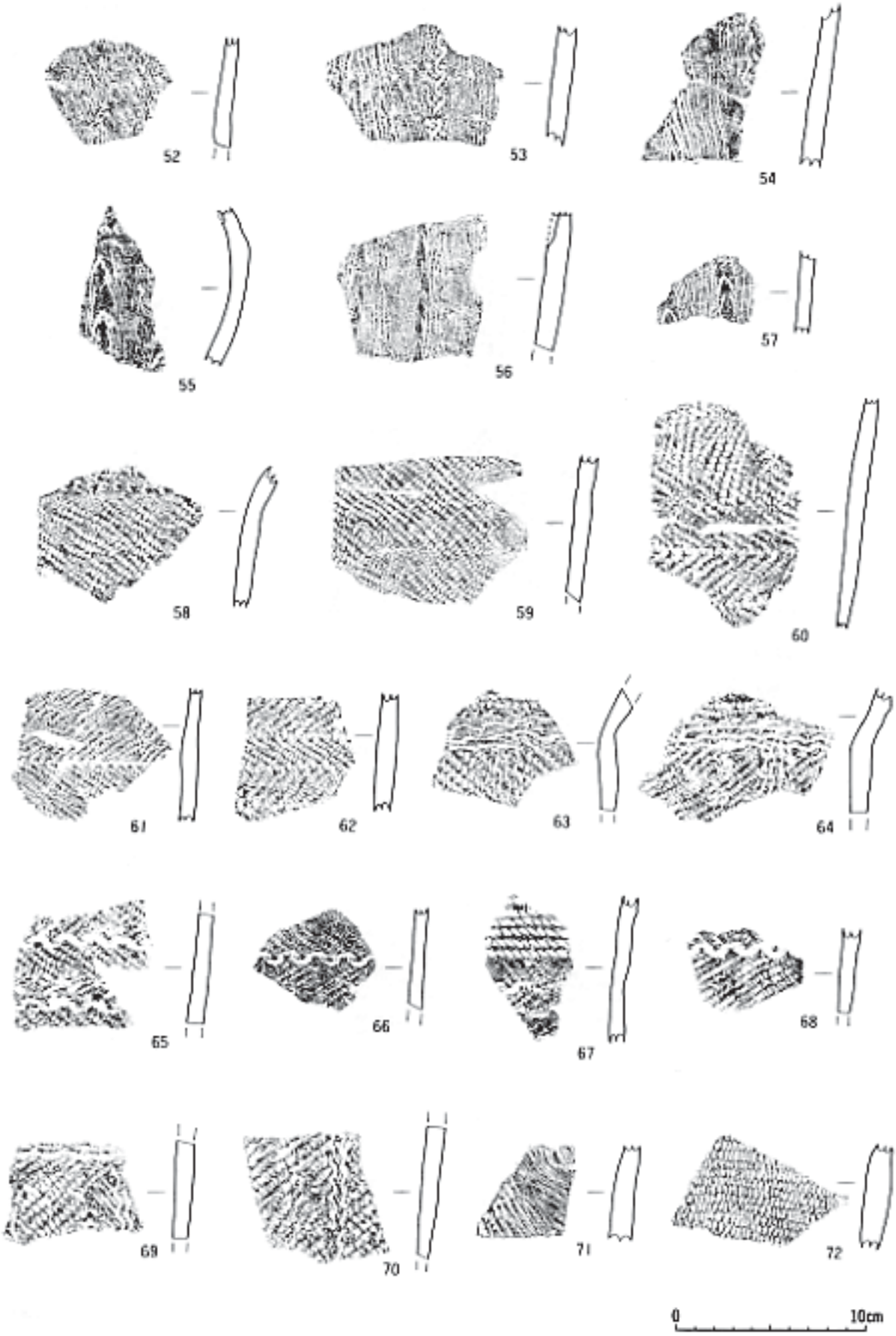


第 26 図　遺構外出土遺物（土器 2）

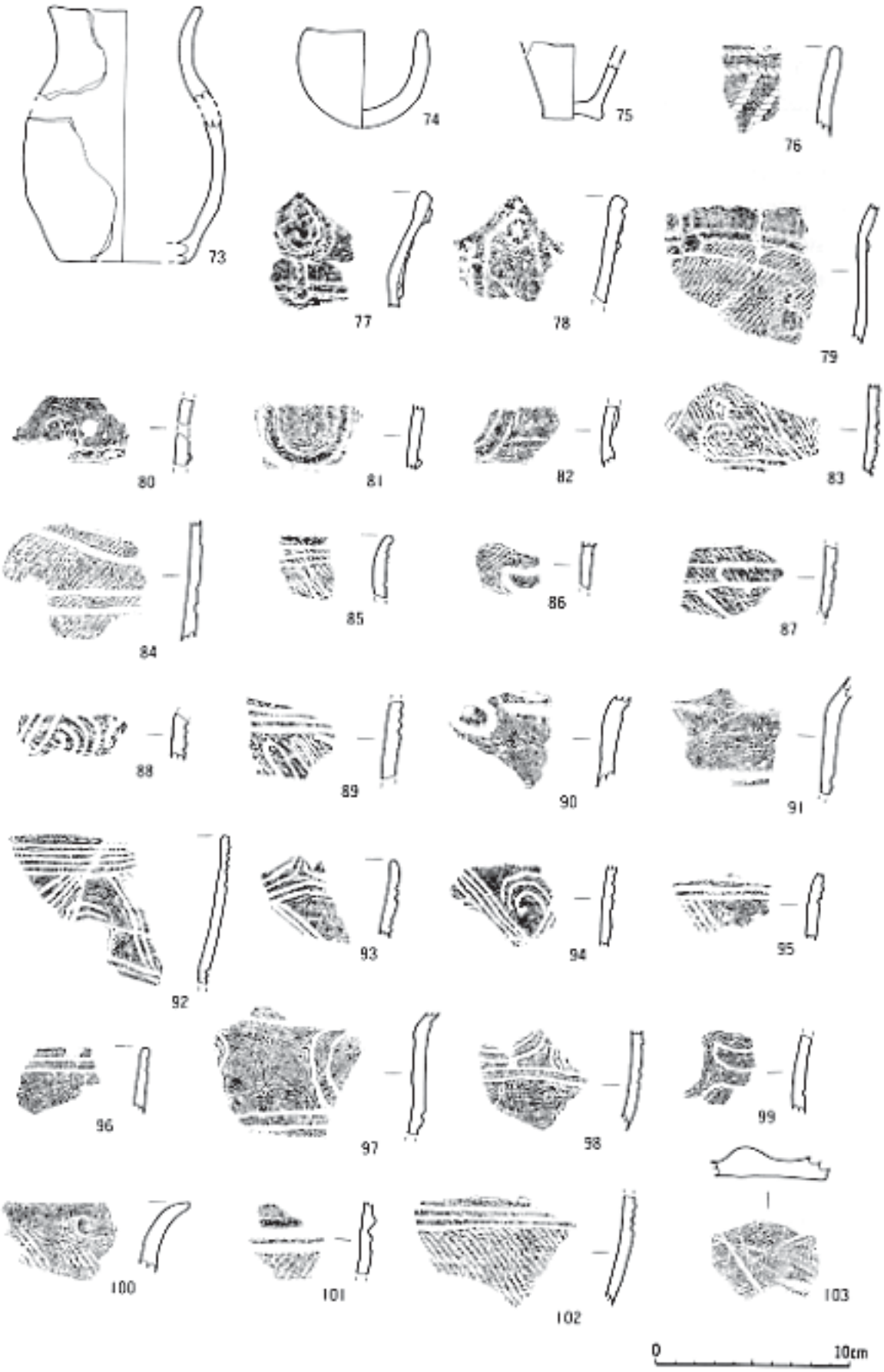
第 27 図　遺構外出土遺物（土器 3）



第 28 図　遺構外出土遺物（土器 4）



第 29 図　遺構外出土遺物（土器 5）



第 30 図　遺構外出土遺物（土器 6）

(2) 石器

今回の調査では、石器が31点出土した。以下、器種別に記載することとする。ここでは、遺構内及び遺構外から出土した土器について併せて記述した。

石鏃

左右対称またはそれに近い三角形を呈する薄手の石器である。

第1号住居跡から1点、第5号土坑から1点（第22図1)、第19号土坑から1点（第22図2)、遺構外から1点（第31図2)、計4点出土した。住居跡出土の石鏃は、舌状の基部を有し、先端部は丸みを帯びている。調整は全面調整である。土坑出土の石鏃は、どちらも基部を欠損している。調整は両面とも刃部付近に集中しており、中央部には主要剥離面が残存している。遺構外出土の石鏃は円基鏃で、基部には黒色物質の付着がみられる。調整は全体に粗く、背面はほぼ全面に、腹面は刃部にのみ調整が施されており、腹面の中央部には主要剥離面が残存している。

石箆

分銅形もしくはそれに近い形状で、長軸と結んだ一辺に、両面又は片面調整の刃部をもつもので定型的なもの。

第7号土坑から1点（第22図6）出土した。刃部が弓状に湾曲している。調整は、背面の刃部から右側縁にかけてと、腹面の左側縁と右側縁の一部、刃部の一部にかけて調整を施している。全体に主要剥離面が大きく残存している。

不定形石器

第5号土坑から2点（第22図3・4)、第24号土坑から1点（第22図5)、遺構外から2点（第31図1・3)、計5点出土した。第5号土坑出土の石器は、どちらも薄手の剥片を利用しており、鋭利な側縁に、刃部として使用した痕跡がみられる。第24号土坑出土の石器は、背面の右側縁から先端部にかけて刃部を作出しており、主要剥離面が大きく残存している。腹面は無調整である。

磨製石斧

分銅形もしくはそれに近い形状を呈し、全面もしくはほぼ全面に磨き調整が施されているもの。

遺構外から1点（第32図6）出土した。両側縁は直線的で、基部の幅と刃部の幅はほぼ同じ、短冊形を呈し、両面に溝状の擦り切り痕がみられ、やや厚みがある。器面全体に製作時の擦痕がみられる。基部は欠損している。

敲磨器類

自然礫の稜または面に敲打痕・磨痕・くぼみ等の加工痕がみられるもの。

第1号住居跡から5点（第7図2・4～7)、第4号土坑から1点（第24図12)、第5号土坑から2点（第23図8・9)、第8号土坑から1点（第23図7)、第24号土坑から1点（第24図11)、遺構外から5点（第31図5　第32図7・8・10・11)、計15点出土した。住居跡出土の2は、偏平な円礫の中央付近の両面に、1つずつくぼみを有し、直線を呈する稜部に擦痕がみられる。第7図4は、楕円形の礫の平らな面のうち2面に2つずつのくぼみを有し、長軸の末端と、くぼみの間の稜部に擦痕がみられる。第7図5は長円

形の礫の末端に敲打痕がみられる。第7図6は、器厚が厚く、直線状を呈する機能面と思われる一辺に擦痕が、頭頂部から側縁にかけて敲打痕がみられ、機能面の周辺には剥離痕がみられる。7は、やや厚みのある偏平な礫の両面に1～2つのくぼみを有する。第4号土坑出土の第24図12は、長円形の礫の偏平な面にくぼみを有し、くぼみの間の稜部に擦痕がみられる。第5号土坑出土の第23図8は、末端部に敲打痕があり、片面を擦っており、もう片面には器面調整と思われる剥離痕がみられる。この石器は、形態から半円状扁平打製石器の範疇に含まれる可能性もある。第23図9は、薄手のやや角張った礫の両面に、くぼみを有する。第8号土坑の第23図7は、細長い礫に器面調整のための剥離痕及び、敲打痕がみられ、直線的な面には擦痕がみられる。第24号土坑の第24図11は、大きめの楕円形の礫の片面に、1つのくぼみを有し、もう片面には9つのくぼみを有する。実際に持ってみると、1つのくぼみに右手の親指が、反対側の4つのくぼみには人差し指、中指、薬指、小指がそれぞれフィットする。

遺構外出土の第31図5は、長円形の礫の対になる稜に、2つずつの浅いくぼみを有し、くぼみの間の稜に擦痕がみられ、両端部に敲打痕がみられる。第32図7は、細長い円礫に器面調整のための剥離痕がみられ、直線的な稜には擦痕がみられる。第32図8は、断面形が三角形を呈する細長い礫の平坦な面の2面に浅いくぼみを1つずつ有し、もう一つの面には敲打痕がみられる。第32図10は、やや長円形の礫の片面に1つの浅いくぼみを有し、両端部に敲打痕がみられる。第32図11は、器厚がやや厚く、直線状を呈する機能面と思われる一辺に擦痕がみられ、片面全面に剥離痕がみられる。

石皿

機能面と考えられる皿状の面をもち、器形を敲打や擦りによって調整しているもの。

第1号竪穴式住居跡から1点（第7図3）、第17号土坑から1点（第24図13）、遺構外から1点（第31図4）、計3点出土した。住居跡出土のものは、破損しており、両面を機能面とする。土坑出土のものは、破損したかけらであり、両面に滑らかな機能面をもち、火焼を受けた痕跡がみられる。遺構外出土のものは、やや厚手で、片面を機能面とする。

砥石

比較的偏平な礫を使用し、中央部が湾曲した溝状の幅広な磨痕がみられるもの。

遺構外から1点（第32図9）出土した。片面にU字を呈する溝状の機能面と平らな機能面をもち、もう片面には平らな機能面をもつ。全体に故意に打ち欠いたとみられる剥離痕がみられる。

石棒

長い棒状の磨製石器。

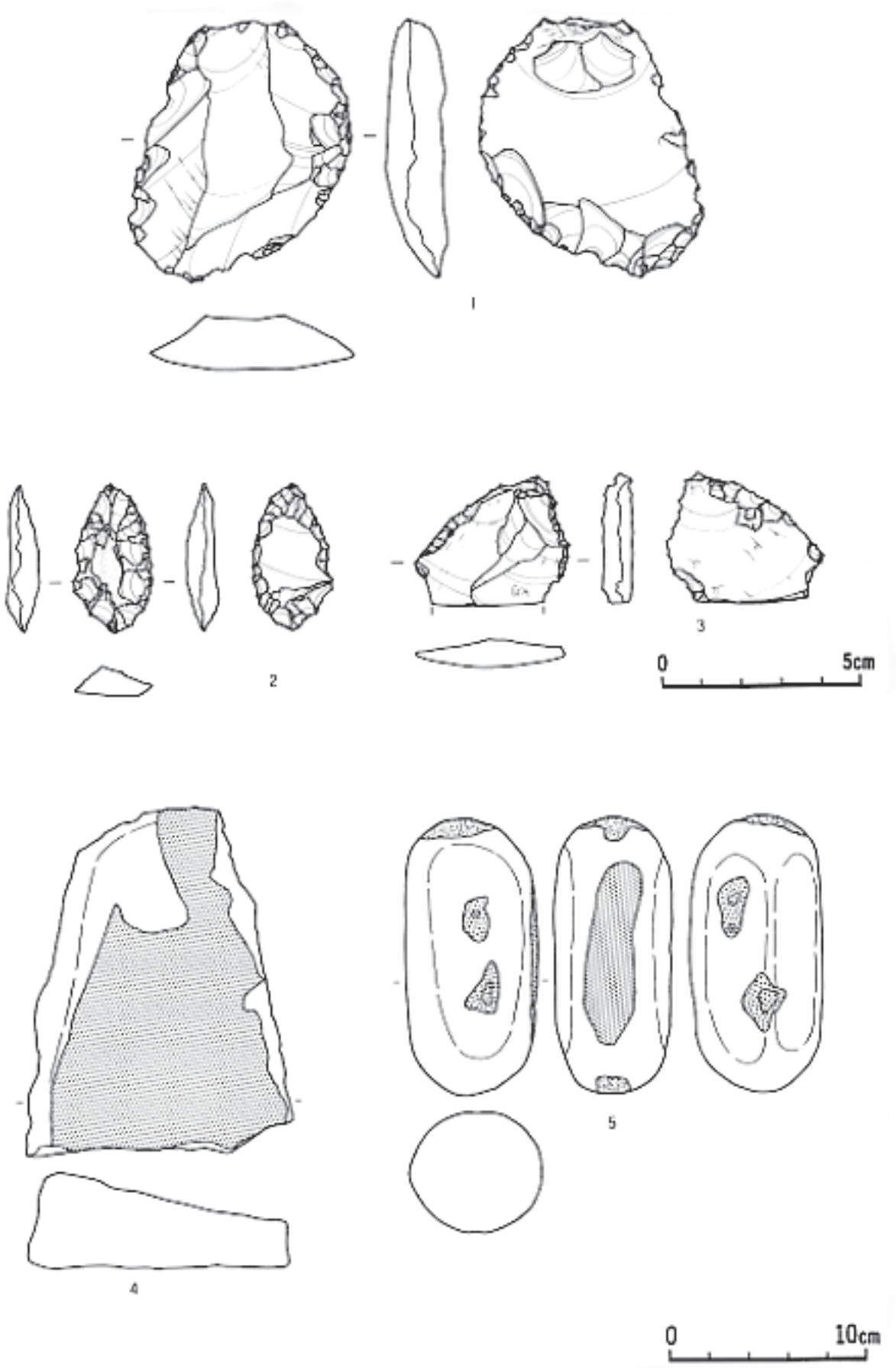
第14号土坑から1点（第23図10）出土した。全面にていねいな擦りによる調整がみられ、一部には敲打痕が残存している。

（田澤淳逸）

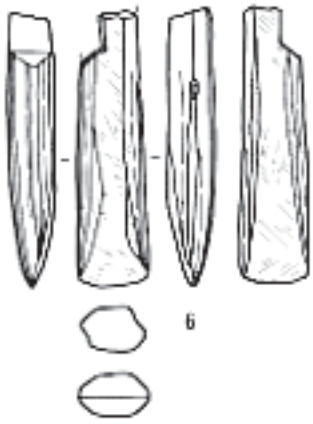
（3）土製品

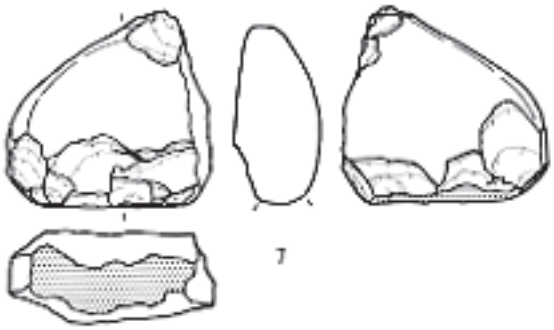
焼成粘土塊である。第4号土坑覆土から5点出土し、うち2点を掲載した（第24図14・15）。形状は、長方形や不整な方形を呈し、片面あるいは両面に平坦面を有する。製作方法や胎土、色調等から、いずれも同時に製作されたものと考えられる。胎土中には粗砂粒～細礫が多量混入している。

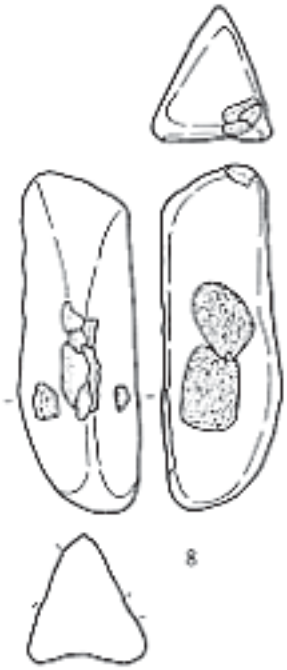
（児玉大成）

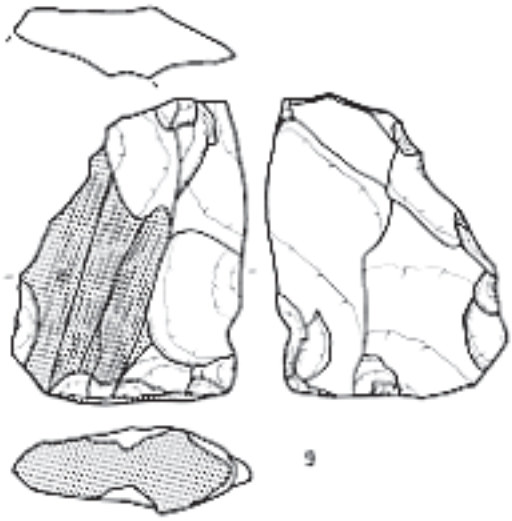


第 31 図　遺構外出土遺物（石器 1）









第 32 図　遺構外出土遺物（石器 2）

第２節　平安時代の遺構と遺物

１．検出遺構

（1）竪穴式住居跡

第２号竪穴式住居跡ａ（第33図）

［位　　置］A・B－25・26グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

［重　　複］精査時に２軒の住居の重複であることが判明し、便宜上古い方をａ、新しい方をｂと呼称することにした。また、縄文時代の第22号土坑、第25号土坑と重複している。

［平面形・規模］ｂに切られているため全体形を確認することはできなかったが、方形を呈するものと考えられる。規模は、西壁3.4m、3.1mを計る。主軸方位は、N－64°－Wである。

［　壁　］ほぼ垂直に立ち上がり、やや脆弱である。壁高は55cmを計る。

［　床　］ほぼ平坦で、堅緻である。貼床を部分的に確認した。ｂと床面を共有する。

［壁　　溝］カマドの部分を除いて、残存部に関しては全周確認した。

［柱　　穴］確認されなかった。

［カ　マ　ド］住居の西壁のほぼ中央部に構築されており、煙道部はトンネル式である。袖部は崩壊が著しいため確認されなかった。火焼部の焼けロームが約10cmの厚さで認められた。

［堆　積　土］３層に分層した。

［その他の付属施設］なし。

［出　土　遺　物］カマドから９世紀後半～10世紀前半に相当する土師器甕が１点出土している（第34図3）。

［時　　期］出土遺物から、９世紀後半～10世紀前半に構築されたものと考えられる。

第２号竪穴式住居跡ｂ（第33図）

［平面形・規模］ａを切っており全体形は確認できなかった。規模は、北東壁2.8m、南東壁2.6mを計る。主軸方位は、S－58°－Eである。

［　壁　］ほぼ垂直に立ち上がり、やや脆弱である。壁高は55cmを計る。

［　床　］ほぼ平坦で、堅緻である。ａと床面を共有する。

［壁　　溝］残存部に関しては、北東側で確認した。

［柱　　穴］確認されなかった。

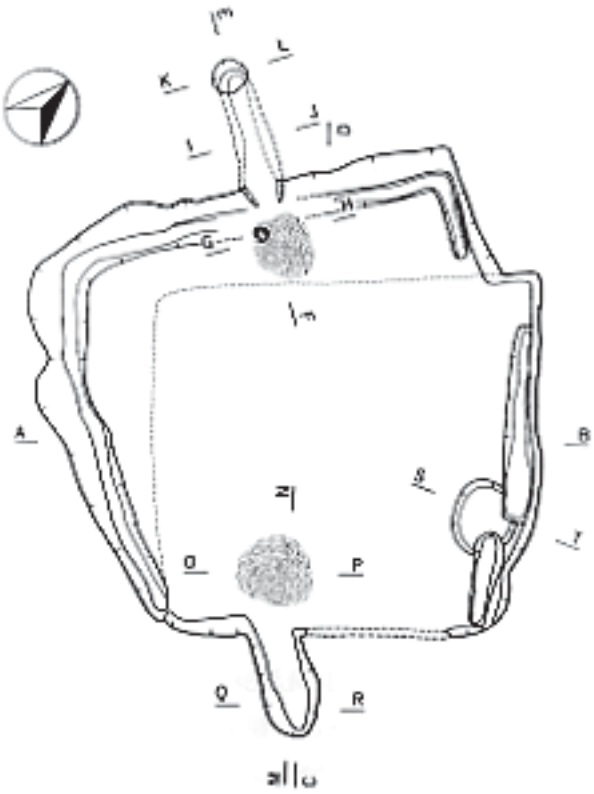
［カ　マ　ド］住居の西側のほぼ中央部に構築されており、煙道部は半地下式である。袖部は崩壊が著しいため確認されなかった。火焼部の焼けロームが約12cmの厚さで認められた。

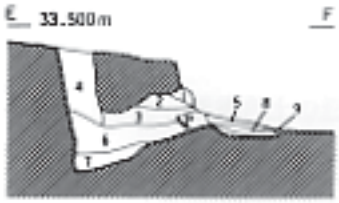
［堆　積　土］６層に分層した。

［その他の付属施設］なし。

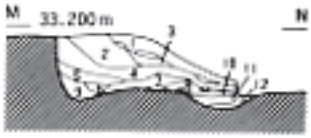
［出　土　遺　物］土師器片が約30点出土し、床直から９世紀後半～10世紀前半に相当する土師器杯・甕が数点出土している（第34図1・2・4～15）。

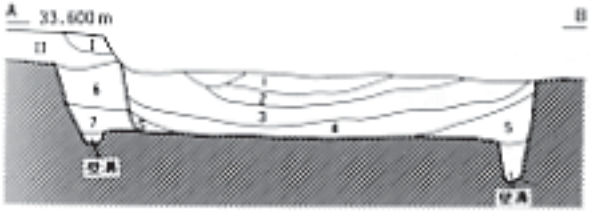
［時　　期］出土遺物から、９世紀後半～10世紀前半に構築されたものと考えられる。

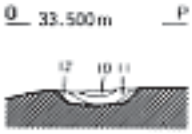


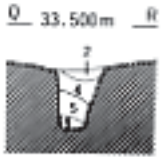


1	10YR3/4	暗褐色土 シルト、焼土粒多量 小石、パミス少量
2	7.5YR4/6	褐色土 ローム、焼土塊混入
3	5YR	暗褐色土 シルト、焼土塊多量
4	10YR3/3	暗褐色土 シルト、ローム粒少量
5	10YR3/4	暗褐色土 シルト、ローム粒、小石多量 （住居跡覆土5）
6	10YR3/4	暗褐色土 シルト、焼土塊少量
7	7.5YR3/4	暗褐色土 シルト、焼土塊多量
8	2.5YR3/6	暗赤褐色土 シルト
9	7.5YR4/4	褐色土 シルト





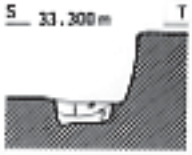




1	10YR3/3	暗褐色土 シルト、炭化物少量、ローム粒、焼、[illegible]多量 （住居跡覆土4）
2	10YR3/4	暗褐色土 シルト、焼土塊少量
3	10YR3/3	暗褐色土 シルト、ローム粒少量
4	10YR4/4	褐色土 シルト、焼土塊、黄褐色ローム塊混入
5	10YR3/4	暗褐色土 シルト、炭化物少量
6	10YR2/3	黒褐色土 シルト、炭化物多量
7	7.5YR3/4	暗褐色土 シルト、炭化物、焼土粒少量
8	7.5YR4/6	褐色土 シルト、焼土粒多量
9	10YR1.7/1	黒土 シルト
10	7.5YR5/8	明褐色土 シルト、下層炭化物多量
11	2.5YR3/6	暗赤褐色土 シルト
12	7.5YR4/4	褐色土 ローム、炭化物少量

第2号土坑

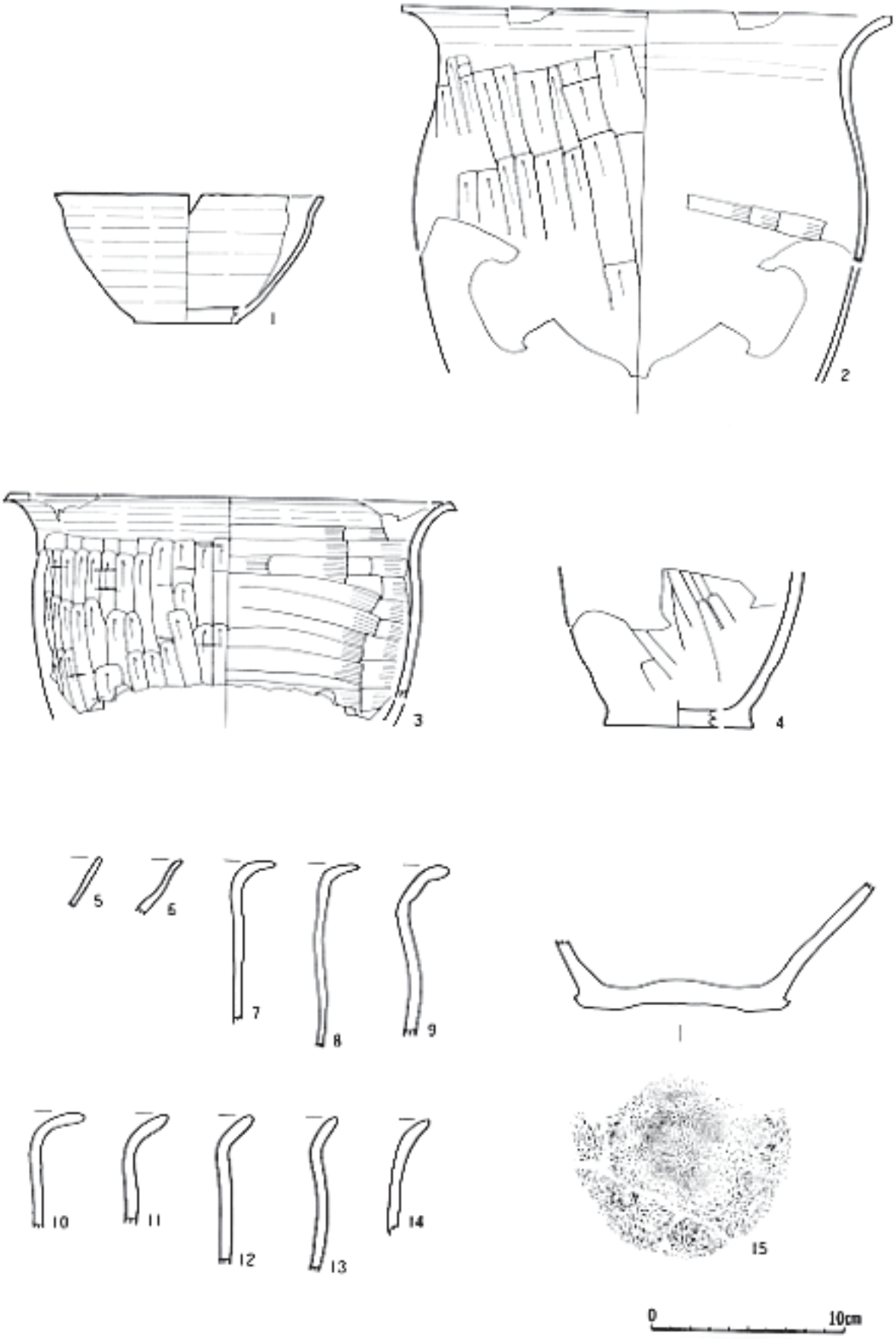
1	10YR3/4	暗褐色土 シルト、炭化粒少量
2	10YR3/3	暗褐色土 シルト、炭化粒・ローム粒少量、ブロック状火山灰（8－1m）
3	10YR4/4	褐色土 シルト、炭化粒少量、ローム粒多量
4	10YR3/3	暗褐色土 シルト、炭化粒少量、ローム粒ブロック・小石多量
5	10YR3/4	暗褐色土 シルト、ローム粒・少石多量
6	10YR4/4	褐色土 シルト、炭化粒少量、ローム粒多量
7	10YR3/4	暗褐色土 シルト、ローム粒、小石多量



1	10YR3/3	暗褐色土 シルト、焼土塊、炭化物多量
2	7.5YR4/4	褐色土 ローム

0 2m

第33図　第2号竪穴式住居跡



第 34 図　第 2 号竪穴式住居跡出土遺物

(2) 溝状遺構

第1号溝状遺構（第35図）

［位　　置］H－22～I－25グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒褐色土の筋状の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］総延長13.2m、最大幅約38cm、最深部12cmを計る。

［堆　積　土］1層である。

［出　土 遺　物］なし。

［時　　期］詳細は不明である。

第2号溝状遺構（第34図）

［位　　置］B－22～I－25グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、褐色土の筋状の落ち込みを確認した。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］総延長31.5m、最大幅約52cm、最深部30cmを計る。

［堆　積　土］1層である。

［出　土　遺　物］土製玉類が1点出土した（第34図）

［時　　期］詳細は不明である。

第3号溝状遺構（第34図）

［位　　置］F－28～E－29グリッドで検出した。基本層序第Ⅵ層上面で、黒色土の筋状の落ち込みを確認した。縄文時代に属する第20号土坑と堆積土が酷似しており、斜面の上位に位置し、土坑からの距離が近く約40cm程であることから、それに伴う可能性も想定される。

［重　　複］なし。

［平面形・規模］総延長2.95m、最大幅約28cm、最深部24cmを計る。

［堆　積　土］1層である。

［出　土 遺　物］なし。

［時　　期］詳細は不明である。

（田澤淳逸）

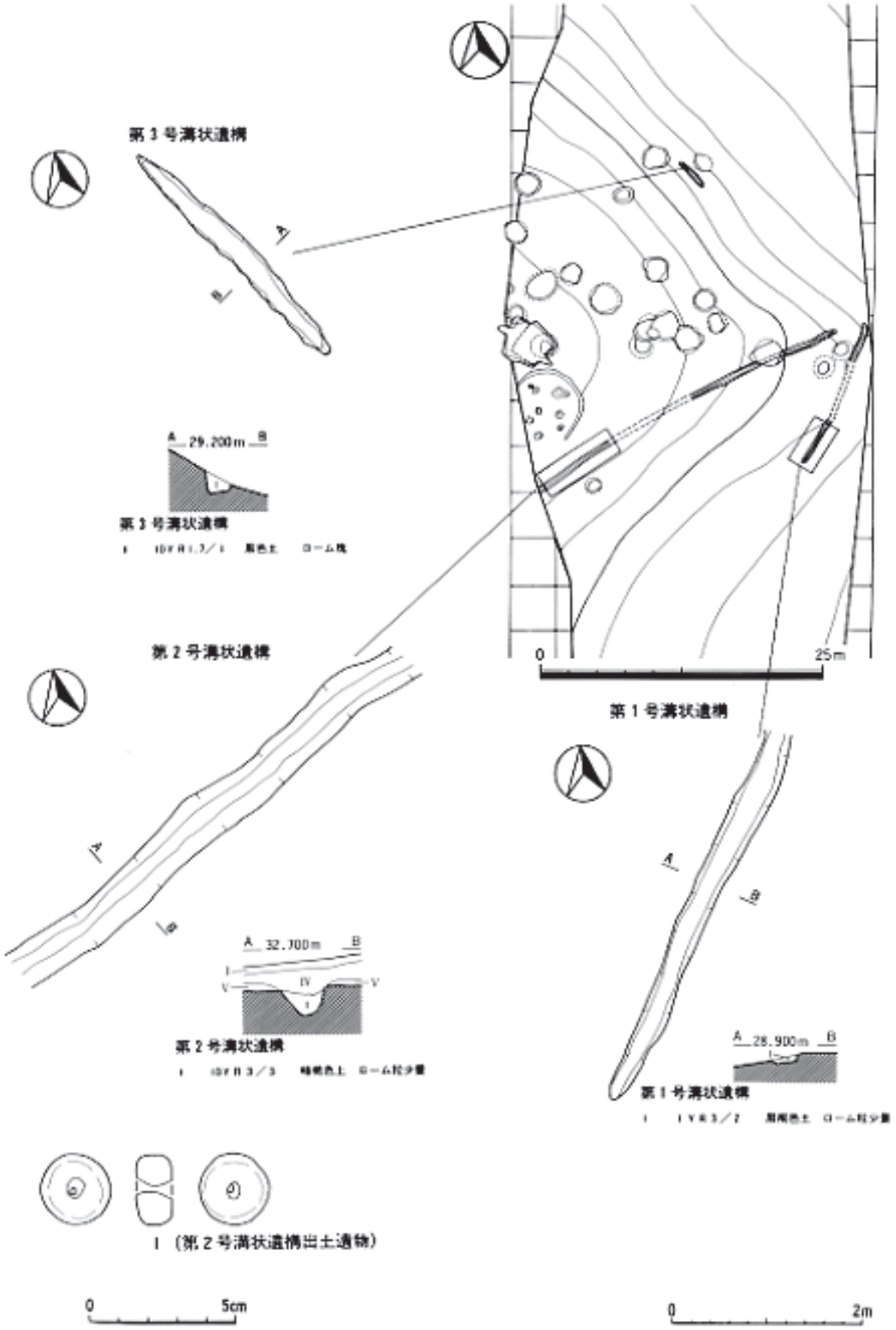
2．出土遺物

(1) 土師器

本遺跡で出土した土師器は、破片で約50点出土し、うち30点は第2号竪穴式住居跡から出土した（第34図）。器種は、坏、甕と特定できなかったものがある。以下、器種別に記述していく。

坏（第34図1・5・6、第36図1）

器形は、第34図1と6が椀形、第34図5と第36図1が椀形あるいは皿形を呈するものでロクロ成形に



第 35 図　第 1 ～ 3 号溝状遺構及び第 2 号溝状遺構出土遺物

よる。口縁部は、第34図1と6がかるく外反し、5が直線的である。底部は、第34図1が剥落し、第36図1が回転糸切によるものである。

甕（第34図2～4・7～15、第36図1・2）

器形は、ほとんどが2cm程度の口縁部が外反するもので、屈折するもの（第34図7・8・10）もみられる。口縁部は、ほとんどが横方向のヘラナデが施されている。胴部は、縦方向のヘラケズリやヘラナデが施され、内面は口縁部とともに横方向のヘラナデが多用されている。底部は、砂底のもの（第34図15）もみられる。

口縁部の形態と胴部の成形技法から、9世紀後半から10世紀前半（工藤　1998）に所属するものと考えられる。

器種が特定できなかったもの（第36図4）

底部と思われるが、器種は不明である。残存部径で13.5cmを計り、推定約16cmあるいは、それ以上になるものと思われる。径11cmの円形を呈する板状の粘土と、その上に径13cm以上の粘土板とを合わせて作られている。中央の円形の粘土板の方は砂が付着している。

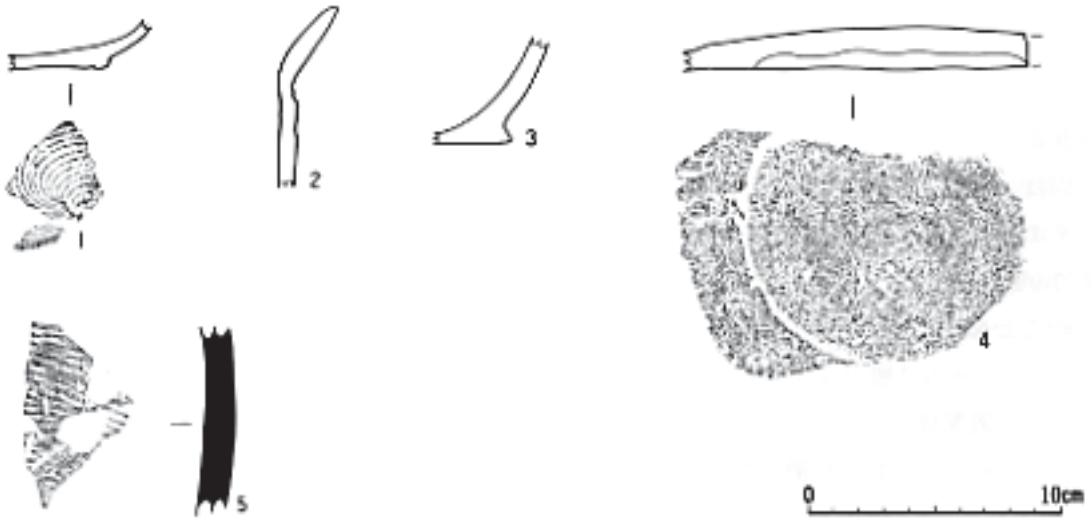
(2) 須恵器（第36図5）

遺構外より1点出土した。色調は灰白色を呈し、破片外面に見える叩き痕は、細かい平行叩き目である。内面は、当て具痕が残されておらず、ナデ調整によるものである。

(3) 土製品（第35図1）

A－22グリッドに位置する第2号溝状遺構の覆土1層から土製玉類が1点出土した。形状は、月形を呈し、短軸方向に貫通孔がみられる。径2.5cmを計り、貫通孔は、両面から穿ち、孔径は4～5mmを計る。重量は、8.6gを測る。

（児玉　大成）



第36図　遺構外出土遺物

第Ⅳ章　分析と考察

第１号竪穴式住居跡における時間的変化

縄文時代に所属する竪穴式住居跡は、西側から伸びる台地の先端部（A・B－23・24グリッド）から１軒（第１号竪穴式住居跡）検出した。

住居跡構築時期は、出土した土器（第Ⅰ群土器）から推定して、縄文時代前期末葉から中期初頭にあたる円筒下層d_2式～円筒上層a式土器期に属するものと考えられる。本住居跡の形態や規模等については、第Ⅲ章の事実記載のとおりであるが、住居建て替えについて、炉と柱穴の配置関係からこの１軒の住居における時間的な変化について検討してみたい。

A. 推定方法

竪穴式住居の構築は、地表を掘り下げ、床や壁を作り、柱を立てて屋根を架ける。また、建材も調達する。本住居跡も、処女地にこうした作業を経て構築されている。やがて、この住居跡は何らかの理由で建て替えられ、最初の構築から時間的経過が存在する。

時間の長短を知ることは難解であるが、構築時の情報は入手することができ、本住居跡では、それが柱穴の観察により読み取れる。

その情報を理解すれば、柱穴の配置関係も推察できるだろうし、そこから、住居跡の形状も推定できる。また、2基ある炉と柱穴配置との位置関係も過去の検出例から導き出すことができれば、炉の重複関係から、本住居跡の新旧関係は理解できる。

B. 柱穴の配置関係

柱穴と想定できるものは、浅いものから深いものまで、合計９基のピットを確認した。

ピットの開口幅は最小で30㎝、最大で105㎝を計り、平面上での規模のまとまりは認められない。ピットの深さでは、15㎝から最深で112㎝を計り、30㎝以下のものがPit3・4・6、60㎝以上のものがPit1・2・5・7・8・9の二群に分けることができる。

ピットの形態では、30㎝以下のものが円筒形（Pit6は一部）、60㎝以上のものが寸胴形（Pit1・9）と開口部が広い円筒形（Pit2・5・7・8）が認められる。

こうした形態の違いは、建材の種類や規模、掘り方の規則性、そして時間差などが考えられる。これらを考慮に入れたうえで、柱穴の配置を考えてみると主柱穴の配置が２通り想定される。

１つ目は、寸胴形と小型のものの組み合わせで、Pit1・4・6・9が考えられ、寸胴形Pit1・9間がピットの中心で3.8m、小型Pit4・6間が中心で4.4mを計る。４本柱で各線を結ぶと四角形を呈する可能性が想定される。

２つ目は、開口部が広い円筒形の組み合わせで、Pit1・2・5・7・8が考えられ、各間2～2.5mを計る。その配置と規模から、調査区外へと伸びる６本柱あるいは８本柱で、各線を結ぶと六角形を呈する可能性が想定される。

以上のことを前提とした場合、住居跡のプランは、前者が円形、後者が楕円形を呈するものと想定できる。

C. 炉との位置関係

過去の検出例から、炉の位置を検証する。

本住居跡は、円筒下層d_2式～円筒上層ａ式土器期に属するものと考えられるが、時間幅を少し大きく

みて、円筒下層 d_1 式土器期まで溯り、上尾駮（1）遺跡（青森県教育委員会　1988)、熊ヶ平遺跡（青森県教育委員会　1995)、津山遺跡（青森県教育委員会　1997）の3遺跡を対象に、炉と住居跡のプランおよび柱穴配置との位置関係を抽出してみた。

上尾駮（1）遺跡C地区（青森県教育委員会　1988）
青森県上北郡六ヶ所村
第6号住居跡　楕円形の住居跡のほぼ中央に炉と思われるピットが位置している。(4本柱の中央に位置)
第7号住居跡　楕円形の住居跡のほぼ中央に炉と思われるピットが位置している。(2本柱の中央に位置)
第8号住居跡　楕円形の住居跡のほぼ中央に位置している。(6本柱の中央に位置)
第10号住居跡　円形の住居跡の北西寄りに位置している。(4本柱の北西寄りに位置)
第11号住居跡　楕円形の住居跡の長軸方向の壁寄りに2基が位置している。
第16号住居跡　楕円形の住居跡のほぼ中央に位置している。(4本柱の中央に位置)

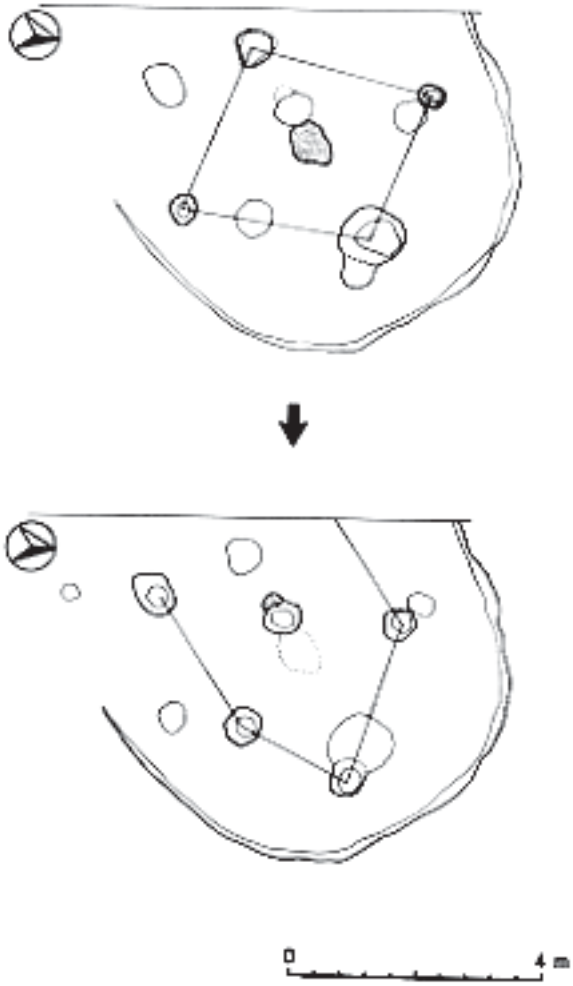
熊ヶ平遺跡（青森県教育委員会　1995）
青森県下北郡川内町
第1号竪穴住居跡　楕円形の住居跡の中央に焼土多量混入のピットが位置している。(4本柱の中央に位置)
第3号竪穴住居跡　円形の住居跡のほぼ中央に位置している。
第5号竪穴住居跡　楕円形の住居跡の長軸方向の壁寄りに2基が位置している。
第6号竪穴住居跡　楕円形の住居のほぼ中央に1基、長軸方向の壁よりにもう1基が位置している。(前者は4本柱の中央に位置)

津山遺跡（青森県教育委員会　1997）
青森県西津軽郡深浦町
第18号竪穴住居跡　楕円形の住居跡のほぼ中央に位置している。
第19号竪穴住居跡　円形の住居跡のほぼ中央に位置している。

以上の住居跡の特徴をまとめると、円形のものでは、炉がほぼ中央に位置し、4本柱の中央部に位置する例が目立つ。楕円形のものでは、炉が中央に位置し、2および4ならびに6本柱の中央部に位置する例がみられ、中でも4本柱のものが目立つ。また、長軸の壁寄りに2基位置する例もみられる。

これらのことから本住居跡の炉は、住居跡の中央部に位置する可能性が高く、そうした場合、炉aは円形、炉bは楕円形のプランを呈する住居跡に付属されるものと想定でき、炉aがPit1・4・6・9、炉bがPit2・5・7・8との関係が成立する。そして、炉aの地床炉が炉bの掘り込みに切られていることから、炉aから炉b即ち円形から楕円形の住居跡への変遷が考えられる。

第37図　第Ⅰ群土器期（●）と第Ⅱ群土器期（●）の遺構配置



第38図　第1号竪穴式住居跡の変遷

検出土坑の形態と構築時期

本調査では、標高24m～33mで約3,500m²の調査区から、縄文時代に帰属される土坑を24基検出し、標高29m以上、主に西側から突出する台地上に立地している。これらの土坑は形態から5つに分けることができ、ナベ形を呈するもの1基（第1号土坑）、円形を呈するもの1基（第23号土坑）、フラスコ状を呈するもの20基（第2～8、10、12～14a、b、15～19、22、24、25号土坑）、斜面高位に内傾する壁をつくるもの1基（第20号土坑）、溝状を呈するもの1基（第26号土坑）がみられた。

出土した土器から、構築または使用時期を考えてみると、第Ⅰ群土器（円筒下層d_2式～上層a式土器期）に相当する土坑が第1、4～8、13、18号土坑で、第Ⅱ群土器（牛ヶ沢(3)式～弥栄平(2)式土器期）に相当する土坑が第2、3、14a、b、15～17、19、24号土坑で、第Ⅲ群土器（晩期後半）に相当する土坑が第20号土坑である。時期的に不明なものは、第10、12、22、23、25号土坑であった。したがって、第Ⅰ群土器に帰属される土坑は、ナベ形（1基）、フラスコ状（8基）を呈するもの、第Ⅱ群土器に属される土坑はフラスコ状（9基）を呈するもの、第Ⅲ群土器に帰属される土坑は斜面高位に内傾する壁をつくるもの（1基）、ほかは時期不明である。次項では、本調査で最も検出数が多い、上記のフラスコ状を呈する土坑（以下、フラスコ状ピット）について検討を加えることとしたい。

フラスコ状ピットの堆積状況と用途

このフラスコ状を呈する土坑は、理科の実験器具である「フラスコ」に類似することから、「フラスコ状ピット」「フラスコ状土坑」などと呼称されている。この土坑の機能については主に貯蔵施設として考えられている場合が多いが、廃棄物の処理穴として転用される場合や、秋田県萱刈沢貝塚（八竜町教育委員会　1974）や本県畑内遺跡（青森県教育委員会　1995a）などから人骨が出土しており、土坑墓として転用されたものも存在する。土坑墓については、フラスコ状ピットが開口状態で使用されることから、「埋めない墓」つまり、埋めずにそのまま遺体を安置する葬法の可能性も考えられている（小林　1997）が、一般的に考えられている一次埋葬用の墓として機能していたか、そうでないかは、土坑埋土の堆積状況により推察できる。

昭和60年に刊行された『石ノ窪（1）・石ノ窪（2）・古宮遺跡』（青森県教育委員会　1985）において、工藤大氏が、フラスコ状ピットの埋没過程について考察されており、黒色シルト質系の土と黄褐色火山灰系の土壌の分布によって、堆積土を次の5類に分類し、

Ａ　黒色シルト質系の土がほぼ全体に堆積する例
Ｂ　黄褐色火山灰系の土が壁よりに多く堆積する例
Ｃ　黄褐色火山灰系の土が底面中央に堆積する例
Ｄ　黄褐色火山灰系の土が上位中央に堆積する例
Ｅ　黄褐色火山灰系の土がほぼ全体に堆積する例

を取り上げ、Ａ・Ｂ・Ｅの例を自然堆積とし、Ｃを人為的によるもの、あるいは自然堆積、Ｄを自然堆積がかなり進んだ時点で、遺構の上部を人為的に埋めた例としている。

本遺跡で検出したフラスコ状ピットの堆積状況を上記の例にあてはめると、
Ａが、6基（第2、8、12、17、19、25号土坑）
Ｂが、10基（第3、6、7、10、14a、14b、15、16、18、24号土坑）
Ｃが、3基（第4、5、22号土坑）
Ｅが、1基（第13号土坑）認められた。したがって、Ａ、Ｂ、Ｅに属したものは自然堆積、Ｃに属したものは人為あるいは自然堆積で、ほとんどが自然堆積である可能性が想定される。

このことから、本遺跡でのフラスコ状ピットは、墓として使用された痕跡（土坑中の覆土が撹乱状態の単層）はほとんどなく、貯蔵穴としての用途が推定される。

フラスコ状ピットは、東日本に多く分布し、本遺跡も同様に台地や丘陵上に設置される「乾燥地型貯蔵穴」（塚本　1993）として理解される。永瀬福男氏は、秋田県下堤・萱刈沢貝塚・館下Ⅰ遺跡の3遺跡において、貯蔵穴を前提としながら外気と土坑内の温度・湿度を測定し、外気の変化に関係なく、温度15℃前後・湿度90％以上であるという実験結果による裏付けをはかっている（永瀬　1981）。参考までに、本遺跡の第4号土坑（二重構造のフラスコ状ピット）について同様に実験した結果、外気の温度が27～32℃のとき、下部の土坑内が18～18.5℃とほぼ一定の温度を保っていた。塚本師也氏は、大型のフラスコ状土坑が一定の温度・湿度に保たれた空間を確保することに大きな威力を発揮するとし、貯蔵方法について、内部に貯蔵物を充填するよりもカゴなどの容器に入れて土坑のオーバーハングする部分に収納するという方法を推定している（塚本　1993）。本遺跡においても、第2～5号などにみられるような溝状や円形の掘り込みや二重構造の土坑の存在が氏の指摘の傍証となる。

本県において、貯蔵物として考えられる遺物が出土した遺跡は、泉山遺跡（青森県教育委員会　1976）、

地蔵沢遺跡（黒石市教育委員会　1992・1993)、野場（5）遺跡（青森県教育委員会　1993)、風張1遺跡（八戸市博物館　1997）などで、貯蔵穴としての機能をもつ有力な例である。

フラスコ状ピットの配置

本遺跡では、発掘調査面積が狭いことから遺構配置の全体は不明である。第Ⅰ群土器期の前期末葉～中期初頭のフラスコ状ピット群は、西側から突出する台地の縁辺部、西高東低の緩～急斜面に作られ、その内側に第1号竪穴式住居跡が位置している。第Ⅱ群土器期の後期初頭のフラスコ状ピット群も、台地の縁辺部に作られるが、第Ⅰ群土器期のピット群よりも内側の緩斜面に位置している。

遺構配置については、永瀬福男氏が秋田県内における集落内の構築位置を3つのパターンに分類し、住居群の外側に群集する例（Aパターン)、住居群内と住居内に付設されるものが混在する例（Bパターン)、大部分が住居内に付設される例（Cパターン）があるとし、「Aパターンは縄文時代前期から中期に認められ、円筒式土器文化との接触の強い地域に類例が多い。また、B・Cパターンは、中期以降大木式土器文化との接触が強くなると類例が多くなる傾向が認められる。」と指摘している。この分類に従えば、本遺跡はAパターンに属し、また、本県においても円筒土器文化である桜峯（1）遺跡（青森市教育委員会　1997b)、畑内遺跡（青森県教育委員会　1995a)、津山遺跡（青森県教育委員会　1997）などもAパターンに含まれることから氏の分類の評価は高い。小林克氏は、墓制の相違から円筒土器文化において拠点集落と拠点集落から離れた小規模に営まれた集落の存在を推察し、本県三内丸山遺跡、二ツ森貝塚、秋田県池内遺跡が前者、本県畑内遺跡や岩手県上里遺跡、秋田県萱刈沢貝塚などを後者にあて、円筒土器文化の社会を二つの居住システム（拠点集落と衛星的集落）に支えられていると指摘している（小林　1997)。本遺跡や前記の桜峯（1）遺跡、津山遺跡なども、氏の指摘する衛星的集落として観ることができる。

第Ⅰ群土器について

本報告書では、第Ⅰ群土器を円筒下層d_2式～上層a式土器に相当するものとして位置付けた。「円筒下層d_2～上層a式土器」と表現したのは、二型式の融合あるいは過渡期の土器として一つの型式で取り扱うのではなく、下層d_2式と上層a式の両方の特徴を合わせ持つ土器も出土しており、両者の区分があいまいなため、二型式が連続した一群として捉えた。

調査指導員である村越潔氏によれば、円筒下層d_2式土器は「甕形を呈する平縁・波状口縁の土器であり、口頸部文様帯はd_1式よりも広く、その部分の文様は撚糸文を主体とし、それに隆起線文や刺突文を加えたものもあり、胴部は単節斜縄文・木目状撚糸文・縦位の羽状縄文と綾絡文などの文様を有する」とし、一方円筒上層a式土器について、「口縁に4個の弁状突起をもつ円筒形深鉢形土器である。口頸部文様帯に隆線を主とする文様があり、それは4つの区画を構成している。そしてこの文様帯には、隆線文の間に撚糸圧痕が平行・波状・鋸歯状・縦位に施文されている、…（中略）…一般に上層a式土器は、大形の器形を有するものが多い。…（中略）…大形の土器の場合、口頸部文様帯に2段を最小とし、5段を最多とする縦位の撚糸短線圧痕文が主文様であり、小形の土器では同じ文様帯に、波状ないし鋸歯状の複線撚糸圧痕文を有するものが多い。…（中略）…口頸部装飾には以上のほかに、橋状把手や三角状隆線文・ボタン状貼付文…（中略）…口頸部以下の胴部文様は、おもに単節の斜縄文が底部にかけて施文され、なかには渡辺氏のいう「結節のある羽状にならない縄文」も存在する。なおこれらの斜縄文

は、単節が多く複節のものは少ない。また口縁部の突起直下の胴部に、前述したごとく縦位の綾絡文の施文された土器もある。」（村越　1974）と述べられており、本報告書ではこれを円筒下層d_2式土器と円筒上層a式土器の定義として採用した。

本土器群のほとんどは、後者の要素が器面上に表現されていることから、円筒上層a式土器に帰属させることができ、また、江坂輝彌氏の指摘する円筒上層a_1式土器（江坂　1970）に比定させることもできる。第Ⅲ章で口縁部文様帯について分類した1類～9類の縦位の平行圧痕や隆帯が加えられるものなどがそうである。しかし、第4号土坑から、前記の円筒下層d_2式と上層a式の共併が認められること（第15図）、口縁部に橋状把手（欠落）のある土器で口縁部文様帯が円筒上層a（L・R圧痕）、胴部文様が下層d_2（単軸絡条体1A類）の特徴を示すもの（第27図16）、口縁部に垂下する粘土紐とボタン状粘土の貼り付けのある土器で、やはり口縁部文様帯が上層a（RL圧痕）、胴部文様が下層d_2（L・R単軸絡状体IA類）の特徴が認められ、円筒下層d_2式と上層a式土器の区分が難しい土器も出土している。

近年調査された青森市桜峯遺跡においても、単体の土器に円筒下層d_2式と円筒上層a式土器の特徴が胴部と口縁部に分かれるものも数点出土している。今後、このような土器を二型式の過渡期の土器として捉えるか、一つの型式として捉えるか、その妥当性について検討する必要があると思われる。

（児玉　大成）

ま と め

新町野遺跡は、青森市大字合子沢字松森に所在する遺跡で、八甲田山から延びる火山性の台地の標高20～35mに位置している。

本調査では、標高24～33mで約3,500m²の調査区から、縄文時代に所属する竪穴式住居跡1軒、土坑24基、平安時代に帰属される竪穴式住居跡2軒、溝状遺構3条を検出した。所属時期は、縄文時代のものは前期末葉～中期初頭の竪穴式住居跡1軒、土坑8基、後期初頭の土坑9基、平安時代のものは竪穴式住居跡が出土遺物から9世紀後半～10世紀前半に構築されたものと推察される。

遺物は、縄文土器が前期末葉～中期初頭の円筒下層d_2式～円筒上層a式土器を中心に、後期の牛ヶ沢(3)、弥栄平（2)、十腰内ⅠA式土器、晩期の大洞A式土器が出土した。それらの時期に含まれる石器は、石鏃、石箆、不定形石器、磨製石斧、敲磨器類、石皿、砥石、石棒、土製品では、焼成粘土塊が出土した。

平安時代の遺物では、9世紀後半から10世紀前半に位置付けられる土師器を中心に、須恵器、土製玉類が出土した。

本調査区は、検出遺構数が少ないものの縄文時代前期末葉～中期初頭および後期初頭、平安時代の集落の一部であったと想定される。特に、縄文時代前期末葉～中期初頭、巨視的には円筒土器文化の集落では、フラスコ状ピットが住居群外に配置される場合が多いことから、本遺跡も台地の縁辺部にフラスコ状ピットが群集し、その内側に竪穴式住居が位置するものと想定することができる。

調査員として、温かくご指導を賜って参りました小山陽造先生が、薬石の効なく平成9年8月5日、ご逝去されました。故小山陽造先生の、遺構の土壌を手に取り丹念に観察されていたお姿が目に浮かんで参ります。先生の在天の霊に対し、万感の思いを込めて追悼の意を表しますと共に、謹んで本書をご霊前に捧げさせていただきます。

（担当者一同）

引用・参考文献

青森県教育委員会　1976　第31集『泉山遺跡発掘調査報告書』
〃　1997　第34集『水木沢遺跡発掘調査報告書』
〃　1985　第92集『石ノ窪（1）・石ノ窪（2）・古宮遺跡発掘調査報告書』
〃　1988　第113集『上尾駮（1）遺跡C地区発掘調査報告書』
〃　1989　第119集『館野遺跡』
〃　1993　第150集『野場（5）遺跡発掘調査報告書』
〃　1994a　第161集『畑内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃　1994b　第165集『青森県遺跡詳細分布調査報告書』
〃　1995　第178集『畑内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃　1996　第180集『熊ヶ平遺跡発掘調査報告書』
〃　1997　第221集『津山遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1995a　第24集『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
〃　1995b　第26集『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』
〃　1996　第27集『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃　1997a　第31集『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃　1997b　第32集『桜峯（1）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃　1997c　第33集『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃　1997d　第34集『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』
〃　1997e　『平成8年度青森市遺跡地図』
江坂輝弥・笹津備洋・西村正衛　1958「青森県蟹沢遺跡調査報告」『石器時代』5
江坂輝弥　1970『石神遺跡』ニューサイエンス社
「角川日本地名大辞典」編纂委員会　1985『角川日本地名大辞典』角川書店
工藤清泰　1998「津軽平野の様相」『第24回　古代城柵官衙遺跡検討会資料』
黒石市教育委員会　1992第11集『地蔵沢遺跡』
〃　1993第12集『地蔵沢遺跡Ⅱ』
小林　克　1997「東北地方北部縄文時代の墓制」『考古学ジャーナル』422
塚本師也　1993「食料貯蔵」『季刊　考古学』44
永瀬福男　1981「秋田県内におけるフラスコ状ピットについて」『秋田地方史論集』半田教授退官記念編
成田滋彦　1989「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』4小学館
八戸市博物館　1997『風張遺跡の縄文社会』
八竜町教育委員会　1974『萱刈沢貝塚第3・4次概報』
三宅徹也・石岡憲雄　1969「青森市横内遺跡」『遮光器』2
三宅徹也　1974「青森県における円筒下層式土器群の地域展開」『北奥古代文化』6
三宅徹也　1981「円筒土器」『縄文文化の研究』3雄山閣
三宅徹也　1989「円筒土器下層様式」『縄文土器大観』1小学館
村越　潔　1974『増補　円筒土器文化』雄山閣
山内清男　1969『日本先史土器の縄文』

土器観察表　(1)

図版	番号	出土地点・遺構	層　　位	分類	器種	外　面　特　徴			
						口　縁　部	胴　部　上　半	胴　部　下　半	
6	1	1H	覆土3・4	I 13	深鉢	突起、刺突	ＬＲ	ＬＲ	
〃	2	〃	床面	I 2	鉢	ＬＲ・ＲＬ圧痕	ＬＲ結束第2種	ＲＬ	繊維少量
〃	3	〃	床直	I	深鉢	－	－	結節回転文2段（縦）、ＬＲ	
〃	4	〃	覆土4	I 7	〃	ＬＲ圧痕	ＬＲ	－	繊維少量
〃	5	〃	覆土2・4	I 4	〃	Ｌ圧痕、隆帯、刺突	ＬＲ0段多条	－	
〃	6	〃	覆土2・3	I 5	〃	ＬＲ圧痕	－	－	繊維微量
〃	7	〃	覆土１	I 5	〃	ＬＲ圧痕、刺突	ＬＲ	－	〃
〃	8	〃	覆土5	I 2	〃	Ｌ・Ｒ圧痕	ＬＲ、結節回転文2段（横）	－	
〃	9	〃	覆土3	I 5	〃	ＬＲ圧痕	－	－	繊維少量
〃	10	〃	覆土3	I 3	〃	Ｌ圧痕、隆帯	ＬＲ	－	細砂粒含む
〃	11	〃	覆土4	I	〃	突起、Ｌ圧痕？	ＬＲ	－	繊維微量
〃	12	〃	pit-1	I 4	〃	Ｌ・Ｒ圧痕	－	－	
〃	13	〃	覆土2	I 14	〃	隆帯（Ｒ圧痕）	－	－	
〃	14	〃	覆土4	I	〃	－	－	ＬＲ	
〃	15	〃	覆土4	I 7	〃	突起、隆帯、ＬＲ圧痕	－	－	
〃	16	〃	覆土3	I	〃	－	－	Ｌ・Ｒ単軸絡条体第1Ａ類	繊維微量
〃	17	〃	覆土4	I	〃	－	－	結節回転文2段（縦）、ＬＲ結束第1種	繊維多量
〃	18	〃	覆土4	I	〃	－	－	多軸絡条体	
〃	19	〃	覆土1	II 2	〃	－	沈線（渦巻文）	－	
〃	20	〃	覆土4	I	〃	隆帯、ＲＬ、沈線	－	－	
14	1	3・4土	覆土1	I 7	〃	ＲＬ圧痕、隆帯、刺突	ＬＲ・ＲＬ結束第2種	ＬＲ・ＲＬ結束第2種	
〃	2	3土	床直	I	〃	－	－	縄文？	器面脆い
〃	3	1土	覆土1	I	〃	－	－	結節回転文2段{縦、ＲＬ？	繊維微量
〃	4	〃	覆土2	I	〃	－	－	ＲＬ？	
〃	5	2土	覆土	II	〃	ＲＬ	－	－	
〃	6	〃	覆土4、床直	II	〃	ＬＲ	ＬＲ	－	
〃	7	〃	覆土4	II	〃	－	－	ＬＲ？	
〃	8	〃	覆土	II	〃	－	－	ＲＬ	
〃	9	〃	床直	II	〃	－	－	ＲＬ	
〃	10	〃	覆土	II 2	〃	－	平行沈線、曲沈線、ＬＲ	－	
〃	11	3土	覆土	II	〃	ＬＲ	ＬＲ	－	
〃	12	〃	覆土	II	〃	Ｌ圧痕、刺突（撚糸）	－	－	繊維少量
〃	13	〃	覆土	III 1	〃	Ｌ圧痕	Ｌ	－	
〃	14	〃	覆土	I	〃	－	－	ＲＬ	
〃	15	〃	覆土	I	〃	－	－	ＬＲ0段多条	
〃	16	〃	覆土	I	〃	－	－	ＬＲ	
〃	17	〃	覆土	I	〃	－	－	結節回転文2段（縦）、ＲＬ	繊維少量
15	18	4土	覆土3	I 9	〃	Ｒ・ＬＲ圧痕	ＬＲ・ＲＬ結束第1種	－	繊維微量
〃	19	〃	覆土1	I 2	〃	Ｌ・Ｒ圧痕	結束第2種・結節回転文1段（横）、ＬＲ	－	〃
〃	20	〃	覆土3	I 1	〃	Ｌ圧痕	ＬＲ	－	繊維少量
〃	21	〃	覆土1	I 1	〃	Ｌ圧痕、隆帯、刺突	－	－	〃
〃	22	〃	覆土1	I 5	〃	ＬＲ圧痕、隆帯	縄文？	－	
〃	23	〃	覆土	I 2	〃	Ｌ・Ｒ圧痕	ＬＲ0段多条	－	
〃	24	〃	覆土1	I 4	〃	Ｌ・Ｒ圧痕、刺突	－	－	繊維微量
〃	25	〃	覆土1	I 1	〃	Ｒ圧痕	結節回転文2段（横）、ＬＲ	－	
〃	26	〃	覆土2	I	〃	－	－	結節回転文2段（縦）、ＬＲ	繊維微量
〃	27	〃	覆土1	I	〃	－	－	結節回転文2段（縦）、ＬＲ	繊維少量
〃	28	〃	覆土3	I	〃	－	－	ＬＲ、結節回転文1段（横）、ＲＬ	
〃	29	〃	覆土3	I	〃	－	－	ＲＬ	
〃	30	〃	覆土3	I	〃	－	－	Ｌ単軸絡条体第1類	繊維少量
〃	31	〃	覆土1	I	〃	－	－	Ｌ・Ｒ単軸絡条体第1Ａ類	
〃	32	〃	覆土2	I	〃	隆帯、刺突	沈線（鋸歯状、重弧状）、刺突	－	
16	33	5土	覆土2	I 1	〃	Ｌ・Ｒ圧痕	Ｌ圧痕、ＬＲ縄文	－	
〃	34	〃	覆土3	I 2	〃	Ｌ・Ｒ圧痕	結節回転文2段（横・縦）、ＬＲ	結節回転文2段（縦）、ＬＲ	
17	35	〃	覆土2	I 8	〃	突起、ＬＲ・ＲＬ圧痕、隆帯、刺突	結節回転文2段（横）、ＬＲ・ＲＬ結束第1種	ＬＲ・ＲＬ結束第1種	
〃	36	〃	覆土2	I	〃	－	－	ＬＲ	
〃	37	〃	覆土3	I	〃	－	－	結節回転文1段（横）、ＬＲ	

土器観察表　(2)

図版	番号	出土地点・遺構	層　　位	分類	器種	外　面　特　徴			
						口　縁　部	胴　部　上　半	胴　部　下　半	
17	38	5土	覆土3	Ⅰ	深鉢	―	―	ＬＲ・ＲＬ結束第1種	
〃	39	〃	覆土3	Ⅰ	〃	―	―	ＬＲ・ＲＬ結束第2種	
〃	40	〃	覆土3	Ⅰ	〃	―	―	ＬＲ・ＲＬ結束第1種	
〃	41	〃	覆土3	Ⅰ	〃	隆帯（剥離）	R圧痕（鋸歯状）、ＬＲ・ＲＬ結束第1種	―	
〃	42	〃	覆土2	Ⅰ	〃	―	―	Ｌ単軸絡条体第1類	繊維少量
〃	43	〃	覆土1	Ⅰ	〃	―	―	Ｌ単軸絡条体第1類	
18	44	〃	覆土3	Ⅰ2	〃	突起、Ｌ・R圧痕、刺突	結節回転文2段（横）、ＬＲ・ＲＬ結束第1種	ＬＲ・ＲＬ結束第1種、多軸絡条体	
〃	45	〃	覆土3	Ⅰ2	〃	Ｌ・R圧痕	結節回転文2段（横）、ＬＲ	―	
〃	46	〃	覆土1	Ⅰ5	〃	ＬR圧痕	―	―	
〃	47	〃	覆土4	Ⅰ5	〃	ＬR圧痕、刺突（ＬR）	―	―	
〃	48	〃	覆土2	Ⅰ9	〃	ＬＲ・R圧痕	―	―	
〃	49	〃	覆土4	Ⅰ1	〃	R圧痕、隆帯	縄文？	―	補修孔
〃	50	〃	覆土3	Ⅰ6	〃	ＬＲ・ＲＬ圧痕、隆帯	ＬＲ	―	
〃	51	〃	覆土3	Ⅰ10	〃	Ｌ・R圧痕、刺突、絡条体圧痕	―	―	
19	52	19土	床直	Ⅱ1	〃	―	―	結節回転文2段（縦）、ＬＲ	
〃	53	〃	覆土2	Ⅱ1	鉢	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
〃	54	〃	覆土2	Ⅱ1	〃	ナデ	ナデ	―	
〃	55	20土	床直	Ⅲ	深鉢	ＬＲ	ＬＲ	ＬＲ	焼成時に歪み
〃	56	6土	覆土1	Ⅰ2	〃	Ｌ・R圧痕、隆帯、刺突	結節回転文4段（横）、ＬＲ結束第2種	ＬＲ結束第2種	
〃	57	〃	覆土1	Ⅰ4	〃	刺突、Ｌ・R圧痕	結節回転文（横）	―	
〃	58	〃	覆土1	Ⅰ1	〃	Ｌ圧痕、刺突（撚糸）	―	―	
〃	59	〃	覆土1	Ⅰ	〃	隆帯（刺突）	ＲＬ0段多条	―	
〃	60	7土	覆土1	Ⅰ	〃	―	―	ＲＬ	
〃	61	8土	覆土	Ⅰ1	〃	突起、Ｌ圧痕、刺突（撚糸）	―	―	
〃	62	〃	覆土	Ⅰ	〃	―	―	ＲＬ	
〃	63	〃	覆土	Ⅰ	〃	―	―	Ｌ	
〃	64	〃	覆土	Ⅰ	〃	―	―	縄文？	
〃	65	13土	覆土	Ⅰ	〃	―	―	ＲＬ	
〃	66	〃	覆土	Ⅰ	〃	―	―	Ｌ	
〃	67	14土	覆土	Ⅱ	〃	ＲＬ	ＲＬ	―	
20	68	〃	覆土5	Ⅱ1	〃	―	Ｌ圧痕、ＬＲ	―	
〃	69	〃	覆土5	Ⅰ	〃	―	―	ＬＲ	
〃	70	〃	覆土5	Ⅰ	〃	―	―	ＬＲ	
〃	71	〃	覆土5	Ⅰ	〃	―	R単軸絡条体第1類	―	
〃	72	〃	覆土5	Ⅰ	〃	―	―	ＲＬ	
〃	73	15土	覆土	Ⅱ	〃	R圧痕	―	―	
〃	74	〃	覆土	Ⅱ	〃	ミガキ、隆帯	―	―	
〃	75	〃	覆土	Ⅱ	〃	―	―	ＲＬ	
〃	76	〃	覆土	Ⅱ	〃	―	―	ＲＬ	繊維少量
〃	77	16土	覆土1	Ⅱ1	〃	ＬＲ0段多条	ＬＲ0段多条	―	
〃	78	〃	覆土1	Ⅱ	〃	Ｌ圧痕、ＬＲ	―	―	101番と同じ
〃	79	〃	覆土1	Ⅱ1	〃	ＬＲ	―	―	
〃	80	〃	覆土1	Ⅱ	〃	―	―	ＬＲ	
〃	81	〃	覆土1	Ⅱ	〃	―	Ｌ圧痕、ＬＲ	―	98番と同じ
〃	82	〃	覆土1	Ⅱ	〃	―	―	ＬＲ	
〃	83	〃	覆土1	Ⅱ	〃	―	―	ＬＲ	
〃	84	17土	覆土3	Ⅱ1	〃	―	ＬＲ	―	
〃	85	〃	覆土3	Ⅱ1	〃	―	―	ＲＬ	底面簾状圧痕
〃	86	18土	覆土1	Ⅰ	〃	―	―	ＲＬ	
〃	87	〃	覆土1	Ⅰ	〃	―	―	ＬＲ	
21	88	19土	覆土2	Ⅱ1	〃	ＲＬ圧痕	ＲＬ	―	
〃	89	〃	覆土2	Ⅰ5	〃	ＬR圧痕、刺突	―	―	110番と同じ
〃	90	〃	覆土2	Ⅰ	〃	―	ＬR圧痕、刺突、多軸絡条体	―	109番と同じ
〃	91	〃	床直	Ⅱ	〃	―	沈線、ＬＲ	―	
〃	92	24土	覆土2	Ⅰ5	〃	刺突、結節回転文2段（横）、ＬR圧痕	結節回転文2段（横）	―	
〃	93	〃	床直	Ⅰ12	〃	結節回転文2段（横）	刺突、ＬＲ？	―	繊維微量
〃	94	〃	覆土1	Ⅰ	〃	―	―	ＲＬ	

土器観察表　(3)

図版	番号	出土地点・遺構	層　　位	分類	器種	外　面　特　徴			
						口　縁　部	胴　部　上　半	胴　部　下　半	
21	95	24土	覆土1	Ⅱ	深鉢	－	－	L	
〃	96	〃	覆土1	Ⅱ	〃	－	－	L	
〃	97	〃	覆土1	Ⅱ	〃	－	－	RL	
〃	98	〃	床直	Ⅱ	〃	－	－	LR	
〃	99	〃	床直	Ⅱ	〃	－	－	LR	
〃	100	〃	覆土1	Ⅱ	〃	－	－	無	
25	1	B－27	Ⅳ	Ⅰ3	〃	L圧痕	LR・RL結束第1種	－	繊維少量
〃	2	〃	Ⅳ	Ⅰ4	〃	突起、隆帯、刺突、L・R圧痕	LR	－	
26	3	A－24	Ⅰ	Ⅱ1	〃	L圧痕、L	L	L	
〃	4	B－27	Ⅳ	Ⅰ	〃	－	－	RL	
〃	5	C－20	Ⅳ	Ⅰ	〃	－	－	LR	
〃	6	B－29	Ⅰ	Ⅰ1	〃	L圧痕、隆帯、刺突	－	－	
〃	7	A－29	Ⅳ	Ⅰ1	〃	L圧痕、隆帯、刺突	－	－	繊維微量
〃	8	B－29	Ⅳ	Ⅰ2	〃	L・R圧痕	LR	－	
〃	9	〃	Ⅰ	Ⅰ2	〃	L・R圧痕	LR	－	
〃	10	B－30	Ⅰ	Ⅰ2	〃	L・R圧痕	LR	－	繊維微量
〃	11	F－21	Ⅳ	Ⅰ2	〃	L・R圧痕	－	－	
〃	12	F－26	Ⅳ	Ⅰ2	〃	L・R圧痕	結節回転文2段以上（横）	－	
〃	13	B－28	Ⅰ	Ⅰ4	〃	L・R圧痕、隆帯	－	－	
〃	14	D－22	風倒木痕	Ⅰ2	〃	L・R圧痕、刺突	－	－	
27	15	E－25	Ⅰ	Ⅰ4	〃	L・R圧痕、刺突	－	－	
〃	16	B－22	Ⅳ	Ⅰ2	〃	L・R圧痕	L・R単軸絡条体第1A類	－	橋状突起貼付痕
〃	17	D－26	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR圧痕	LR	－	
〃	18	A－29	Ⅳ	Ⅰ5	〃	RL圧痕、刺突	結節回転文？	－	
〃	19	D－20	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR圧痕	LR	－	
〃	20	D－21	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR圧痕	L・R単軸絡条体第1A類	－	
〃	21	B－21	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR圧痕	LR	－	
〃	22	A－29	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR・RL圧痕	結節回転文2段（横）、RL	－	
〃	23	E－20	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR圧痕	多軸絡条体	－	
〃	24	A－29	Ⅳ	Ⅰ5	〃	LR圧痕、隆帯、刺突	結節回転文2段（横）、LR	－	
〃	25	〃	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR圧痕、刺突	結節回転文2段（横）	－	
〃	26	B－26	Ⅰ	Ⅰ5	〃	RL圧痕、刺突	－	－	
〃	27	E－25	Ⅰ	Ⅰ5	〃	突起、LR圧痕、隆帯	－	－	
〃	28	B－21	Ⅰ	Ⅰ5	〃	突起、LR圧痕、隆帯	－	－	
〃	29	B－30	Ⅰ	Ⅰ5	〃	LR・RL圧痕、隆帯、刺突	－	－	
〃	30	A－29	Ⅳ	Ⅰ5	〃	LR圧痕、刺突	結節回転文2段（横）、LR	－	
28	31	D－21	Ⅰ	Ⅰ5	〃	突起、RL圧痕	結節回転文2段（横）、RL	－	
〃	32	B－30	Ⅰ	Ⅰ7	〃	RL圧痕、刺突（縄）	－	－	
〃	33	B－29	Ⅳ	Ⅰ7	〃	LR圧痕	－	－	
〃	34	E－25	Ⅰ	Ⅰ7	〃	RL圧痕、隆帯、刺突	LR・RL結束第2種	－	
〃	35	B－30	Ⅰ	Ⅰ7	〃	LR圧痕、刺突（縄）、隆帯	－	－	
〃	36	C－22	Ⅳ	Ⅰ7	〃	突起、RL圧痕、隆帯、刺突	－	－	
〃	37	B－30	Ⅰ	Ⅰ7	〃	突起、RL圧痕、隆帯、刺突	RL圧痕、LR・RL結束第1種	－	
〃	38	B－29	Ⅳ	Ⅰ7	〃	突起、RL圧痕、隆帯、刺突	L・R単軸絡条体第1A類	－	
〃	39	E－20	Ⅰ	Ⅰ7	〃	突起、RL圧痕、隆帯	－	－	
〃	40	D－23	Ⅰ	Ⅰ7	〃	突起、LR圧痕、隆帯	－	－	
〃	41	B－22	Ⅳ	Ⅰ7	〃	突起、RL圧痕、隆帯、刺突	LR	－	
〃	42	D－21	Ⅰ	Ⅰ7	〃	突起、LR圧痕、隆帯	－	－	
〃	43	A－29	Ⅳ	Ⅰ7	〃	突起、LR圧痕、隆帯、刺突	－	－	
〃	44	C－20	Ⅰ	Ⅰ7	〃	突起、RL圧痕、隆帯、刺突	－	－	
〃	45	B－29	Ⅰ	Ⅰ7	〃	突起、LR圧痕、隆帯	－	－	
〃	46	E－25	Ⅰ	Ⅰ8	〃	突起、LR・RL圧痕、隆帯、刺突	結節回転文？	－	
〃	47	B－29	Ⅳ	Ⅰ10	〃	L・R圧痕、絡条体圧痕、刺突	Lを鋸歯状圧痕、LR	－	
〃	48	B－21	Ⅰ	Ⅰ11	〃	絡条体圧痕、LR圧痕、刺突	－	－	繊維微量
〃	49	C－20	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	沈線（平行、重弧状）	－	繊維少量
〃	50	B－22	Ⅳ	Ⅰ	〃	－	沈線（平行、渦巻または楕円、三角形）	－	49・51と同じ
〃	51	E－22	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	沈線（平行、重弧状）	－	49・50と同じ

土器観察表　(4)

図版	番号	出土地点・遺構	層　位	分類	器種	外面特徴			
						口縁部	胴部上半	胴部下半	
29	52	D－20	Ⅰ	Ⅰ	深鉢	－	－	L・R単軸絡条体第1A類、結節回転文（縦）	
〃	53	B－29	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	L・R単軸絡条体第1A類、結節回転文（縦）	
〃	54	〃	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	L・R単軸絡条体第1A類	
〃	55	A－23	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	L・R単軸絡条体第1A類	繊維少量
〃	56	B－30	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	L・R単軸絡条体第1A類	
〃	57	D－21	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	L・R単軸絡条体第1A類	繊維微量
〃	58	D－22	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	R圧痕、刺突	LR	〃
〃	59	A－27	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	RL	
〃	60	E－26	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	LR・RL結束第1種	
〃	61	F－26	Ⅳ	Ⅰ	〃	－	－	LR・RL結束第1種	
〃	62	D－22	風倒木痕	Ⅰ	〃	－	－	LR・RL結束第1種	
〃	63	D－21	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	刺突、結節回転文2段（横）	LR・RL結束第1種	
〃	64	B－28	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	L・R圧痕、結節回転文3段（横・縦）	LR	
〃	65	E－26	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	LR・RL結束第2種	
〃	66	E－25	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	LR・RL結束第2種	
〃	67	〃	Ⅰ	Ⅰ5	〃	RL圧痕	LR・RL結節第2種	－	
〃	68	D－26	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	LR・RL結束第2種	
〃	69	E－20	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	結節回転文2段（横・縦）、LR	
〃	70	B－29	Ⅳ	Ⅰ	〃	－	－	結節回転文2段（縦）、LR	
〃	71	B－21	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	RL圧痕（極めて細い）	
〃	72	D－28	Ⅰ	Ⅰ	〃	－	－	多軸絡条体	
30	73	D－25・26	Ⅰ	Ⅲ	壺	ナデ	ナデ	ナデ	
〃	74	A－29	風倒木痕	不明	鉢	ナデ	ナデ	ナデ	
〃	75	B－21	Ⅰ	不明	鉢	－	－	ナデ	
〃	76	B－21	Ⅰ	Ⅱ1	深鉢	L圧痕	－	－	
〃	77	B－20	Ⅰ	Ⅱ1	深鉢	波状口縁、渦巻文（隆帯）	－	－	
〃	78	D－21	Ⅰ	Ⅱ1	深鉢	波状口縁、刺突、ボタン状貼付	－	－	
〃	79	B－21	Ⅰ	Ⅱ1	深鉢	－	隆帯、ボタン状貼付	LR	炭化物付着
〃	80	C－20	Ⅰ	Ⅱ1	深鉢	－	隆帯、ボタン状貼付	－	補修孔
〃	81	B－22	Ⅳ	Ⅱ1	深鉢	－	隆帯	－	
〃	82	B－22	Ⅳ	Ⅱ1	深鉢	－	隆帯	－	
〃	83	B－30	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	－	渦巻文、R	－	
〃	84	表採		Ⅱ2	深鉢	－	－	斜行・平行沈線、RL	
〃	85	B－30	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	平行・斜行沈線、R	－	－	
〃	86	表採		Ⅱ2	深鉢	－	蛇行沈線、RL	－	
〃	87	B－21	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	－	－	斜行・平行沈線、L	
〃	88	E－22	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	－	－	渦巻文？、R	
〃	89	E－22	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	－	平行沈線、渦巻文？、R	－	
〃	90	D－21	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	－	渦巻文、R	－	
〃	91	E－22	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	－	平行沈線	－	
〃	92	B－21	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	平行沈線、三角形区画文、渦巻文	－	－	
〃	93	B－21	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	波状口縁（二又）、三角形区画文		－	
〃	94	B－21	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	三角形区画文、渦巻文	－	－	
〃	95	B－21	Ⅰ	Ⅱ2	深鉢	平行沈線、三角形区画文	－	－	
〃	96	B－21	Ⅰ	Ⅱ3	深鉢	平行沈線	－	－	
〃	97	B－20	Ⅰ	Ⅱ3	深鉢	－	平行・弧状沈線	－	
〃	98	D－21	Ⅰ	Ⅱ3	深鉢	－	－	弧状・平行沈線	
〃	99	B－21	Ⅰ	Ⅱ3	深鉢	－	－	長楕円沈線	
〃	100	B－30	Ⅰ	Ⅲ	壺	R	－	－	
〃	101	C－20	Ⅰ	Ⅲ	鉢	－	平行沈線、渦巻文？、LR	－	
〃	102	D－21	Ⅰ	Ⅲ	鉢	－	平行沈線、LR	－	
〃	103	E－22	Ⅰ	不明	鉢？	－	－	底面（内面）中央突出	

土器観察表　(5)

図版	番号	出土地点・遺構	層位	種類	器種	外面特徴			内面特徴	底部	
						口縁部	胴部上半	胴部下半			
34	1	2Hｂ	床直	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	剥落	
〃	2	2Hｂ	床直	〃	甕	ヘラナデ（横）	ヘラケズリ（縦）	ヘラケズリ（縦）	ヘラナデ（横）	－	
〃	3	2Hａｂ	カマドA	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラケズリ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	4	2Hｂ	床直	〃	〃	－	－	ヘラナデ（縦）	ヘラナデ	－	
〃	5	2Hｂ	床直	〃	坏	ロクロナデ	－	－	ロクロナデ	－	
〃	6	2Hｂ	覆土1	〃	〃	ロクロナデ	－	－	ロクロナデ	－	
〃	7	2Hａｂ	カマドB	〃	甕	ヘラナデ（横）	ヘラナデ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	8	2Hｂ	床直	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラナデ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	9	2Hｂ	覆土1	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラナデ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	10	2Hｂ	床直	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラケズリ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	11	2Hｂ	覆土1	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラナデ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	12	2Hｂ	覆土1	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラケズリ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	13	2Hｂ	覆土1	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラナデ（横）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	14	2Hｂ	床直	〃	〃	ヘラナデ（横）	ヘラケズリ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	15	2Hｂ	床直	〃	〃	－	－	ヘラケズリ（縦）	ヘラナデ（横）	砂底	
36	1	A－25	Ⅰ	〃	坏	－	－	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切	
〃	2	B－6・7	Ⅱ	〃	甕	ヘラナデ（横）	ヘラナデ（縦）	－	ヘラナデ（横）	－	
〃	3	A－25	Ⅰ	〃	〃	－	－	ヘラケズリ（縦）	ヘラナデ（横）	－	
〃	4	B－6・7	Ⅱ	〃	不明	－	－	－	－	砂底	
〃	5	E－20	Ⅰ	須恵器	甕	－	タタキ目	－	ヘラナデ	－	

石器観察表

図版	番号	出土地点・遺構	層位	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
7	1	1H	覆土3	石鏃	51	20	7	5.6	珪質頁岩	
7	2	〃	床直	敲磨器類	103	84.5	43.5	390	石英安山岩	
7	3	〃	床面	石皿	100.2	86.8	20	200	大理石	
7	4	〃	pit1	敲磨器類	91	63.5	54	424	安山岩	
7	5	〃	pit1	〃	60	29	27	52.1	石英安山岩	
7	6	〃	pit5	〃	59.2	69.2	30	180	凝灰岩	
7	7	〃	pit1	〃	118	74	43	434	石英安山岩	
7	1	5土	覆土3	石鏃	27.2	19.6	5.8	3	珪質頁岩	基部欠損
22	2	19土	覆土2	〃	18.8	11.8	3.8	0.8	玉髄	基部欠損
22	3	5土	覆土3	不定形石器	68.5	38	9	15.1	珪質頁岩	
22	4	〃	覆土3	〃	66.8	20	10.5	8.3	珪質頁岩	
22	5	24土	覆土1	〃	64.5	34	13	20.7	珪質頁岩	
22	6	7土	覆土4	石箆	90	43	18.5	62.6	珪質頁岩	
23	7	8土	覆土1	敲磨器類	83	189	48.5	1050	安山岩	
23	8	5土	覆土3	〃	75.5	61.4	40	182	閃緑岩	
23	9	〃	覆土3	〃	63	67.1	25	116	石英安山岩	

図版	番号	出土地点・遺構	層位	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	石質	備考
23	10	14土	覆土5	石棒	210	74	59	1544	石英安山岩	
24	11	24土	覆土1	敲磨器類	252.5	119	76	2218	石英安山岩	
24	12	4土	覆土3	〃	99	49	34	246	石英安山岩	
24	13	17土	覆土	石皿				496	安山岩	
31	1	B－20	Ⅰ	不定形石器	67	57	15.5	53.3	珪質頁岩	
31	2	C－20	Ⅰ	石鏃	38.2	20.4	8.5	5.4	珪質頁岩	基部に有機物付着
31	3	B－27	Ⅳ	不定形石器	33.5	40	8	9.5	珪質頁岩	
31	4	B－20	Ⅲ	石皿	180	137	50	1494	安山岩	
31	5	B－21	Ⅰ	敲磨器類	143	68	61	820	石英安山岩	
32	6	B－27	Ⅳ	磨製石斧	108.5	27	17.5	83.6	輝緑凝灰岩	基部欠損
32	7	D－21	Ⅰ	敲磨器類	77	80	37	(286)	安山岩	
32	8	E－22	Ⅰ	〃	135	47.4	54	388	石英安山岩	
32	9	E－26	Ⅰ	砥石	120	93	33	234	凝灰岩	
32	10	B－20	Ⅰ	敲磨器類	78.5	45.2	39.5	204	安山岩	
32	11	A・B－20	Ⅰ	〃	78.5	86	32	228	安山岩	

土製品観察表

図版	番号	出土地点・遺構	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴	備考
24	14	4土	焼成粘土塊	35.0	32.0	19.0	136.1	粗砂粒～細礫多量	
24	15	4土	〃	31.0	19.5	13.0	71.1	〃	
35	左下	2溝	土製玉類	24.5	25.0	12.5	8.6	孔幅4～5mm	

写　真　図　版

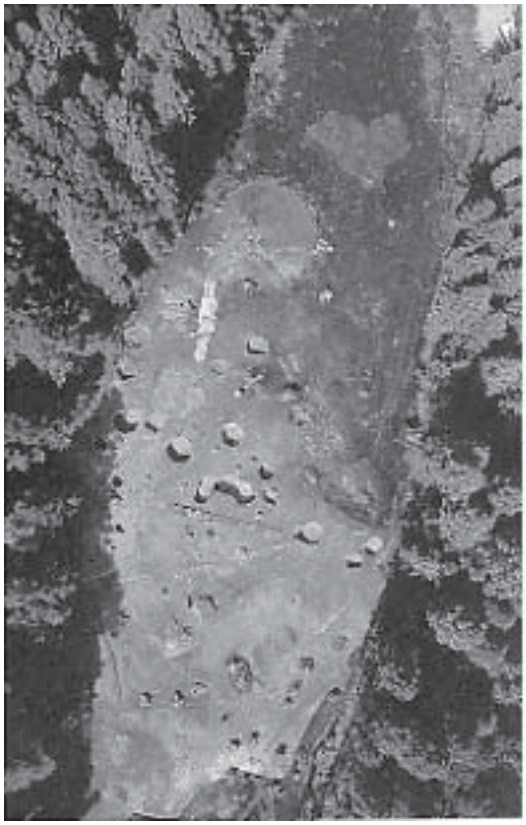
調査区遠景（N→）

調査区近景（N→）

メインセクション（H－11～12 ライン）

作業風景（N→）

調査区全景

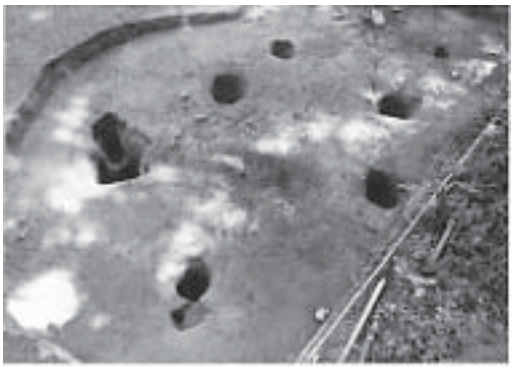


遺構配置

写真１　調査状況・セクションほか

第１号竪穴式住居跡　東西セクション（S→）

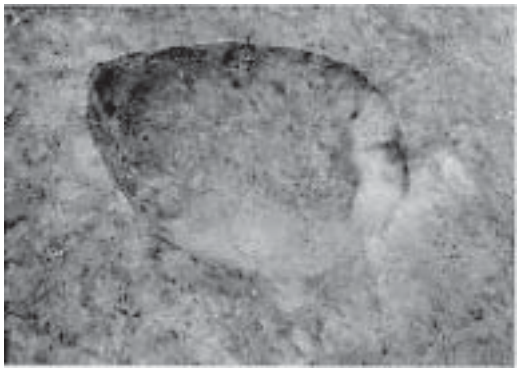
第１号竪穴式住居跡　南北セクション（E→）



第１号竪穴式住居跡　完掘

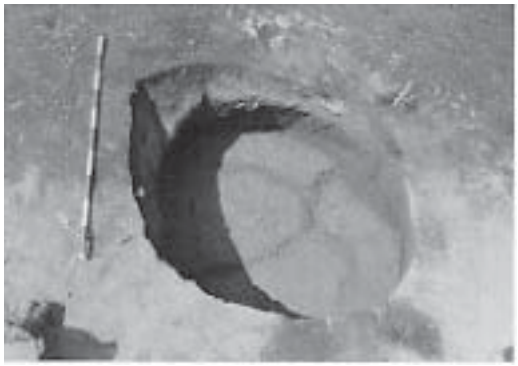
第１号竪穴式住居跡　遺物出土状況（床面）

第１号土坑　セクション



第１号土坑　完掘状況

第２号土坑　セクション



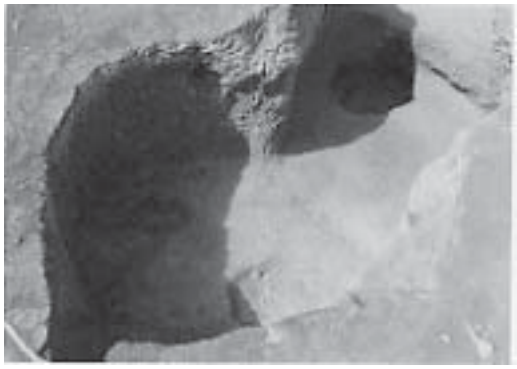
第２号土坑　完掘状況

写真２　縄文時代の竪穴式住居跡・土坑

第３号土坑　セクション

第３号土坑　完掘状況

第４号土坑　遺物出土状況

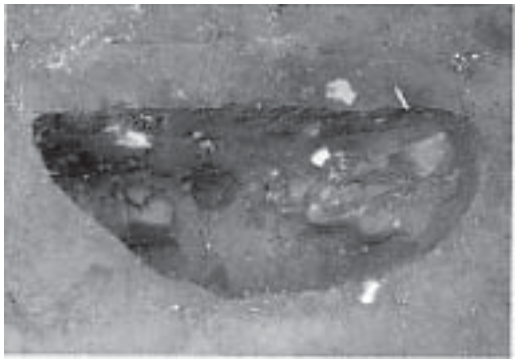


第３号土坑（左）・第４号土坑（右）　完掘状況

第４号土坑　下部の土坑完掘状況

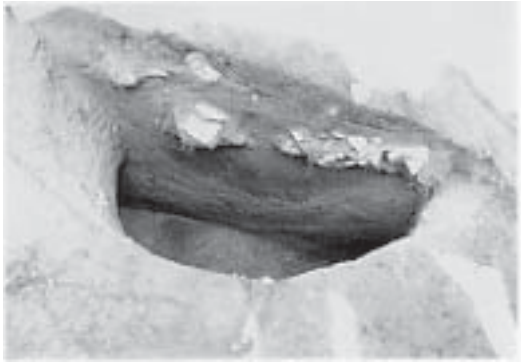
第４号土坑　上部と下部の土坑

第５号土坑　確認状況

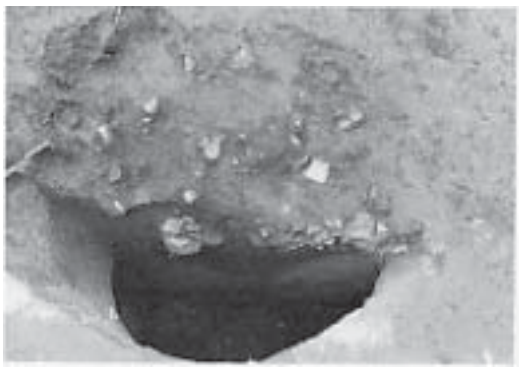


第５号土坑　遺物出土状況

写真３　縄文時代の土坑

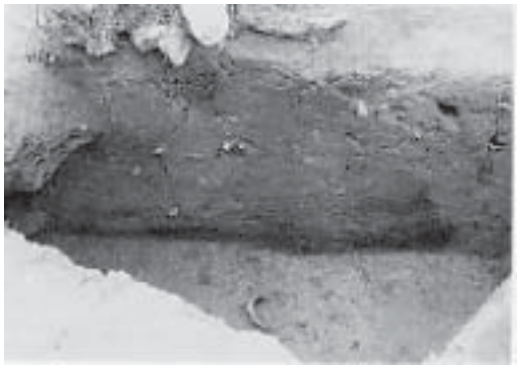


第５号土坑　セクション



第５号土坑　遺物出土状況

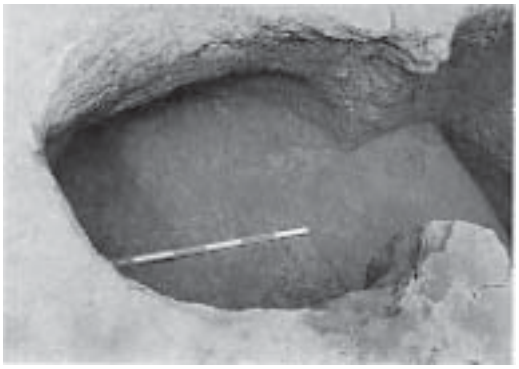
第５号土坑　完掘状況



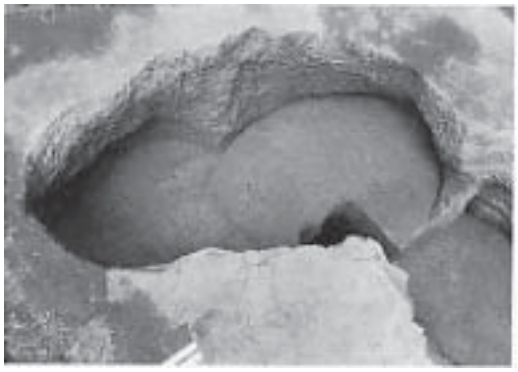
第６号土坑　セクション

第６号土坑　完掘状況

第７号土坑　セクション



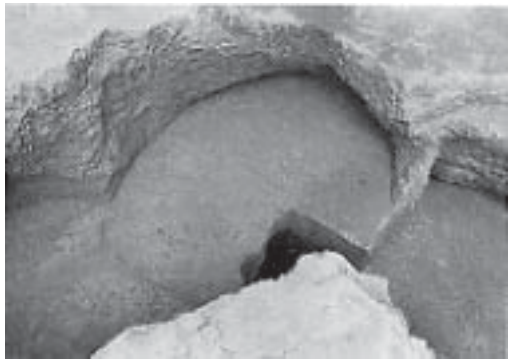
第７号土坑　完掘状況



第７号土坑（左）・第８号土坑（右）完掘状況

写真４　縄文時代の土坑

第 8 号土坑　セクション

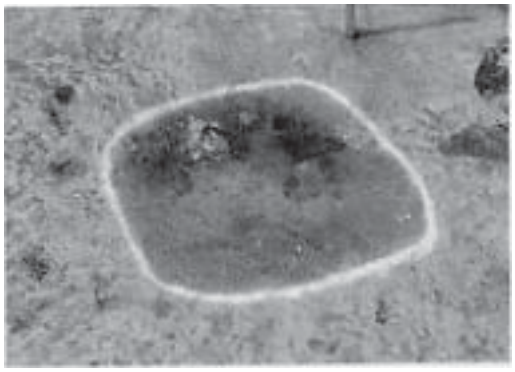


第 8 号土坑　完掘状況

第 10 号土坑　確認状況

第 10 号土坑　セクション

第 10 号土坑　完掘状況



第 12 号土坑　確認状況

第 12 号土坑　セクション

第 12 号土坑　完掘状況

写真 5　縄文時代の土坑

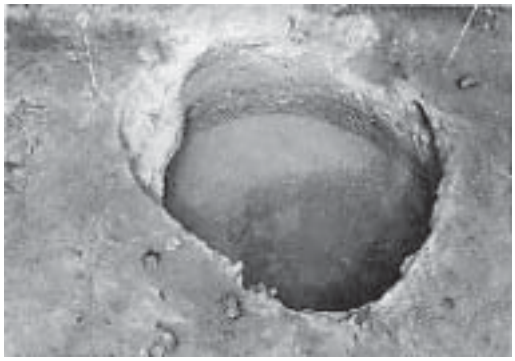
第 13 号土坑　セクション

第 13 号土坑　完掘状況

第 14 号土坑　セクション

第 14 号土坑　完掘状況

第 15 号土坑　セクション

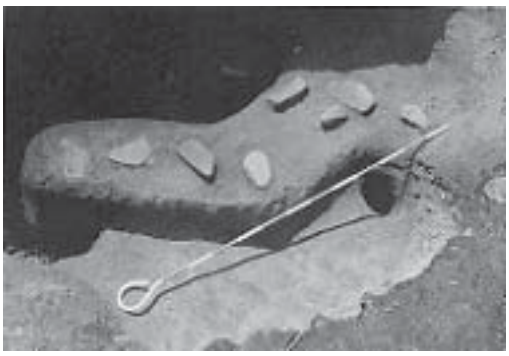


第 15 号土坑　完掘状況

第 16 号土坑　セクション

第 16 号土坑　完掘状況

写真 6　縄文時代の土坑



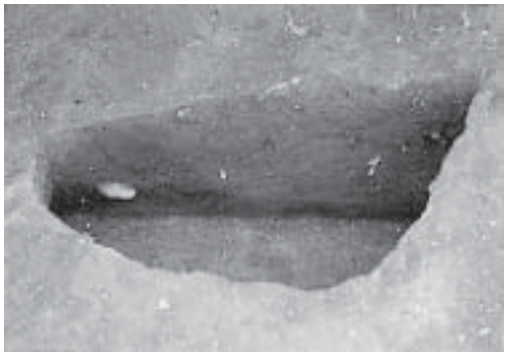
第 17 号土坑　礫出土状況

第 17 号土坑　セクション

第 17 号土坑　完掘状況

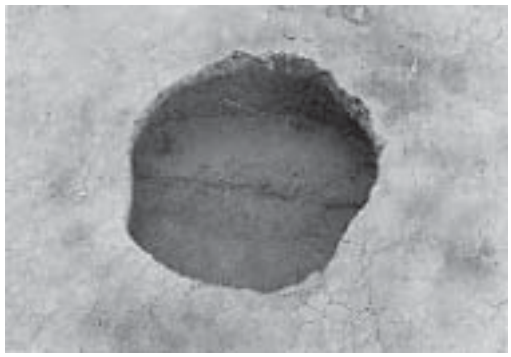
第 18 号土坑　セクション

第 18 号土坑　完掘状況



第 19 号土坑　セクション

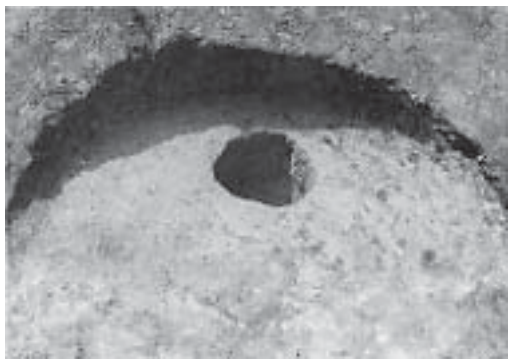
第 19 号土坑　遺物出土状況



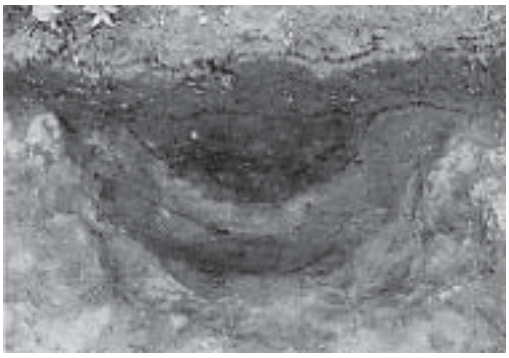
第 19 号土坑　完掘状況

写真 7　縄文時代の土坑

第 20 号土坑　遺物出土状況



第 20 号土坑　完掘状況



第 23 号土坑　セクション

第 24 号土坑　セクション

第 24 号土坑　セクション

第 2 号竪穴式住居跡　確認状況

第 2 号竪穴式住居跡　南北セクション（E →）

第 2 号竪穴式住居跡　遺物出土状況

写真 8　縄文時代の土坑・平安時代の竪穴式住居跡

第 2 号竪穴式住居跡 b カマド　セクション

第 2 号竪穴式住居跡 b カマド　完掘状況

第 2 号竪穴式住居跡 a カマド　セクション

第 2 号竪穴式住居跡　完掘状況

第 2 号溝状遺構　確認状況

第 1 号溝状遺構　確認状況

第 1 号（右）・第 2 号（左）溝状遺構　確認状況

遺構外　遺物出土状況

写真 9　平安時代の竪穴式住居跡・溝状遺構・縄文時代の遺物出土状況

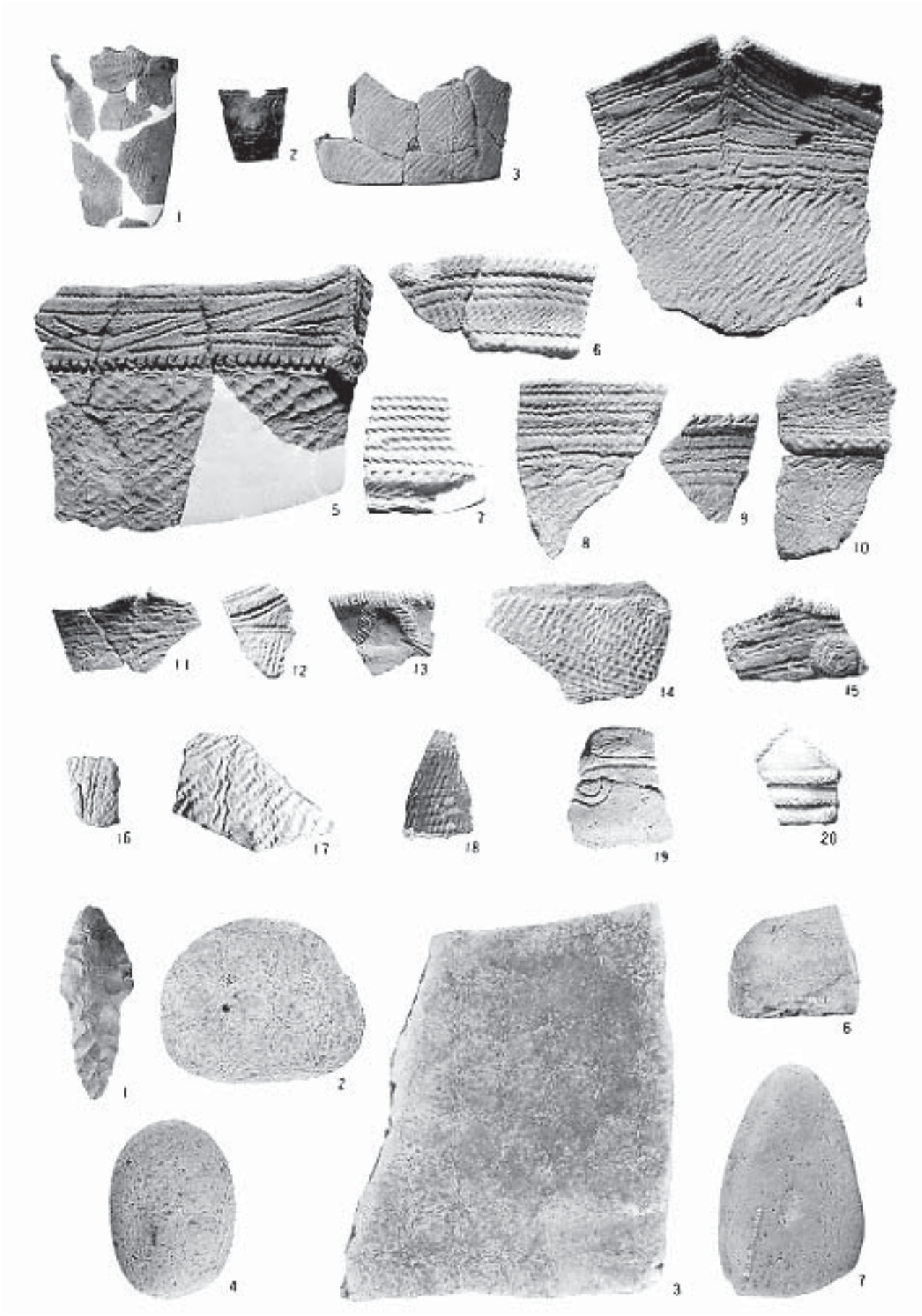


写真 10　第 1 号竪穴式住居跡出土遺物（土器・石器）

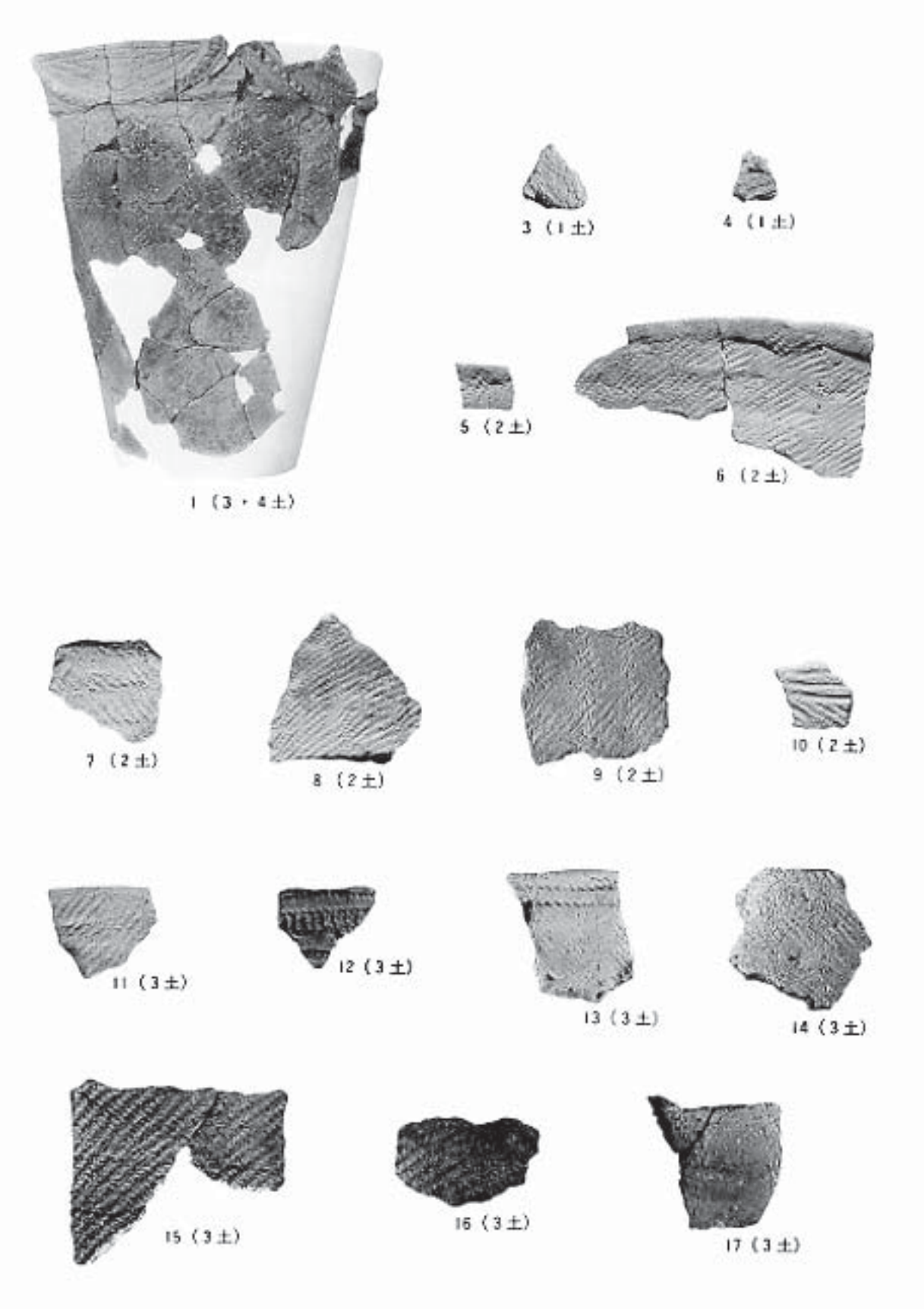


写真 11　土坑出土遺物（土器 1）

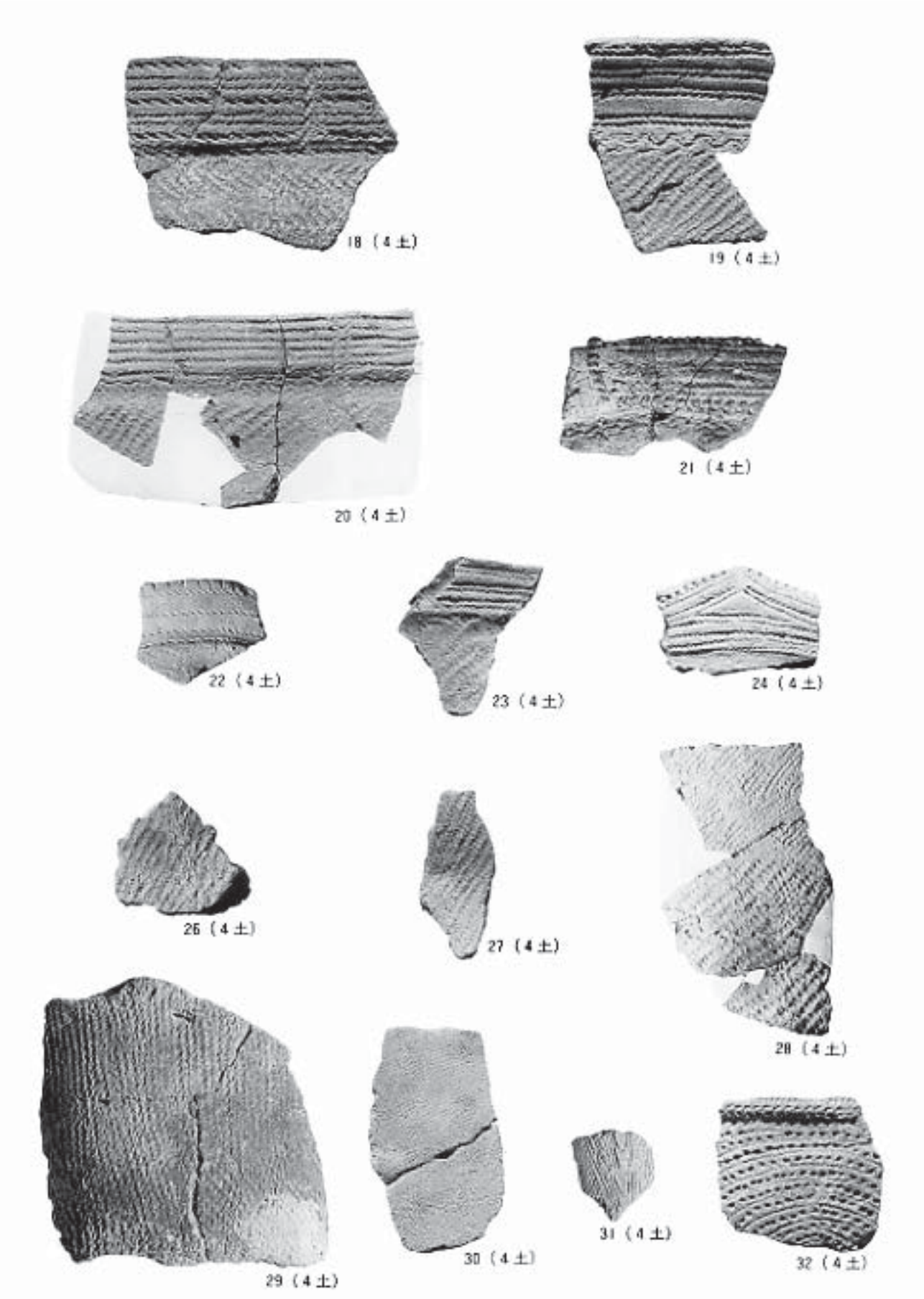


写真 12　土坑出土遺物（土器 2）

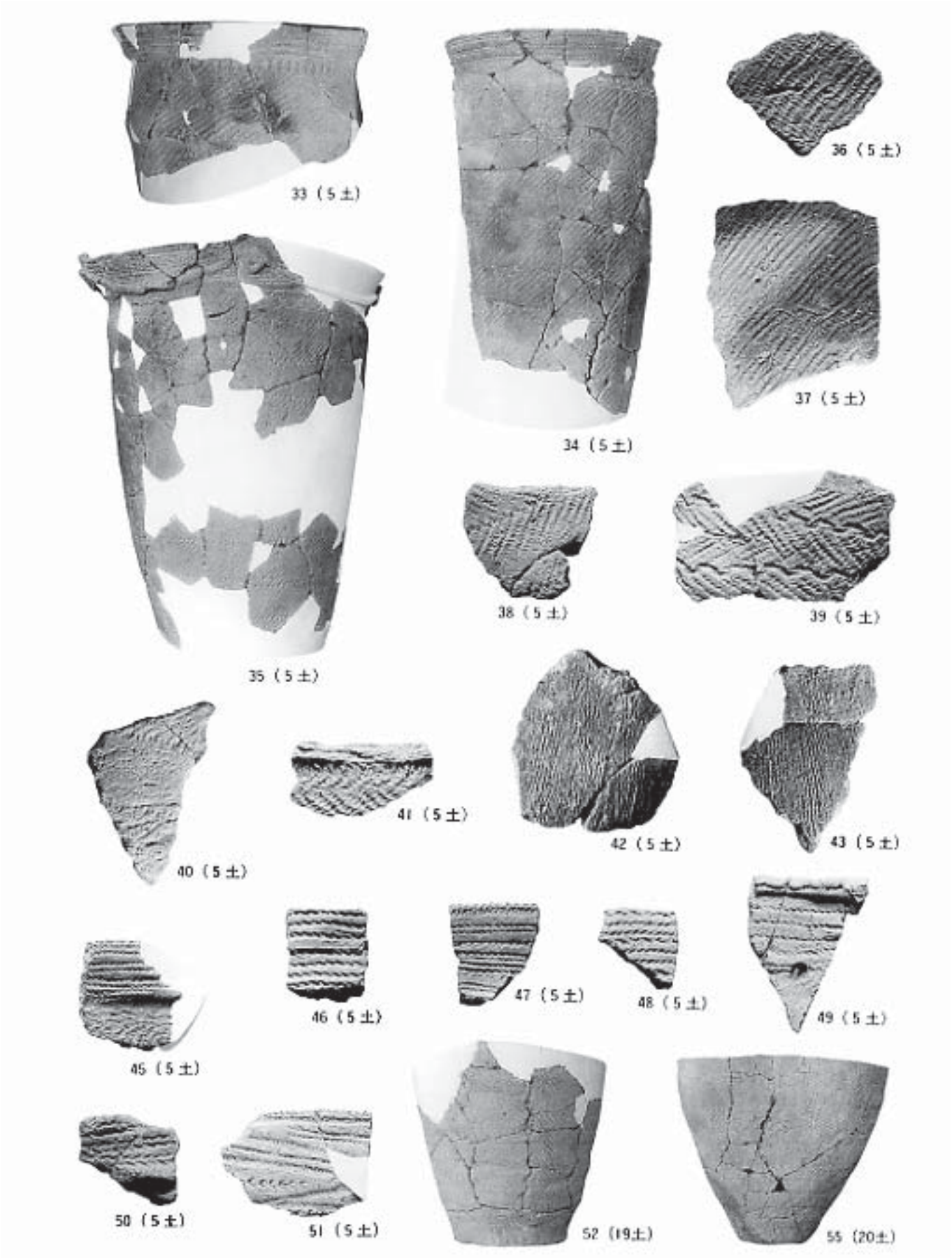


写真 13　土坑出土遺物（土器 3）

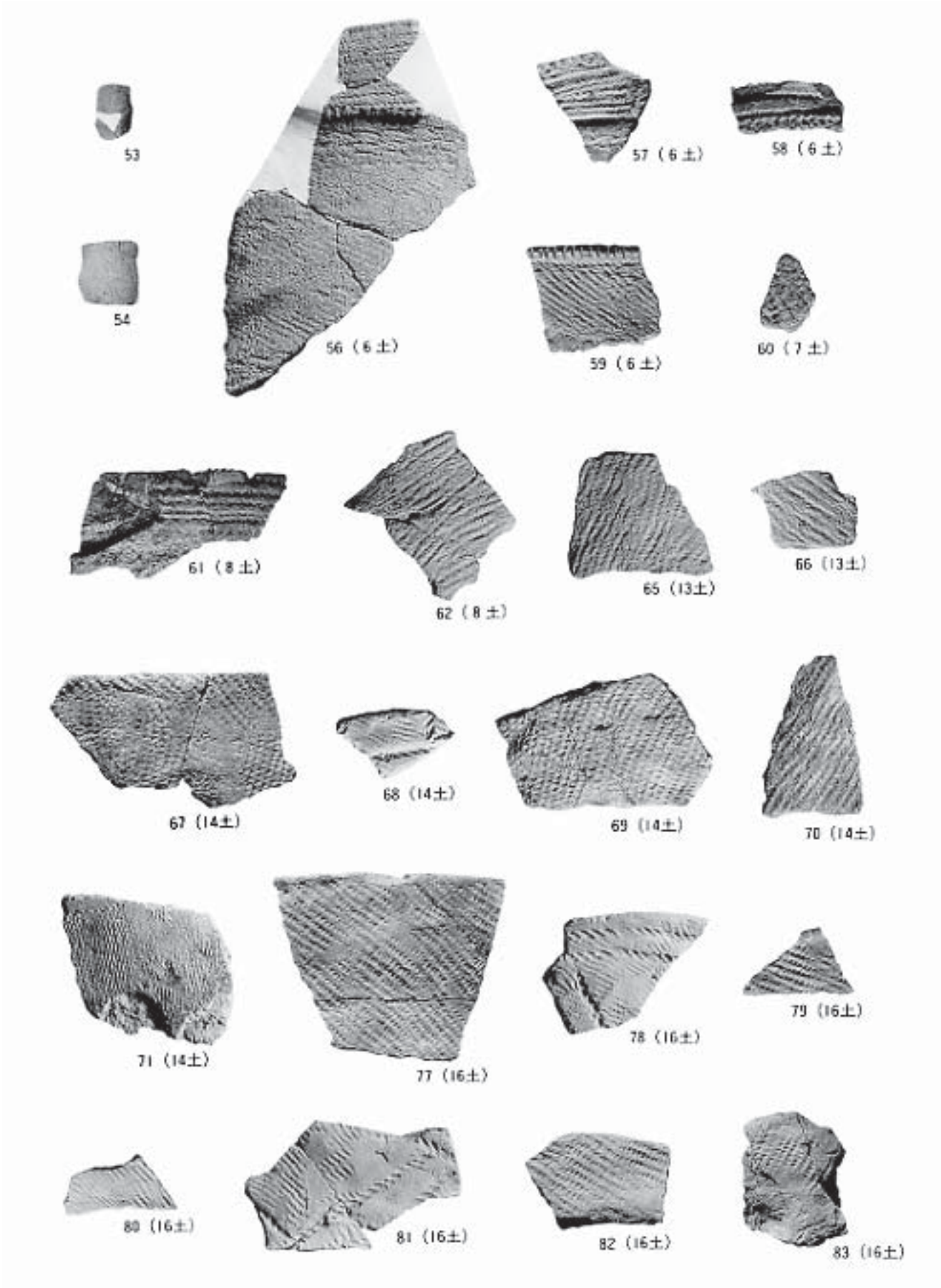


写真 14　土坑出土遺物（土器 4）

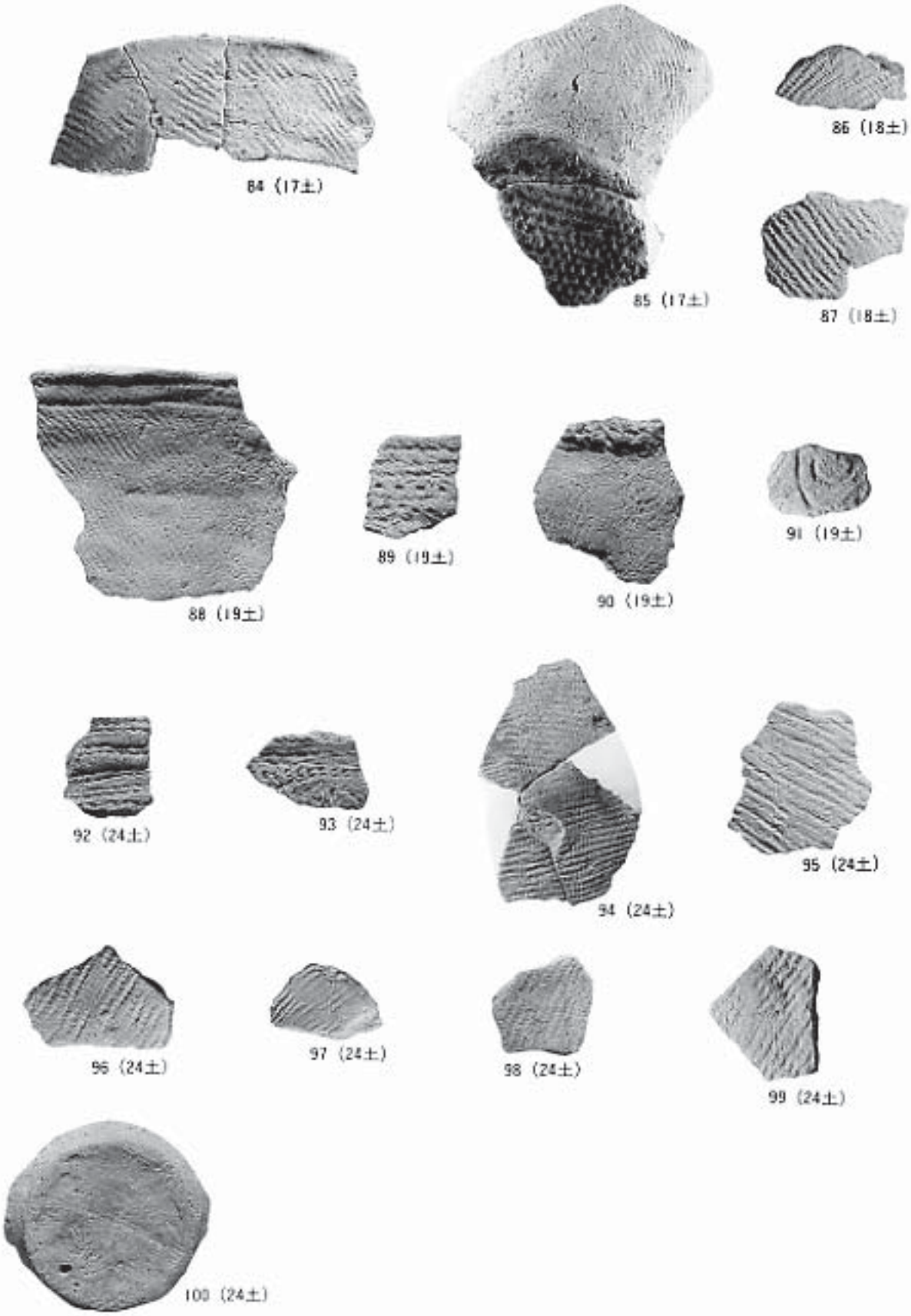


写真 15　土坑出土遺物（土器 5）

写真 16　土坑出土遺物（石器 1・土製品）

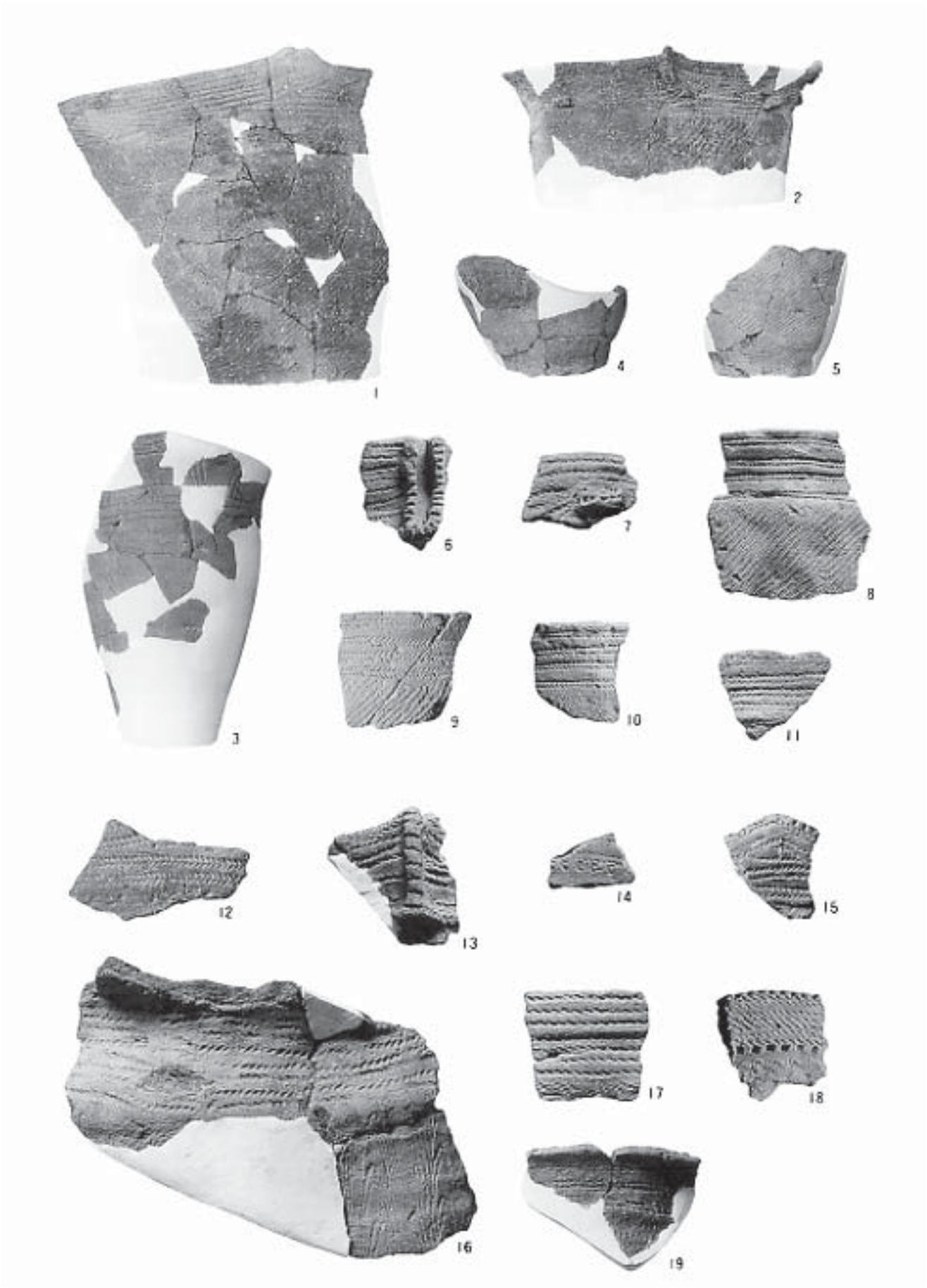


写真 17　遺構外出土遺物（土器 1）

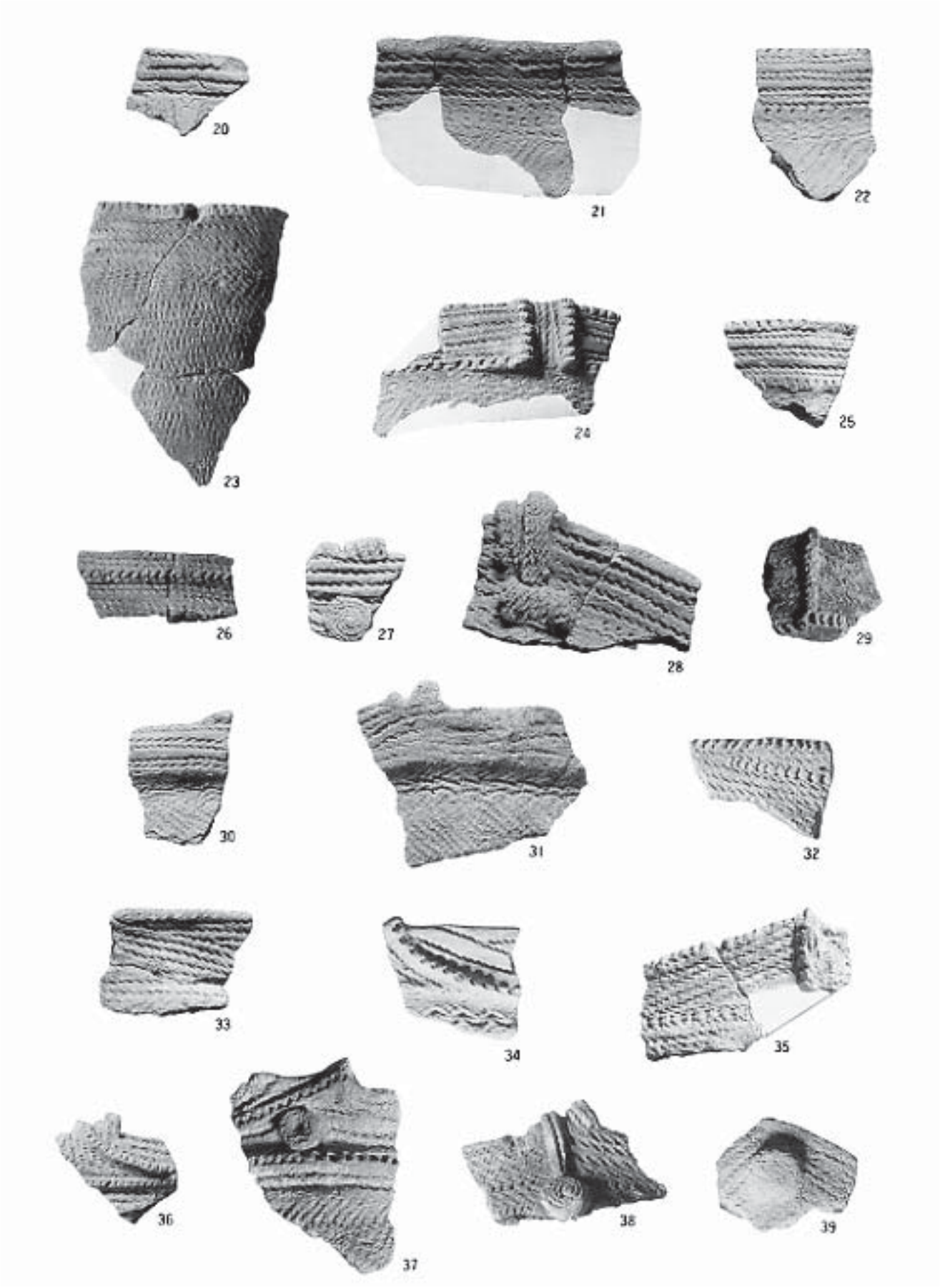


写真 18　遺構外出土遺物（土器 2）

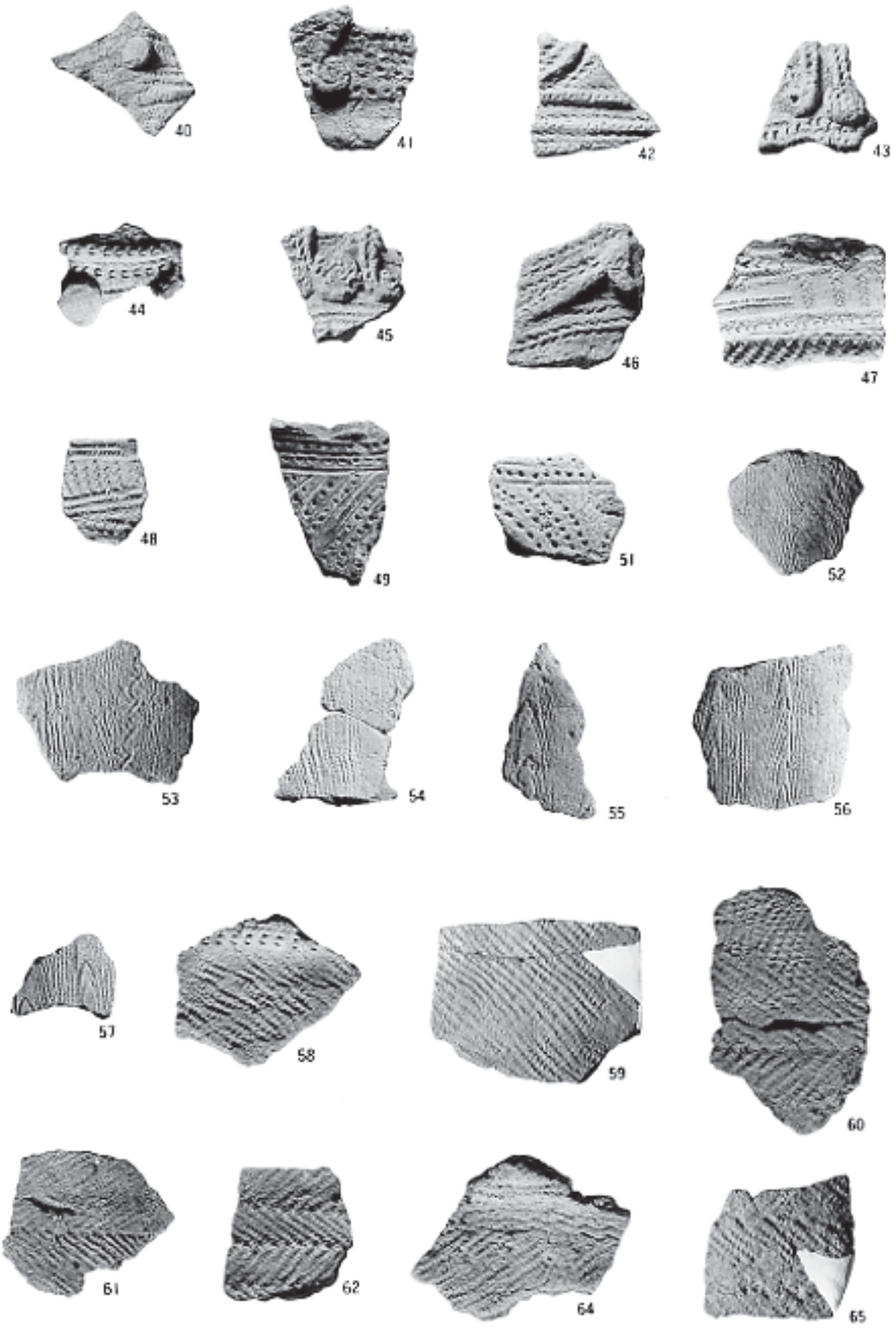


写真 19　遺構外出土遺物（土器 3）

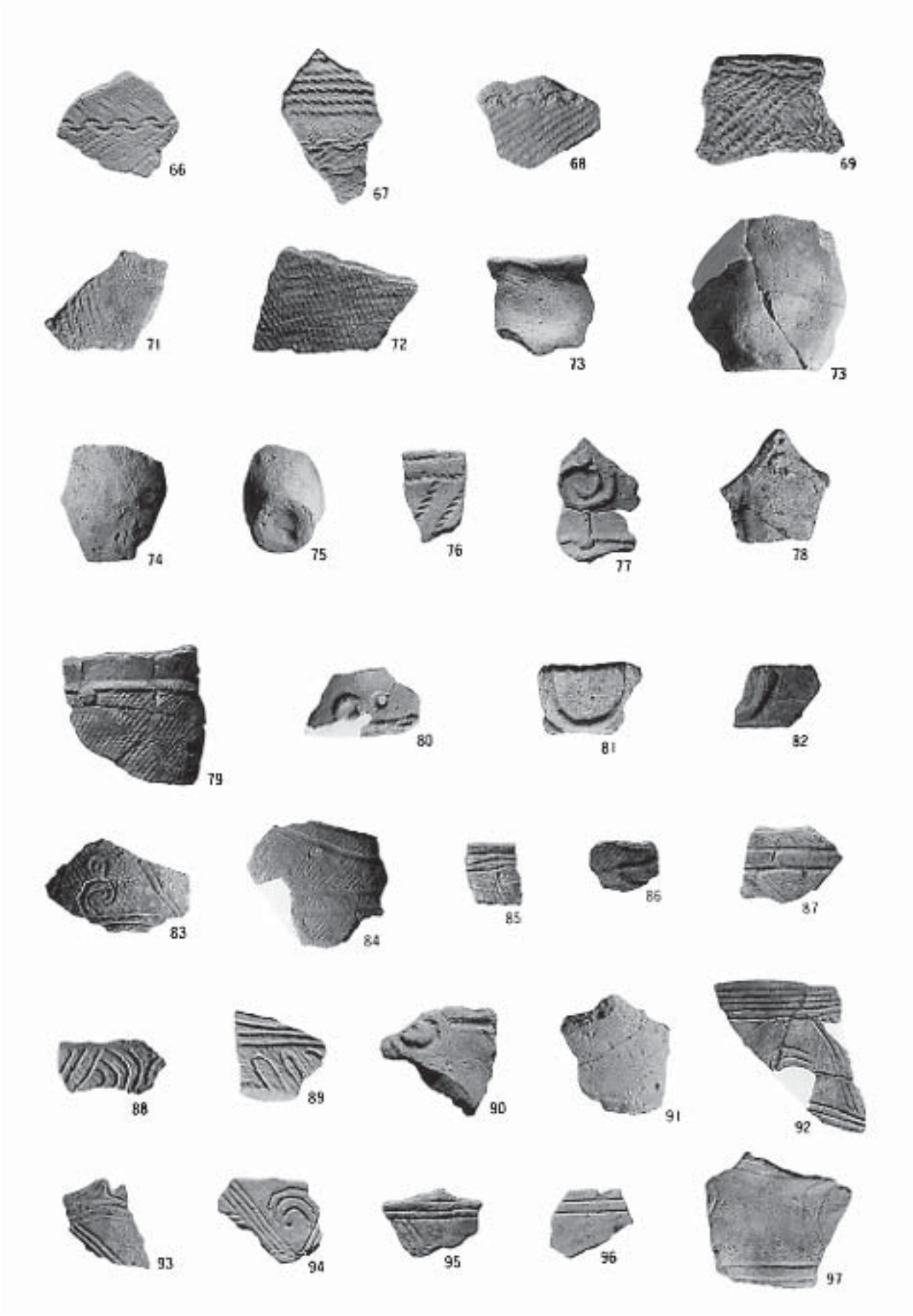


写真 20　遺構外出土遺物（土器 4）

写真 21　遺構外出土遺物（土器 5・石器）

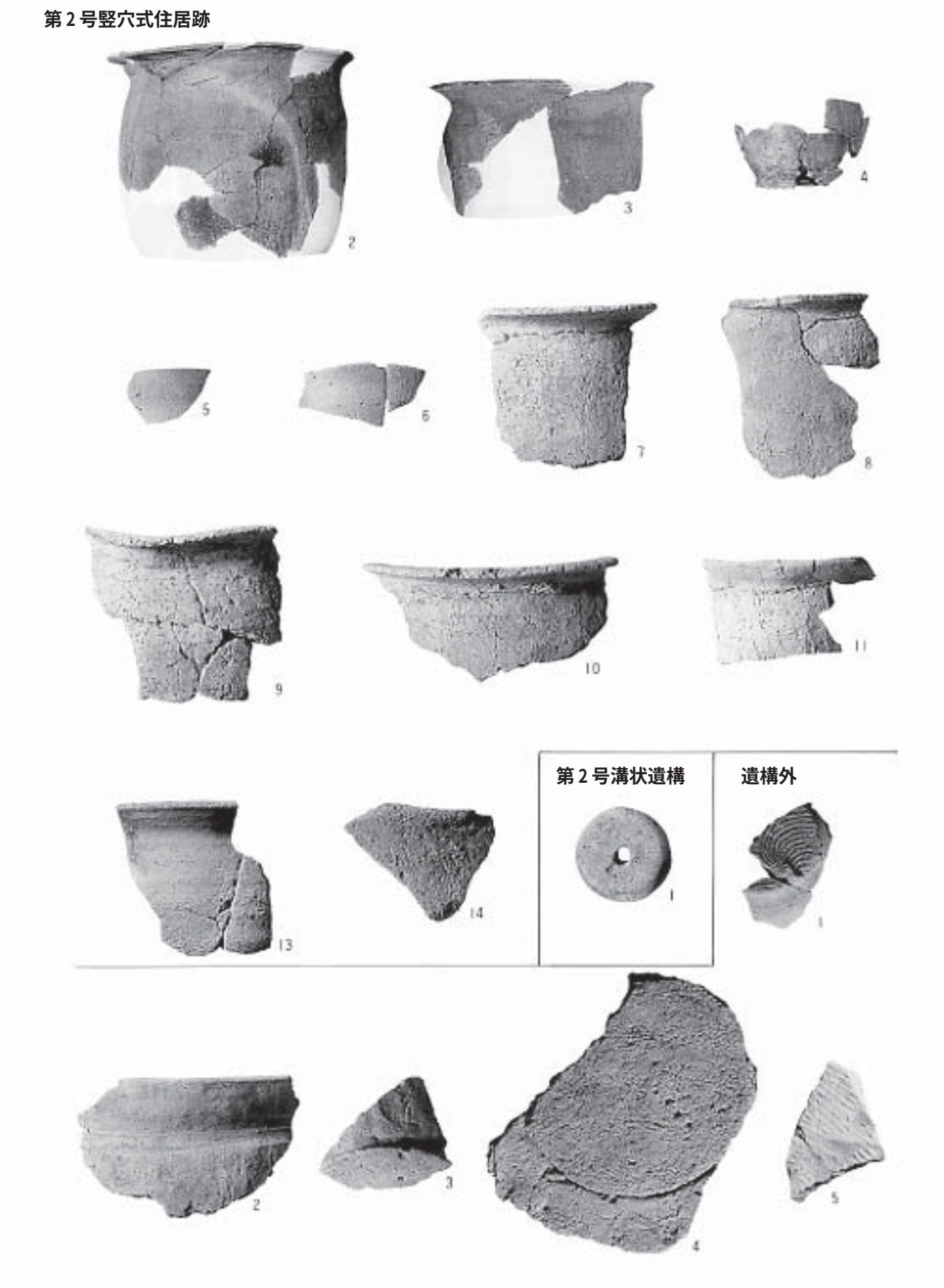


写真 22　第 2 号　竪穴式住居跡・第 2 号溝状遺構・遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しんまちのいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	新町野遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第37集
編著者名	田澤淳逸、児玉大成
編集機関	青森市教育委員会
所在地	〒030-8555　青森県青森市中央一丁目22－5　　TEL　0177－34－1111
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しんまちの 新町野	あおもりけんあおもりし 青森県青森市 ごうしざわあざまつもり 合子沢字松森	02201	161	40° 46′ 56″	140° 45′ 28″	19970602 ～ 19970904	3,500	道路建設(市道新町野野木道路改良事業)に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新町野	散布地	縄文	竪穴式住居跡　1軒 土坑　24基	土器 石器 土製品	
	集落跡	平安	竪穴式住居跡　2軒 溝状遺構　3条	土師器 須恵器 土製玉類	

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査報告書』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蛍沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
〃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書	第16集	1991	『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山（2）・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯（1）遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998	『桜峯（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書第37集

新町野遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平成10年3月31日

発　　行　青　森　市　教育　委　員　会

〒030－8555　青森市中央一丁目22－5

☎　0177－34－1111

印　　刷　青森オフセット印刷株式会社

〒030－0802　青森市本町二丁目11－16

☎　0177－75－1431